

# 美園

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

— 本 文 編 —

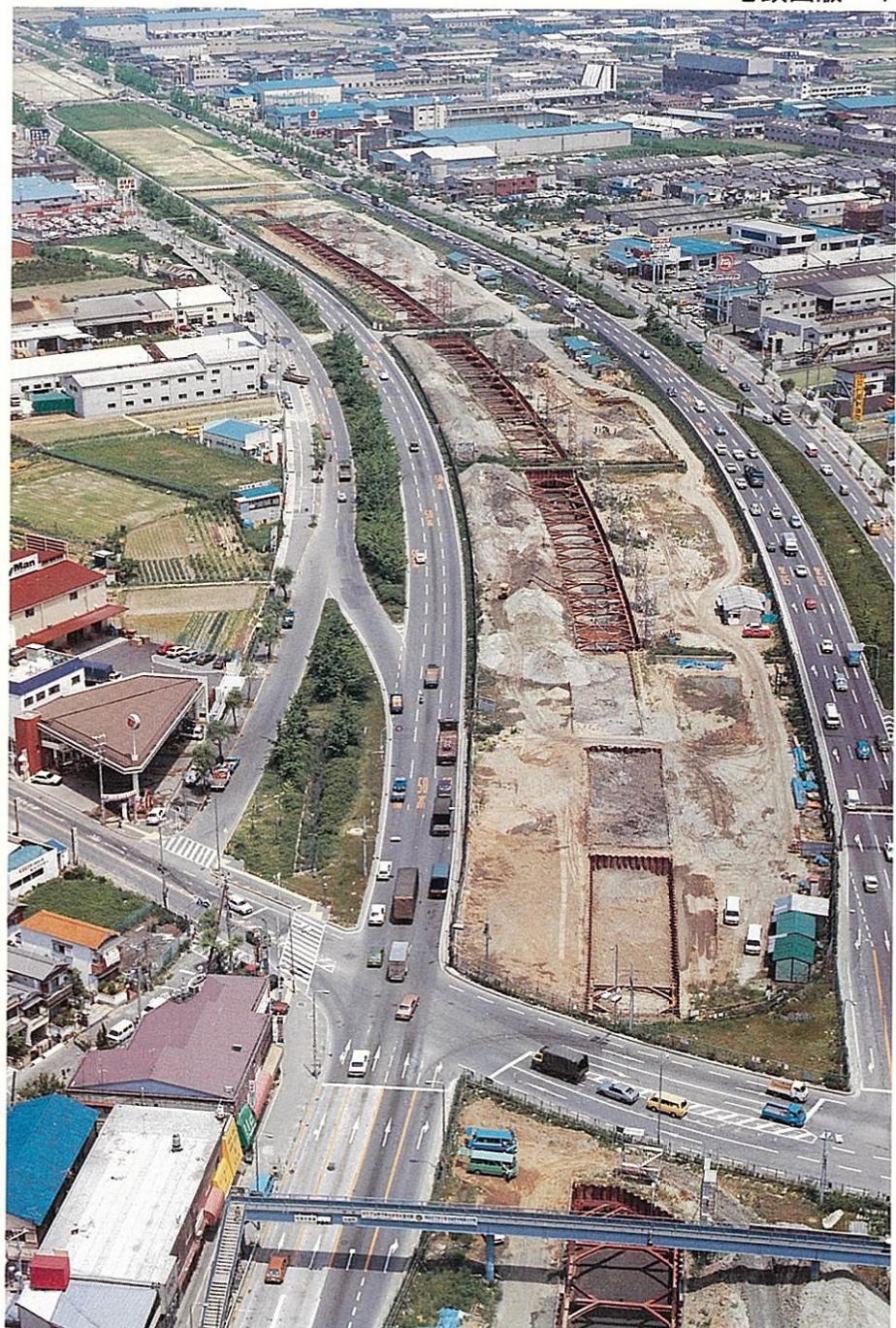
大阪府教育委員会  
財団法人 大阪文化財センター

# 美園

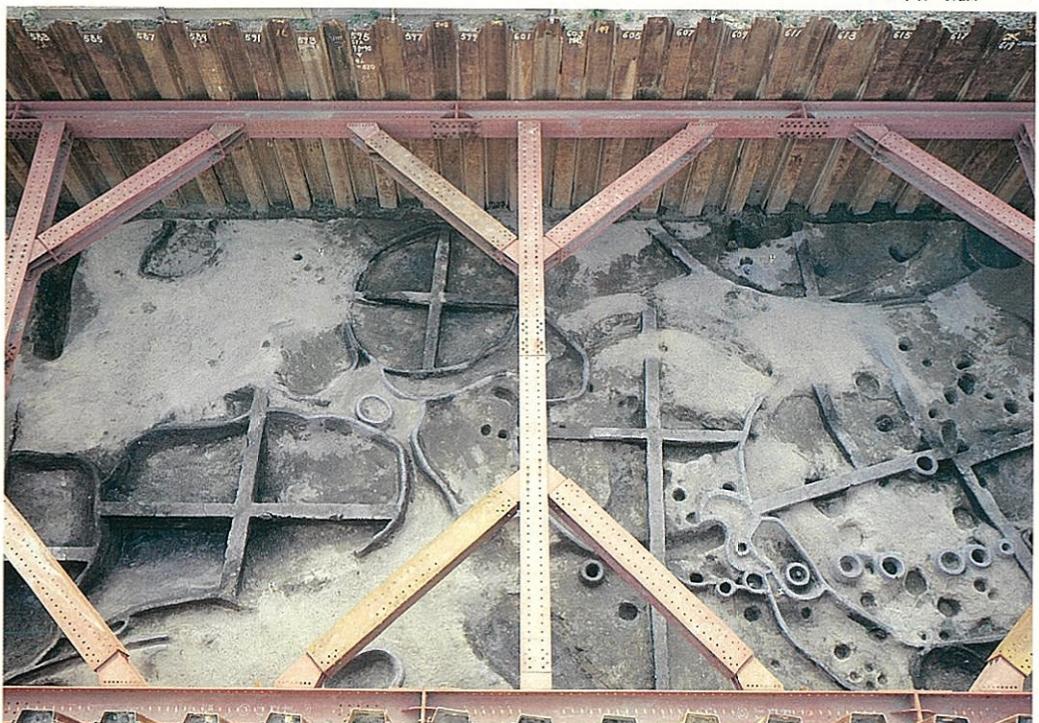
近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

— 本 文 編 —

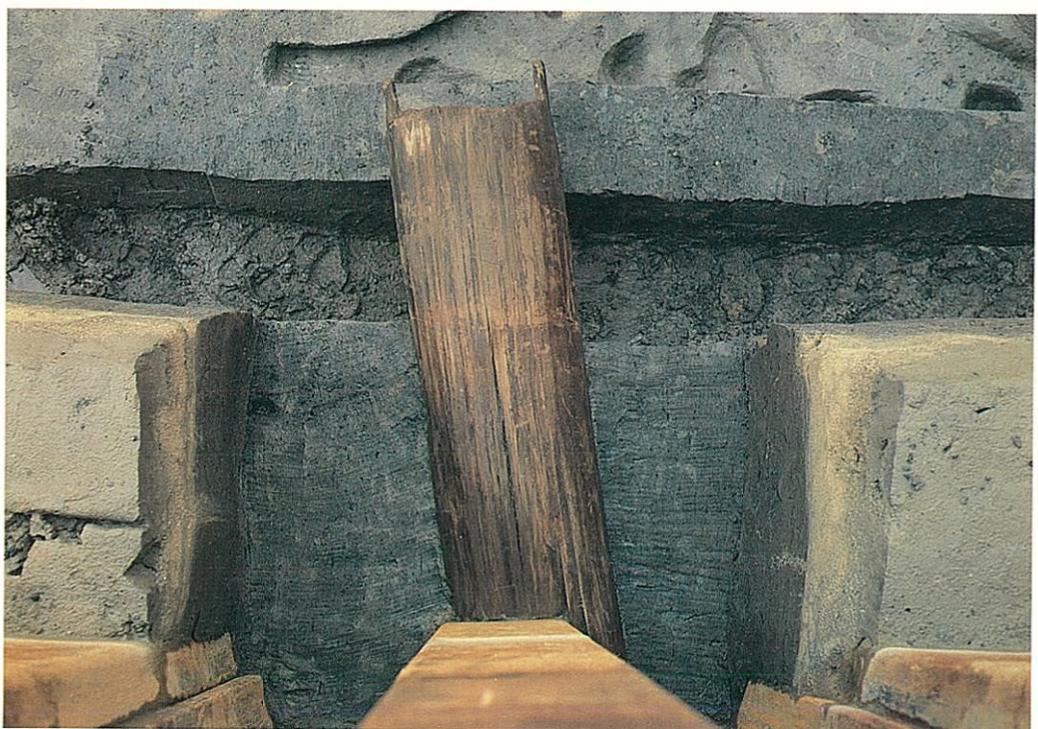
大阪府教育委員会  
財団法人 大阪文化財センター



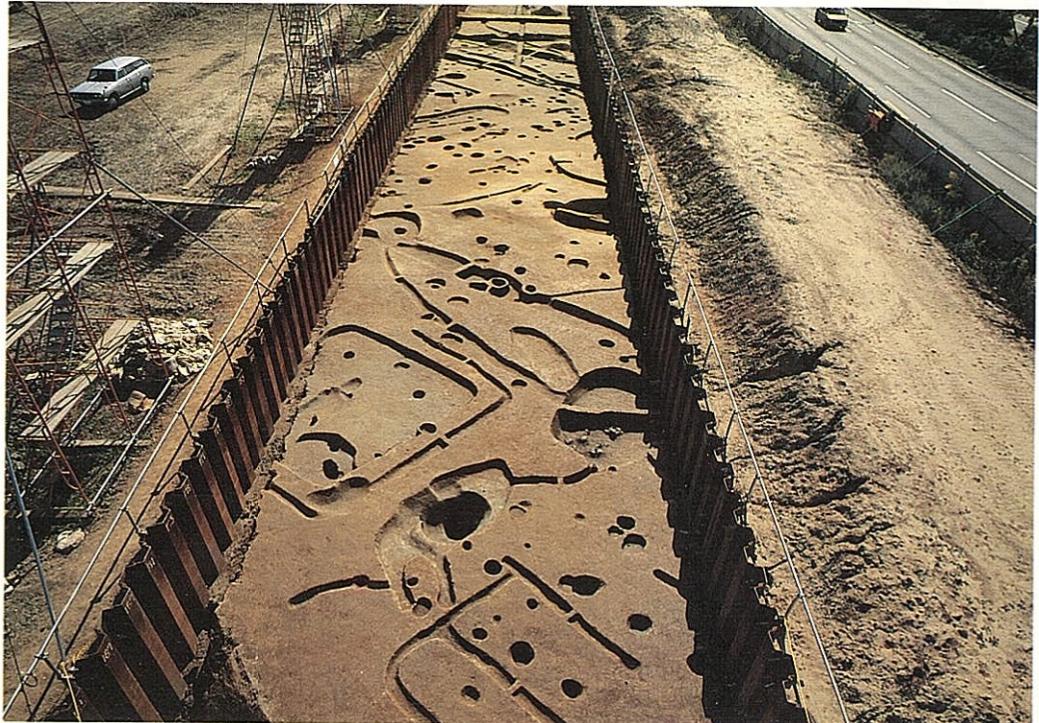
美園遺跡全景(南から)



B地区弥生時代前期竪穴住居跡(東から)



D地区古墳時代前期木棺状木製品(東から)



B地区古墳時代前期竪穴住居跡(北から)



C地区美園古墳周濠内埴輪出土状態(北から)



B・C・D地区出土弥生時代前・中期骨角器・石器



美園古墳出土家形埴輪A



美園古墳出土家形埴輪B

## 序 文

美園遺跡は昭和50年12日、ガス管埋設工事に際して、存在が知られるようになった遺跡である。今回の調査に際しては、既に調査が終了していた瓜生堂、山賀、若江北、亀井遺跡等の河内平野低地部における諸遺跡の関係を把握するため大きな期待がよせられていた。調査は日本道路公団と協議の結果、昭和55年12月から始め、昭和59年3月終了した。

調査の結果、弥生時代前期後半から中世にいたる多くの知見が得られた。中でも弥生前期の集落と古墳時代前期の方墳が特筆すべきものである。弥生時代前期の集落は墓域を伴って発見されている。集落又は墓域として個別の発見、調査は従来から度々行われていたが、集落と墓という生・死が有機的関連を持ちながら調査された例は、特に前期においては貴重な資料になると思われる。また、古墳時代にいたっては、一辺7mを測る方墳が発見された。河内平野における小方墳の存在は長原遺跡の調査以来知られており、美園遺跡の北側にある山賀遺跡、友井東遺跡等でも幾つかの知見を得ていた。今回発見された方墳は墳丘規模が小さいながらも、そこに置かれていた家形埴輪、壺形埴輪が注目された。特に家形埴輪は高床式の当時の家屋を写実的に型取ったもので、その外観、内装は当時の住居形式を考える上で欠かせぬ資料になると思われる。

これらの調査成果は従来考えられていたよりも多くの知見を得られた。

なお、調査の実施、報告書の作成にあたっては日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターをはじめ関係各位ならびに一般府民多数の方々のご援助を受けたことに深く感謝すると共に今後ともご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和60年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 吉房康幸

## 序 文

大和川水系の沖積作用によって形成された河内平野は、長年に亘る膨大な人々の営為を地中に止めながら現在その姿を急激に変えつつあります。昭和51年より開始された近畿自動車道天理～吹田線建設に先行する発掘調査によって、この平野をほぼ南北に縦断する大トレンチが入れられることになりました。現在までの調査で、このトレンチからはすでに私達の予想をはるかに越える大量の歴史的事実が確認されています。そればかりか、地表からは観察することが不可能な旧地形の変遷も解明されつつあります。

ここにその概要を紹介する美園遺跡も、今回の調査で内容が明らかとなった遺跡です。遺物から見れば縄文時代後期前葉より近代にかけての各時期のものが出土しており、河内平野の沖積地に立地するほとんどの遺跡がそうであるように複合集落遺跡と呼べるもので、遺構が認められる時期としても、弥生時代前期から近世に及ぶ八つの画期によって語ることができます。その中でも特に、弥生時代前期と古墳時代前期において集落の中心部分が発見されています。その他精巧な家形埴輪や特異な壺形埴輪を伴った小方墳、条里遺構の上限を示す可能性がある7世紀末の畦畔、平安時代末から鎌倉時代にかけて掘削された幅9mの大木路及びその時期の集落遺構の一部等が見つかっています。

最後に今回の調査においては、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、日本道路公団大阪建設局、同大阪工事事務所を始めとして調査関係各位、地元住民各位並びに多くの方々の御指導、御協力をいただきました。そのことに深く感謝すると共に今後とも変わぬ御指導を切望いたします。

昭和60年3月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤三之雄

## 例　　言

1. 本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う八尾市美園町1丁目～4丁目に所在する美園遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用、909,572,000円は、すべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は、昭和55年12月1日から昭和59年3月31日までの間実施した。
5. 出土遺物の基礎的整理を主とする遺物整理作業も発掘調査と並行して実施した。また本書の作成にかかる概略的な整理作業は、昭和59年3月31日で終了した。
6. 本調査は、大阪府教育委員会の指導の下に財団法人大阪文化財センターが実施した。調査並びに本書作成に関係した者は以下の組織表のとおりである。

### 調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	井上定清（昭和58年3月まで）
	同	小林廣喜（昭和58年4月から）
事務局次長兼総務課長	筒井康雄（昭和55年12月まで）	
同	大塚恭朗（昭和58年4月まで）	
同	尾田勝之（昭和58年5月から）	
主幹兼庶務係長	阪上允子、主査 田中喜代子、主事 秋山芳廣、灰本明子、千野和久、田口宗義、鎌山洋子、宮本哲男	
主幹兼普及係長	福岡澄男、技師 杉本直子、主事 小島容子	
調査総括責任者	業務課長	堀江門也（昭和56年3月まで）
	同	中井貞夫（昭和58年3月まで）
	同	石神 怡（昭和58年4月から）
	業務課主幹	椋尾孝彦（昭和58年3月まで）
	同	吉村信男（昭和58年4月から）
長田分室	主幹兼業務第1係長	中西靖人、主査 国乗和雄、技師 山口誠治
久宝寺分室	業務第2係長	渡辺昌宏、主査 井藤曉子（昭和58年8月まで）、技師 小野久隆、片山彰一、岡本敏行
	業務第3係長	玉井 功（昭和56年3月まで）

また、調査に際しては日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所、八尾警察署、八尾市教育委員会等に格別の配慮を受けた。調査及び遺物整理においては、以下の学生諸氏の

協力を得た。

赤尾きよみ、明田千晶、浅田善久、生野美起子、池上ちか子、池場稔、石川勝之、乾順一、井上佳子、入野博司、岩木円、植田富美、植松久明、氏野佳美、米嶋宏全、小倉みどり、小野元英、大島尚人、太田正康、大政直、大本明、岡直毅、岡崎英雄、岡崎康乃、荻美絵子、荻田展一、奥野広子、奥山朋子、大日向伸一、加藤弘子、片岡政久、片岡芳久、神沢一美、川崎一弘、貴志典子、喜多美奈子、喜多由美子、木元英策、菊田成、清井邦子、桐生誠司、桑原篤史、小池一志、小池廣子、木幡明、後藤悦子、河野俊子、近藤登茂子、嵯峨根正人、佐々木圭、佐藤茂、坂田淳、酒部浩司、崎谷忠弘、山藤見、柴田範子、島田幹士、下村寿邦、進藤武、須山充、末次貴美子、杉本佳依、瀬戸修、高美亜子、高山一敏、竹本聰美、竹村邦夫、田中千鶴、田辺佳代子、田村貴久、恒田和徳、寺川敏郎、富松敬一郎、中川康、中谷喜貞、中西昌毅、中野有美子、中村和美、西川嘉文、西田昭子、西田幸生、西畠徳二、西町達也、野藤和也、羽田純子、嵐井浩、英雅人、益田甲治、松井秀子、松尾明義、松川清隆、松崎英二、松下潤之、松田隆、松永峯和、的場隆之、丸尾圭子、萬谷幸美、三谷典之、三宅康弘、水谷由里、光田邦夫、宮下喜仁、村元利恵、森崎晃示、森田豊、矢追紀子、柳生治佳子、築瀬和孝、山口昌治、山下秀夫、山本秀樹、山本良一、吉川典世、吉川由希子、和田健路。(五十音順)

7. 本調査においては、遺物の分析に関して自然科学分野を含めて以下の諸氏及び機関の御指導御協力を受けた。また鑑定、玉稿をいただいている、記して深く感謝の意を表したい。

- ・弥生時代の石器……………花園大学 進藤 武
- ・古墳時代前期の土器に関して……花園大学 野藤和也、関西大学 萬谷幸美
- ・動物遺存体の同定……………大阪市立自然史博物館 樽野博幸
- ・植物遺存体の同定……………大阪市立大学 粉川昭平
- ・花粉・珪藻分析……………㈱パリノ・サーヴェイ
- ・木器の樹種鑑定……………奈良国立文化財研究所 光谷拓実、  
(財)元興寺文化財研究所 松田隆嗣
- ・赤色顔料の分析……………武庫川女子大学 安田博幸、奥野礼子
- ・土器の胎土分析……………㈱第四紀地質研究所 井上 巍
- ・石器の石質鑑定等……………奈良国立文化財研究所 秋山隆保
- ・<sup>14</sup>C年代測定……………京都産業大学 山田 治
- ・熱残留地磁気……………富山大学 広岡公夫、石原昭史
- ・灰像分析……………東京大学 松谷曉子
- ・熱変形弥生式土器……………奈良国立文化財研究所 沢田正昭、秋山隆保

(敬称略、順不同)

8. 本書の執筆は、渡辺昌宏、井藤暁子、小野久隆、岡本敏行、山口誠治、野藤和也、築瀬和孝、進藤武、萬谷幸美、山藤見、崎谷忠弘が分担して行なった。文責は第Ⅳ・第Ⅴ章を除いて

各文末に記した。遺構写真は各担当の他に、一部片山彰一が撮影した。遺物写真の撮影、焼付は片山と光田邦夫、森田豊が担当している。遺物整理、遺構・遺物の製図トレースについては、各担当が中心となり学生諸氏の協力を得て実施した。

9. 第Ⅶ章は、調査担当者全員が討議した結果をふまえ渡辺がまとめた。
10. 整理期間等の時間的制約から遺構、遺物の記載に不充分な所も多々あるが、後年刊行予定の報告書においてその責務を全うしたい。
11. 本書の編集は、渡辺が行なった。
12. 本書第Ⅷ章第2節第4項以降については、紙数の関係から当初の編集方針に反して遺構・遺物の記載を表でまとめざるをえなかった。なお表の作成及び編集では、中西靖人、国乗和雄、土生稔、吉井裕武の諸氏に助力を得た。校正では、中村享史、深沢吉隆の両氏より協力を受けた。
13. 本調査にあたっては、写真・実測図などの記録を作成すると共に、カラースライドも多数作成した。広く各方面で利用されることを希望する。
14. 本調査及び遺物整理、概要報告書作成作業においては、多くの方々から直接間接の御指導、御教授を受けた。紙数の関係から、御名前を挙げて感謝の意を表わすことができない失礼を最後にお詫びしたい。

## 凡　　例

1. 本調査における座標は、全て国土座標を用いた。これに基づき各遺構平面図にはX軸、Y軸の座標をメートル単位で表記した。
2. 各遺構平面図の方位は、上記座標の北をNとして示した。しかし一部で磁北を使用しているものについてはM.Nで表わしている。美園遺跡周辺部での磁北は座標北より西へ6度30分、真北は座標北より東へ18分の方向にある。
3. 遺構は、アルファベット記号の3桁の数列の組み合わせで表記した。アルファベット記号の最初の一文字(A~G)は調査地区名を表わしている。次の二字は遺構の種類を略号で表わした。S D:溝、S A:畦畔・里道・杭列、S E:井戸、S I:竪穴住居、S B:掘立柱建物、S K:土坑、S P:柱穴(但し掘立柱建物、竪穴住居の各柱穴についてはP 1、P 2……で表現する)、N R:自然河川、S X:その他の遺構。

3桁の数列の最初の数字は時代を表わし、1:縄文時代、2:弥生時代、3:古墳時代(庄内式を含む)、4:飛鳥時代から平安時代まで、5:鎌倉・室町時代、6:江戸時代以降を示している。

3桁の数列の下2桁は、A~Gまでの各調査区ごとの同一時代における同種遺構の通し番号を表現してある。

例:A S D201はA地区の弥生時代溝跡の1番目を示す。

4. 遺構実測図、遺物出土状況実測図、遺構変遷図の縮尺率は、10分の1、20分の1、30分の1、40分の1、50分の1、60分の1、80分の1、200分の1、1000分の1、2000分の1を基本として使用し、一部縮尺不同的のものを含む。
5. 遺物実測図の縮尺率は以下のとおりである。

土器:2分の1・4分の1・8分の1、埴輪:8分の1、石器・骨角器:3分の2、木器:原寸・2分の1・3分の1・4分の1・6分の1・8分の1・縮尺不同、金属器:2分の1。

6. 遺物実測図の番号は各調査区ごとに通し番号を付け、番号の前に各調査区(A~G)のアルファベットを記入した。例:A 001~、B 001~……。

遺物実測図の番号と写真図版の遺物番号とは一致させている。また遺物出土状況実測図中の遺物番号も、遺物実測図の番号と共に通する。

7. 遺物実測図の断面は、原則として白ぬきにした。土器の場合、生駒西麓産(肉眼観察で角閃石が見える土器)については断面に網目を入れ、須恵器については黒く塗った。
8. 木器で焼け焦げのあるものには、遺物実測図でその部分に網目を入れて示した。
9. 遺構実測図中の遺構番号は、すべてを図に入れることはできなかった。

10. 本書に掲載した遺物は、遺構の一括資料を中心に包含層中出土のものも合わせて示した。遺構の一括資料の場合でも、全てを掲載できたものはごく一部である。
11. C 地区の弥生時代後期末から古墳時代前期の土器については、本書第Ⅴ章第5節で設定した器種分類と時期区分を使用している。
12. 本文中における土器の形態名称は、原則的には弥生時代まで「……形土器」と呼ぶことにするが、庄内式以降についてはそれを省略している。但し手焙形土器だけは省略を差し控えた。
13. 本文中で胎土の特徴から、在地産と考えている土器類の中には、本遺跡を含む平野部の周辺遺跡で製作された土器が混っている可能性が大きい。
14. 本文中の用語、記載方法等において、執筆者の考えを尊重して部分的にあえて統一していないところもある。

# 美園

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

## 目 次

巻頭カラー図版 1～5

序 文

例 言

凡 例

第Ⅰ章 はじめに	1
第Ⅱ章 位置と環境	2
第Ⅲ章 調査方法	6
第1節 第1次調査	6
第2節 第2次調査	8
第Ⅳ章 調査結果	11
第1節 層序	11
第1項 層序の概要	11
第2項 各地区の層序	13
(1) A地区	13
(2) B地区	16
(3) C地区	19
(4) D地区	23
(5) E・F・G地区	26
第2節 遺構及び遺物	28
第1項 縄文時代	28
1. 後期	28
(1) B地区	28
2. 晩期	29
(1) B地区	29
(2) D・F地区	29
3. 小結	31
第2項 弥生時代	31
1. 前期	31

(1) A 地区	31
(2) B 地区	36
(3) C 地区	142
(4) D・E・G 地区	150
2. 中期	153
(1) A 地区	153
(2) B 地区	155
(3) C 地区	166
(4) D 地区	192
3. 後期	212
(1) C 地区	212
4. 小結	212
第3項 古墳時代	214
1. 前期（庄内式）	214
(1) A 地区	214
(2) B 地区	214
(3) C 地区	219
(4) D・E 地区	280
2. 前期（布留式）	326
(1) A 地区	326
(2) B 地区	332
(3) C 地区	381
(4) D・G 地区	412
3. 中期	414
(1) A 地区	414
(2) B 地区	414
(3) C 地区	416
(4) D・G 地区	417
4. 後期	421
(1) A 地区	421
(2) B 地区	421
(3) C 地区	423
5. 小結	423
第4項 古代	426

1. 飛鳥時代	426
2. 奈良時代	433
3. 平安時代	433
第5項 中世	436
1. 鎌倉時代	436
2. 室町時代	439
第6項 近世	446
1. 江戸時代	446
第Ⅶ章 遺構・遺物の検討	449
第1節 中河内沖積地における縄文時代後・晩期の状況	449
第2節 美園遺跡の弥生時代前期集落	457
第3節 美園遺跡出土の弥生時代前期後半～中期初頭の土器について	464
第4節 美園遺跡における石棺製作工程の分析	493
第5節 美園遺跡出土の弥生時代後期末から古墳時代前期の土器	504
第6節 美園遺跡出土のS字状浮文土器について	510
第7節 美園遺跡出土の手焙形土器について	517
第8節 美園古墳と集落の関係	532
第9節 美園遺跡の埋没条里	539
第10節 美園遺跡F S K501出土瓦器椀について	547
第Ⅷ章 自然遺物とその他の分析	551
第1節 美園遺跡出土の動物遺存体	551
第2節 美園遺跡出土の植物遺存体	552
第3節 美園遺跡花粉・珪藻分析報告	562
第4節 美園遺跡の遺構土壤面で検出された赤色顔料分質の化学分析	608
第5節 美園遺跡出土土器胎土分析報告	610
第6節 石器の材質及び産地推定の試み	635
第7節 液体シンチレーションによる美園遺跡の <sup>14</sup> C年代決定	646
第8節 美園遺跡焼土(B S X207)の考古地磁気測定	648
第9節 八尾市美園遺跡出土の変形を受けた土器について	655
第10節 美園遺跡の灰像分析	679
第Ⅸ章 総括	684
第1節 美園遺跡の変遷	684
第2節 調査成果と今後の課題	689

## 挿 図 目 次

第 1 図 美園遺跡と周辺遺跡	3
第 2 図 美園遺跡調査区位置図	10
第 3 図 A地区土層断面図	14
第 4 図 B地区土層断面図	17
第 5 図 C地区土層断面図	21
第 6 図 D地区土層断面図	24
第 7 図 E地区土層断面図	25
第 8 図 F地区土層断面図	26
第 9 図 G地区土層断面図	27
第 10 図 B N R 101土層断面図	28
第 11 図 B地区出土縄文時代後期土器	29
第 12 図 F N R 102遺物出土状態図	30
第 13 図 F N R 102出土縄文時代後・晩期土器	30
第 14 図 A S K 201遺物出土状態図	32
第 15 図 A S K 201出土土器	32
第 16 図 A S D 208・213、A S K 207土層断面図	34
第 17 図 A N R 201土層断面図	36
第 18 図 B地区弥生時代前期包含層出土土器	37
第 19 図 B地区弥生時代前期包含層出土石器(1)	39
第 20 図 B地区弥生時代前期包含層出土石器(2)	41
第 21 図 B地区弥生時代前期包含層出土石器(3)	42
第 22 図 B地区弥生時代前期包含層出土石器(4)	45
第 23 図 B地区弥生時代前期包含層出土石器(5)	46
第 24 図 B地区弥生時代前期包含層出土石器(6)	47
第 25 図 B地区弥生時代前期包含層出土石器(7)	48
第 26 図 B地区弥生時代前期包含層出土木器	48
第 27 図 B S I 201実測図	50
第 28 図 B S I 202実測図	51
第 29 図 B S I 202上層焼土検出状態図	52
第 30 図 B S I 202壁溝内遺物出土状態及び柱根出土状態図	52
第 31 図 B S I 203実測図	53

第 32 図	B S I 204実測図	54
第 33 図	B S I 205実測図	55
第 34 図	B S I 206周辺住居跡群実測図	56
第 35 図	B S I 206周辺遺構土層断面図	57
第 36 図	B S I 206・208出土石器・骨角器	58
第 37 図	B S I 206・208、B S B 203・204出土木器	59
第 38 図	B S B 201実測図	63
第 39 図	B S B 201出土柱根実測図	64
第 40 図	B S B 202実測図	65
第 41 図	B S A 201柱根検出状態及びB地区北側柱根出土ピット実測図	67
第 42 図	B S X 202実測図	69
第 43 図	B S X 204実測図	70
第 44 図	B S X 206実測図	70
第 45 図	B S D 201遺物出土状態及び土層断面図	71
第 46 図	B S D 201出土土器	72
第 47 図	B S D 203土層断面図	73
第 48 図	B S D 205遺物出土状態及び土層断面図	74
第 49 図	B S D 210土層断面図	75
第 50 図	B S D 212遺物出土状態及び土層断面図	76
第 51 図	B S D 212出土遺物	77
第 52 図	B S D 206・215・219土層断面図	78
第 53 図	B S D 220及び周辺遺構遺物出土状態図	79・80
第 54 図	B S D 220及び周辺遺構断面図	81
第 55 図	B S D 220出土土器(1)	82
第 56 図	B S D 220出土土器(2)	83
第 57 図	B S D 220出土石器	85
第 58 図	B S D 220出土木器	86
第 59 図	B S D 222出土土器	87
第 60 図	B S D 228遺物出土状態図	88
第 61 図	B S D 229実測図	89
第 62 図	B S D 229出土土器	89
第 63 図	B S D 230遺物出土状態図	90
第 64 図	B S D 230出土土器	91
第 65 図	B S D 230出土石器	92

第 66 図	B S D234実測図	93
第 67 図	B S D235土層断面図	93
第 68 図	B S D235出土土器	93
第 69 図	B S D236・244土層断面図	94
第 70 図	B S D240遺物出土状態及び土層断面図	95
第 71 図	B S D215・240出土木器	95
第 72 図	B S D242・243土層断面図	96
第 73 図	B S D253土層断面図	97
第 74 図	B S D255出土土器	98
第 75 図	B S D201・204・208、B S K209・226・229・246・260出土石器	99
第 76 図	B S D223・245、B S K205・209・224・229・231出土石器	100
第 77 図	B S K203実測図	101
第 78 図	B S K205遺物出土状態及び土層断面図	101
第 79 図	B S K205・208出土土器	102
第 80 図	B S K206土層断面図	102
第 81 図	B S K207遺物出土状態及び土層断面図	103
第 82 図	B S K207出土遺物	103
第 83 図	B S K208・211実測図	104
第 84 図	B S K209遺物出土状態及び断面図	105
第 85 図	B S K210遺物出土状態及び断面図	107
第 86 図	B S K210出土遺物	108
第 87 図	B S K210出土木器	109
第 88 図	B S K212・213土層断面図	110
第 89 図	B S K214・215実測図	110
第 90 図	B S K218出土木器	111
第 91 図	B S K218出土木器	112
第 92 図	B S K220遺物出土状態図	113
第 93 図	B S K209・219・225・248・256・260出土木器	114
第 94 図	B S K227・228遺物出土状態図	115
第 95 図	B S K228出土土器	115
第 96 図	B S K230遺物出土状態図	116
第 97 図	B S K230出土土器(1)	117
第 98 図	B S K230出土土器(2)	118
第 99 図	B S K230出土土器(3)	119

第 100 図	B S K 230出土土器(4) .....	120
第 101 図	B S K 231・232出土土器.....	121
第 102 図	B S K 233遺物出土状態図 .....	122
第 103 図	B S K 229・233出土土器.....	122
第 104 図	B S K 235実測図 .....	123
第 105 図	B S K 238土層断面図 .....	123
第 106 図	B S K 241・245遺物出土状態及び土層断面図.....	124
第 107 図	B S K 241出土土器 .....	125
第 108 図	B S K 242遺物出土状態 .....	126
第 109 図	B S K 243・246土層断面図.....	127
第 110 図	B S K 237・244遺物出土状態及び土層断面図.....	127
第 111 図	B S K 258遺物出土状態及び土層断面図 .....	129
第 112 図	B S K 258出土土器 .....	130
第 113 図	B S K 260遺物出土状態及び土層断面図 .....	131
第 114 図	B S K 260出土土器(1) .....	132
第 115 図	B S K 260出土土器(2) .....	133
第 116 図	B S K 260出土土器(3) .....	134
第 117 図	B S K 260出土土器(4) .....	135
第 118 図	B S K 261土層断面図 .....	136
第 119 図	B S K 261出土土器 .....	136
第 120 図	B S K 261出土木器 .....	136
第 121 図	B S K 262実測図 .....	137
第 122 図	B S A207、B S I 212、B S K 267・268出土土器.....	138
第 123 図	B S K 269実測図 .....	139
第 124 図	B S X 205遺物出土状態図 .....	139
第 125 図	B S X 205出土土器 .....	140
第 126 図	B S X 207上層及び下層実測図 .....	141
第 127 図	B S X 207土層断面図 .....	143・144
第 128 図	C地区弥生時代前期包含層出土土器.....	146
第 129 図	C002出土状態平面図 .....	146
第 130 図	C地区弥生時代前期包含層出土自然石投石? .....	147
第 131 図	C S K 201平面、土層断面図及び出土土器 .....	148
第 132 図	C S D 201、C N R 201土層断面図.....	149
第 133 図	D地区包含層、D S X 201、G S X 202出土弥生時代前期土器.....	150

第 134 図	D N R 201出土土器	151
第 135 図	G S X 202遺物出土状態図	152
第 136 図	D S A 203断面図	153
第 137 図	A N R 202土層断面図	154
第 138 図	A S D 214土層断面図	154
第 139 図	A S K 208実測図	155
第 140 図	B S A 210・211土層断面図	156
第 141 図	B S X 208土層断面図	156
第 142 図	B 地区北側弥生時代中期 I 遺構面全体図	157・158
第 143 図	B S X 210・211土層断面図	159
第 144 図	B S K 270遺物出土状態及び土層断面図	160
第 145 図	B S K 270及び中期 I 遺構面出土土器	160
第 146 図	B S D 258土層断面図	162
第 147 図	B 地区弥生時代中期 II 遺構面出土土器	163
第 148 図	B 地区中央部弥生時代中期 II 遺構面 (B N R 202) 実測図	164
第 149 図	B N R 202土層断面図	164
第 150 図	B N R 203土層断面図	165
第 151 図	B 地区北側弥生時代中期 II 遺構面 (B N R 203) 実測図	165
第 152 図	C 地区弥生時代中・後期包含層出土土器	167
第 153 図	C 地区弥生時代中期包含層出土土器	168
第 154 図	C 地区弥生時代中期包含層出土石器(1)	170
第 155 図	C 地区弥生時代中期包含層出土石器(2)	171
第 156 図	C 地区弥生時代中期包含層出土石器(3)	172
第 157 図	C 地区弥生時代中期包含層出土石器(4)	173
第 158 図	C 地区弥生時代中期包含層出土石器(5)	174
第 159 図	3 C トレンチ C N R 202出土木器	176
第 160 図	C S D 202出土土器	178
第 161 図	C S D 202西側周辺部出土土器	179
第 162 図	C トレンチ弥生時代中期遺構平面及び土層断面図	180
第 163 図	C S E 201平面・土層断面図及び出土土器	181
第 164 図	C S E 201、C S K 204・206・210出土石器	183
第 165 図	C S K 204平面・土層断面図及び出土土器	184
第 166 図	C S E 202平面・土層断面図及び出土土器	185
第 167 図	C S E 202出土石器	185

第 168 図	7 C トレンチ弥生時代中期遺構平面図及び土層断面図	187
第 169 図	C S K208出土石器	188
第 170 図	8 C トレンチ弥生時代中期遺構平面図及び土層断面図	189
第 171 図	C S K211平面、土層断面図及びC S K209・211出土土器	190
第 172 図	D S D204石器出土状況	193
第 173 図	D S D208遺物出土状況	195
第 174 図	D S D208遺物出土状況	195
第 175 図	D S K202遺物出土状況	196
第 176 図	D S X205遺物出土状況	197
第 177 図	D S X204遺物出土状況	198
第 178 図	D S X205遺物出土状況	198
第 179 図	D S X206遺物出土状況	199
第 180 図	D S X207弥生中期木棺？平面図	200
第 181 図	D S X205、D S D206出土土器	200
第 182 図	包含層、D S X205、D S X206、D S D208出土土器	201
第 183 図	包含層、D S X206、D S X208、D N R203、D N R204、D S D311出土土器	202
第 184 図	D S K203、D S D204出土土器	203
第 185 図	D S X205、D S D207、D S D208出土土器	204
第 186 図	D S K201、D S D205、D S X204出土土器	205
第 187 図	D S X204、D S K202出土土器	206
第 188 図	D S X209出土土器	207
第 189 図	D S D204、2 D トレンチ遺構面出土石器	208
第 190 図	D トレンチ、1 D トレンチ、2 D トレンチ出土石器	209
第 191 図	D 地区、D S D206、1 D トレンチ出土石器	210
第 192 図	D 地区包含層、D S D206出土石器	211
第 193 図	B S D303遺物出土状態図	215
第 194 図	B S D303出土土器	215
第 195 図	B S D305遺物出土状態図	216
第 196 図	B S D306・318土層断面図	217
第 197 図	B S D310土層断面図	218
第 198 図	B S D312土層断面図	218
第 199 図	B S D305・312、B P301出土土器	219
第 200 図	C 地区古墳時代前期（庄内式）包含層出土土器(1)	222
第 201 図	C 地区古墳時代前期（庄内式）包含層出土土器(2)	223

第 202 図	C 地区古墳時代前期（庄内式）包含層出土土器(3).....	224
第 203 図	4 C トレンチ古墳時代前期（庄内式）包含層出土土器.....	225
第 204 図	C 地区古墳時代前期（庄内式）石器.....	226
第 205 図	C 地区古墳時代前期（庄内式）包含層出土木器.....	227
第 206 図	C トレンチ中央部古墳時代前期（庄内式）遺構平面図及び土層断面図.....	229・230
第 207 図	C S D 302出土土器 .....	231
第 208 図	C S D 304上層出土遺物 .....	232
第 209 図	C S D 303・304・305・308・313平面図及び土層断面図 .....	233・234
第 210 図	C S D 305出土遺物(1) .....	236
第 211 図	C S D 305出土遺物(2) .....	237
第 212 図	C S K 301平面図及び断面図 .....	240
第 213 図	C S K 301出土土器 .....	241
第 214 図	C S K 308出土土器 .....	242
第 215 図	3 C トレンチ C S D 312平面図及び土層断面図 .....	245
第 216 図	C S D 312出土土器 .....	246
第 217 図	4 C トレンチ古墳時代前期（庄内式）遺構平面図.....	247
第 218 図	4 C トレンチ古墳時代前期（庄内式）各遺構の土層断面図.....	248
第 219 図	C S I 301内 C S K 302出土土器.....	249
第 220 図	C S K 303平面図及び土層断面図 .....	250
第 221 図	C S K 303出土土器 .....	251
第 222 図	5 C トレンチ C S D 308、C S D 313平面図及び土層断面図.....	252
第 223 図	C S D 313及び C S D 308土層断面図.....	253
第 224 図	C S D 313出土土器(1) .....	254
第 225 図	C S D 313出土土器(2) .....	255
第 226 図	C S D 313上層出土土器 .....	256
第 227 図	6 C トレンチ古墳時代前期（庄内式）遺構平面図.....	257
第 228 図	6 C トレンチ古墳時代前期（庄内式）溝の土層断面図.....	258
第 229 図	C S D 314出土遺物 .....	259
第 230 図	C S E 301木杵井戸平面図及び側面図 .....	260
第 231 図	C S E 301出土土器 .....	261
第 232 図	C S D 317平面図及び土層断面図 .....	262
第 233 図	C S D 317出土遺物 .....	263
第 234 図	C 地区南端部古墳時代前期（庄内式）遺構平面図及び土層断面図.....	265・266
第 235 図	C S D 319出土土器(1) .....	268

第 236 図	C S D319出土土器(2) .....	269
第 237 図	C S D319出土土器(3) .....	270
第 238 図	C S D320出土土器(1) .....	271
第 239 図	C S D320出土土器(2) .....	272
第 240 図	C 地区各遺構出土土器 (C269・C S D305出土、C270・C S D318出土、C271・C S X301出土).....	273
第 241 図	8 C トレンチ C S X301平面図及び土層断面図 .....	274
第 242 図	8 C トレンチ C S X301下層遺構平面図及び土層断面図 .....	275
第 243 図	C S K307木製鋤出土状態平面図及び側面図 .....	276
第 244 図	C S K307出土木製鋤 .....	277
第 245 図	D S D215・216・217遺構図 .....	282
第 246 図	D S D216壠断面図 .....	283
第 247 図	D S D216出土木製品 .....	284
第 248 図	D S E201遺構図 .....	285
第 249 図	D S E201出土木製品 .....	285
第 250 図	D S E201出土木製品 .....	285
第 251 図	庄内 I 面出土土器 .....	286
第 252 図	D P201遺構図 .....	286
第 253 図	D 地区包含層出土遺物 .....	287
第 254 図	2 D トレンチ包含層出土遺物 .....	287
第 255 図	D S D304出土土器 .....	289
第 256 図	D S D304出土土器 .....	290
第 257 図	D S K306遺構図 .....	293・294
第 258 図	D S K306出土土器 .....	295
第 259 図	D S K306出土遺物 .....	296
第 260 図	D S K306出土木製品 .....	297
第 261 図	D S K306出土木製品 .....	298
第 262 図	D S E301遺物出土状況 .....	300
第 263 図	D S E301遺物出土状況 .....	300
第 264 図	D S E301上層 (D111・D112)・下層 (D113・D114) 出土土器 .....	301
第 265 図	庄内 II 、 D S E301下層出土土器 .....	301
第 266 図	包含層、I・II面出土土器 .....	302
第 267 図	D S X302付近遺物出土状況 .....	303
第 268 図	D S X302遺物出土状況 .....	304

第 269 図 D S X302付近遺物出土状況	304
第 270 図 庄内Ⅱ面出土土器	305
第 271 図 庄内包含層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ面出土土器	306
第 272 図 木棺状木製品内・付近出土土器	307
第 273 図 D S D312出土土器	307
第 274 図 木棺状木製品出土状況	308
第 275 図 木棺状木製品	309
第 276 図 D S D317遺物出土状況（下層）	311
第 277 図 D S D317遺物出土状況（上層）	312
第 278 図 D S D317出土土器（下層）	313
第 279 図 D S D317出土土器（上層）	314
第 280 図 D S D318付近遺物出土状況	315
第 281 図 D S D320遺物出土状況	316
第 282 図 D S D323出土土器	317
第 283 図 庄内包含層Ⅱ・Ⅲ面出土土器	318
第 284 図 4 D トレンチ遺構面出土土器	319
第 285 図 3 D トレンチ包含層・遺構面出土土器	320
第 286 図 D S E302遺物出土状況	321
第 287 図 D S E302付近出土土器	321
第 288 図 D P 322土器出土状況	322
第 289 図 D S X304出土土器	322
第 290 図 D S X304出土土器	323
第 291 図 D S X304出土土器	324
第 292 図 A S X301土器棺出土状態図	327
第 293 図 A S X301出土土器棺	328
第 294 図 A S D302・303土層断面図	329
第 295 図 A S D305土層断面図	330
第 296 図 B 地区古墳時代前期包含層出土土器	332
第 297 図 B 地区古墳時代前期遺構面出土石器及び土製品	334
第 298 図 B 地区中央部古墳時代前期（上層）遺構面（住居跡群）平面図	335・336
第 299 図 B S I 301実測図	338
第 300 図 B S I 302・303実測図	339
第 301 図 B S I 304実測図	340
第 302 図 B S I 305・306実測図	341

第 303 図	B S I 307実測図	343
第 304 図	B S B 301実測図	344
第 305 図	B S B 302実測図	346
第 306 図	B S B 303実測図	347
第 307 図	B S B 304・305実測図	348
第 308 図	B S B 301・302・303柱根及び礎板出土状態図	349
第 309 図	B S B 304・305柱根及び礎板出土状態図	350
第 310 図	B S B 304・305出土柱根及び礎板	351
第 311 図	B S B 306・307・308実測図	352
第 312 図	B S B 307柱根及び礎板出土状態図	353
第 313 図	B S B 307・308出土柱根及び礎板	354
第 314 図	B S K 302、B S K 301、B S E 301、B S B 308、B S I 307出土土器	355
第 315 図	B S X 302壺棺出土状態及び出土土器棺	356
第 316 図	B S E 301遺物出土状態及び土層断面図	357
第 317 図	B S E 303・304実測図	358
第 318 図	B S D 315遺物出土状態及び出土土器	359
第 319 図	B S D 301、B S D 315関係断面図	359
第 320 図	B S D 327遺物出土状態及び出土土器	361
第 321 図	B S D 330・331土層断面図	361
第 322 図	B S D 340・342・345土層断面図	363
第 323 図	B S D 342椅子状木製品出土状態図	363
第 324 図	B S D 342出土木器（椅子状木製品）	364
第 325 図	B S D 345遺物出土状態図	365
第 326 図	B S D 345出土土器(1)	366
第 327 図	B S D 345出土土器(2)	367
第 328 図	B S D 347土層断面図	368
第 329 図	B S D 331・348・353出土土器	369
第 330 図	B S D 353土層断面図	370
第 331 図	B S K 301・302実測図	371
第 332 図	B S K 304遺物出土状態及び土層断面図	372
第 333 図	B S K 304出土土器	374
第 334 図	B S K 312土層断面図	375
第 335 図	B N R 301土層断面図	375
第 336 図	B N R 301出土土器	376

第 337 図 B S A301実測図 .....	377
第 338 図 B S X303検出状態及び出土土器 .....	378
第 339 図 B 地区古墳時代前期遺構面出土木器 (B N R301、B S A301、B S B301、 B S B303、B S D331) .....	379
第 340 図 C 地区古墳時代前期 (布留式) 包含層出土土器 .....	381
第 341 図 C 地区古墳時代前期 (布留式) 包含層出土土器 .....	383
第 342 図 2 C トレンチ古墳時代前期 (布留式) 遺構平面図及び土層断面図 .....	384
第 343 図 C トレンチ中央部古墳時代前期 (布留式) 遺構平面図及び土層断面図 .....	385・386
第 344 図 C S X305出土土器 .....	388
第 345 図 C S B301平面図及び断面図 .....	389
第 346 図 C S K313平面図・断面図及び出土土器 .....	390
第 347 図 C S E302平面図及び土層断面図 .....	391
第 348 図 C S E302出土土器 .....	391
第 349 図 5 C トレンチ古墳時代前期 (布留式) 遺構平面図及び土層断面図 .....	393
第 350 図 C S D323出土土器 .....	394
第 351 図 6 C トレンチ古墳時代前期 (布留式) 遺構平面図及び土層断面図 .....	395
第 352 図 6 C トレンチ C S D324平面図及び土層断面図 .....	396
第 353 図 C S D324出土土器 .....	397
第 354 図 C S D328平面・土層断面図及び出土土器 .....	399
第 355 図 C S D328出土不明木製品 .....	400
第 356 図 C S X307北側周濠隅部出土土器 .....	402
第 357 図 C S X307北側周濠隅部出土家形埴輪A (C 379) (1) .....	403
第 358 図 C S X307北側周濠隅部出土家形埴輪A (C 379) (2) .....	404
第 359 図 C S X307北側周濠隅部出土家形埴輪A (C 379) 線刻盾 .....	405
第 360 図 C S X307北側周濠隅部出土家形埴輪B (C 380) .....	406
第 361 図 C S X307周濠出土壺形埴輪A類(1) .....	408
第 362 図 C S X307周濠出土壺形埴輪A類(2) .....	409
第 363 図 C S X307周濠出土壺形埴輪B・C類 .....	410
第 364 図 G S K309遺構図及び断面図 .....	412
第 365 図 G S K312遺物出土状態 .....	413
第 366 図 G S K312出土土器 .....	413
第 367 図 B 地区南側古墳時代中期遺構面及び出土土器 .....	415
第 368 図 C 地区古墳時代中後期包含層出土土器 .....	417
第 369 図 5 C トレンチ C S D323上層出土土器 .....	417

第 370 図 D 地区出土石器（写真） .....	418
第 371 図 D 地区出土土器 .....	418
第 372 図 G S A 305 獣骨出土状況 .....	419
第 373 図 G S A 305・306・307 出土土器 .....	419
第 374 図 G S X 307 出土木製品 .....	420
第 375 図 B S K 314 遺物出土状態及び出土土器 .....	422
第 376 図 A 地区北側飛鳥時代遺構面実測図 .....	427
第 377 図 B 地区飛鳥時代包含層及び遺構面出土土器 .....	428
第 378 図 C 地区飛鳥～平安時代包含層出土遺物 .....	429
第 379 図 D S D 402 出土土器 .....	429
第 380 図 F N R 401 出土遺物 .....	430
第 381 図 F N R 401 出土遺物 .....	431
第 382 図 B 地区 F N R 401 出土遺物 .....	432
第 383 図 B 地区奈良～平安時代遺構面出土土器 .....	435
第 384 図 B 地区中世遺構面出土遺物、C 地区鎌倉時代包含層出土土器 .....	440
第 385 図 C S D 501 出土土器 .....	440
第 386 図 F S K 501 遺物出土状態図 .....	441
第 387 図 F S K 501 出土土器 .....	442
第 388 図 F S K 501 出土土器 .....	443
第 389 図 G 地区中世遺構面出土土器 .....	444
第 390 図 C 地区室町時代包含層出土遺物、D・G 地区中世遺構面出土土器 .....	445
第 391 図 美園遺跡周辺の条里 .....	448
第 392 図 縄文時代後期～晩期の主要遺跡の分布図 .....	451
第 393 図 中河内沖積地出土縄文時代後・晩期の土器 .....	453
第 394 図 美園集落と周辺の縄文時代晩期から弥生時代前期主要集落の位置関係図 .....	460
第 395 図 美園弥生前期集落と周辺集落の推移関係 .....	462
第 396 図 第 I 様式土器（壺口縁端部文様一生駒西麓產土器以外のもの） .....	465
第 397 図 第 I 様式土器（壺口縁端部文様一生駒西麓產土器） .....	465
第 398 図 第 I・第 II 様式土器（壺口縁端部文様） .....	465
第 399 図 第 I 様式土器（口縁部内面に裝飾をもつ壺） .....	466
第 400 図 第 I 様式土器（赤彩文をもつ壺） .....	467
第 401 図 第 I 様式土器（削出突帶をもつ壺） .....	467
第 402 図 第 I 様式土器（各種の篦描文様一生駒西麓產土器以外のもの） .....	468
第 403 図 第 I 様式土器（各種の篦描沈線文一生駒西麓產土器以外のもの） .....	469

第 404 図 第 I 様式土器（底部）	469
第 405 図 第 I 様式土器（各種文様一生駒西麓産土器）	470
第 406 図 第 I 様式土器（各種文様一生駒西麓産土器）	471
第 407 図 第 I 様式土器（無頸壺・鉢）	472
第 408 図 第 I 様式土器（鉢・壺蓋文様一生駒西麓産土器）	473
第 409 図 第 I ・ 第 II 様式土器（高杯または台付鉢脚部）	473
第 410 図 第 I 様式土器（削出突帯あるいは段状の装飾をもつ甕）	474
第 411 図 第 I 様式土器（甕・鉢文様）	474
第 412 図 第 I 様式土器（各種の甕・鉢）	475
第 413 図 第 I 様式土器（各種の甕）	475
第 414 図 第 I 様式土器（各種の甕・鉢）	476
第 415 図 第 I 様式土器（条痕状の調整をもつ土器）	476
第 416 図 第 I 様式土器（文様をもたない甕）	477
第 417 図 第 I 様式土器（ミニチュア土器）	478
第 418 図 第 I 様式土器（結晶片岩を含む壺・甕）	478
第 419 図 第 I 様式土器（近江地方の甕）	479
第 420 図 第 II 様式土器（壺口縁端部文様）	480
第 421 図 第 II 様式土器（櫛描直線文）	481
第 422 図 第 II 様式土器（櫛描直線文）	482
第 423 図 第 II 様式土器（櫛描直線文）	483
第 424 図 第 II 様式土器（細頸壺・鉢）	483
第 425 図 第 II 様式土器（笠桶併用文様）	484
第 426 図 第 II 様式土器（櫛描文様）	485
第 427 図 第 II 様式土器（鉢文様）	485
第 428 図 第 II 様式土器（櫛描直線文をもつ甕）	486
第 429 図 第 II 様式土器（大和型・近江型甕）	487
第 430 図 繩文時代晩期土器	491
第 431 図 美園遺跡石槍製作工程模式図	495
第 432 図 石槍未成品実測図(1)	497
第 433 図 石槍未成品実測図(2)	498
第 434 図 石槍未成品実測図(3)	499
第 435 図 石槍未成品・尖頭器実測図(4)	500
第 436 図 石槍未成品実測図(5)	501
第 437 図 S字状浮文をもつ土器	511

第 438 図	S 字状浮文模式図	512
第 439 図	各時期における分布	513
第 440 図	手焙形土器名称図	518
第 441 図	6 D トレンチ、D S D 323 手焙形土器出土状態図	518
第 442 図	D 地区包含層手焙形土器出土状態図	520
第 443 図	穿孔された手焙形土器	520
第 444 図	手焙形土器出土遺跡分布図	522
第 445 図	手焙形土器形態分類図	527・528
第 446 図	手焙形土器形態分類図	529・530
第 447 図	美園遺跡周辺の弥生時代後期～古墳時代前期遺跡分布図	533・534
第 448 図	各古墳出土の壺形埴輪	536
第 449 図	美園遺跡条里推定復原図	540
第 450 図	A・B 地区条里坪境溝・畦畔重複関係図	542
第 451 図	A・B 地区条里坪境溝・畦畔重複関係断面図	543
第 452 図	美園遺跡出土植物遺存体写真(1)	559
第 453 図	美園遺跡出土植物遺存体写真(2)	560
第 454 図	美園遺跡出土植物遺存体写真(3)	561
第 455 図	B トレンチ STA 99+65 地点筋掘内試料採取土層断面図	563
第 456 図	C トレンチ第 1・第 3 地点試料採取土層断面図	564
第 457 図	C トレンチ第 1 地点上層(1～12層)花粉分析結果ダイヤグラム	565・566
第 458 図	C トレンチ第 1 地点上層(1～12層)花粉分析結果(樹木)ダイヤグラム	565・566
第 459 図	B トレンチ STA 99+65 地点、C トレンチ(第 1 地点下層 12～27 層、第 3 地点)、 D トレンチ、F トレンチ花粉分析結果ダイヤグラム	569・570
第 460 図	C トレンチ第 1 地点上層(1～12層)珪藻分析結果ダイヤグラム	571・572
第 461 図	B トレンチ STA 97+65 地点、C トレンチ(第 1 地点下層 12～28 層、第 2 地点)、 D トレンチ、F トレンチ珪藻分析結果ダイヤグラム	571・572
第 462 図	花粉、胞子化石顕微鏡写真(1)	597
第 463 図	花粉、胞子化石顕微鏡写真(2)	598
第 464 図	花粉、胞子化石顕微鏡写真(3)	599
第 465 図	花粉、胞子化石顕微鏡写真(4)	600
第 466 図	花粉、胞子化石顕微鏡写真(5)	601
第 467 図	花粉、胞子化石顕微鏡写真(6)	602
第 468 図	珪藻化石顕微鏡写真(1)	603
第 469 図	珪藻化石顕微鏡写真(2)	604

第 470 図 珪藻化石顕微鏡写真(3).....	605
第 471 図 珪藻化石顕微鏡写真(4).....	606
第 472 図 珪藻化石顕微鏡写真(5).....	607
第 473 図 三角ダイヤグラム位置分類図.....	611
第 474 図 菱形ダイヤグラム位置分類図.....	612
第 475 図 Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム .....	614
第 476 図 Mo-Mi-Hb 菱形ダイヤグラム .....	615
第 477 図 Q T - P L 相関図 .....	618
第 478 図 所謂生駒西麓産庄内式甕の胴部破片（サンプルNo.1）X線回折グラフ.....	620
第 479 図 所謂生駒西麓産庄内式甕の胴部破片（サンプルNo.2）X線回折グラフ.....	620
第 480 図 所謂生駒西麓産庄内式甕の口縁部破片（サンプルNo.3）X線回折グラフ.....	621
第 481 図 所謂生駒西麓産庄内式甕の胴部破片（サンプルNo.4）X線回折グラフ.....	621
第 482 図 土師器破片（サンプルNo.5）X線回折グラフ.....	622
第 483 図 5 C トレンチ庄内式遺構面採取の原土（サンプルNo.1）X線回折グラフ.....	622
第 484 図 5 C トレンチ庄内式遺構面採取の原土（サンプルNo.2）X線回折グラフ.....	623
第 485 図 5 C トレンチ庄内式遺構面採取の原土（サンプルNo.3）X線回折グラフ.....	623
第 486 図 5 C トレンチ庄内式遺構面採取の原土（サンプルNo.4）X線回折グラフ.....	624
第 487 図 5 C トレンチ庄内式遺構面採取の原土（サンプルNo.5）X線回折グラフ.....	624
第 488 図 5 C トレンチ庄内式遺構面採取の原土（サンプルNo.6）X線回折グラフ.....	625
第 489 図 5 C トレンチ庄内式遺構面採取の原土（サンプルNo.7）X線回折グラフ.....	625
第 490 図 所謂生駒西麓産庄内式甕破片（分析試料1～4）拡大写真.....	626
第 491 図 庄内式甕破片（No.1）電子顕微鏡写真(1).....	627
第 492 図 庄内式甕破片（No.1）電子顕微鏡写真(2).....	628
第 493 図 庄内式甕破片（No.2）電子顕微鏡写真(1).....	629
第 494 図 庄内式甕破片（No.2）電子顕微鏡写真(2).....	630
第 495 図 庄内式甕破片（No.3）電子顕微鏡写真(1).....	631
第 496 図 庄内式甕破片（No.3）電子顕微鏡写真(2).....	632
第 497 図 庄内式甕破片（No.4）電子顕微鏡写真(1).....	633
第 498 図 庄内式甕破片（No.4）電子顕微鏡写真(2).....	634
第 499 図 原石採取地点の位置について（国土地理院発行25,000分の1の地図より作製） .....	637
第 500 図 原石採取地点の景観（地点①～④） .....	638
第 501 図 採取した原石の顕微鏡写真（上から地点①、②、下地点③、④） .....	638
第 502 図 石器・原石の蛍光X線分析値分布（火成岩類） .....	641
第 503 図 石器の蛍光X線分析値分布（堆積岩類） .....	641

第 504 図	大阪府の表層地質について（昭和51年製国土庁土地局発行土地分類図より）	643
第 505 図	西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化と美園焼土の考古地磁気測定結果	654
第 506 図	変形した土器（No. 1）	657
第 507 図	変形した土器（No. 2）	658
第 508 図	変形した土器（No. 3）	659
第 509 図	変形時の配置状態の復元	660
第 510 図	高熱で変形した土器、焼土塊	661
第 511 図	変形した土器・焼土塊出土分布図	661
第 512 図	美園遺跡出土各種土器の胎土比較	667
第 513 図	高熱で変形した土器（No. 1）	669・670
第 514 図	高熱で変形した土器（No. 2）	671・672
第 515 図	高熱で変形した土器（No. 3）	673・674
第 516 図	高熱で変形した土器(1)	675
第 517 図	高熱で変形した土器(2)	676
第 518 図	各種土器試料の顕微鏡写真	677
第 519 図	土器の熱的影響	678
第 520 図	美園遺跡出土灰資料の灰像顕微鏡写真	681
第 521 図	美園遺跡出土土器片付着物の灰像顕微鏡写真	682
第 522 図	美園遺跡出土試料、現生イネ科植物顕微鏡写真	683

## 表 目 次

第 1 表	B 地区弥生時代前期堅穴住居一覧表	62
第 2 表	B 地区弥生時代前期掘立柱建物一覧表	66
第 3 表	B 地区弥生時代前期墓一覧表	70
第 4 表	C 地区包含層出土土器の器種別時期分類表	221
第 5 表	C 地区庄内式第 1 期遺構存続期間	243
第 6 表	C 地区庄内式第 2 期遺構存続期間	279
第 7 表	B 地区古墳時代前期堅穴住居一覧表	342
第 8 表	B 地区古墳時代前期掘立柱建物一覧表	355
第 9 表	B 地区古墳時代前期主要遺構の時期別動態表	380
第 10 表	C 地区包含層出土布留式土器の器種別時期分類表	382
第 11 表	C 地区布留式遺構存続期間	411
第 12 表	飛鳥時代遺構一覧表	426

第 13 表 飛鳥時代遺物一覧表	427・428・430
第 14 表 奈良時代遺構一覧表	433
第 15 表 奈良時代遺物一覧表	433
第 16 表 平安時代遺構一覧表	433・434
第 17 表 平安時代遺物一覧表	435
第 18 表 鎌倉時代遺構一覧表	436・437
第 19 表 鎌倉時代遺物一覧表	437～439
第 20 表 室町時代遺構一覧表	439
第 21 表 室町時代遺物一覧表	446
第 22 表 江戸時代遺構一覧表	446～447
第 23 表 江戸時代遺物一覧表	448
第 24 表 美園遺跡出土第Ⅰ・第Ⅱ様式土器胎土別分類表	488
第 25 表 美園遺跡出土第Ⅰ・第Ⅱ様式土器胎土別器種構成表	489
第 26 表 美園遺跡出土第Ⅰ様式壺、頸・胴部文様胎土別比較表	489
第 27 表 美園遺跡出土第Ⅰ・第Ⅱ様式甕、口頸部文様形態別・胎土別比較表	490
第 28 表 美園遺跡・石棺長幅比	494
第 29 表 美園遺跡・尖頭器、石棺、石鎌長幅比	502
第 30 表 S字状意匠を有する土器一覧表	514・515
第 31 表 美園遺跡出土手焙形土器一覧表	517
第 32 表 手焙形土器集成表	526
第 33 表 参考文献一覧	531
第 34 表 美園遺跡出土動物遺存体一覧表	551
第 35 表 植物種子同定結果	552～558
第 36 表 美園遺跡花粉・珪藻分析試料一覧	567
第 37 表 Cトレンチ第1地点上層（1～12層）樹木花粉検出比率	573
第 38 表 Cトレンチ第1地点における花粉帶と古環境	575
第 39 表 美園遺跡花粉・胞子化石検出個体数	579・580
第 40 表 美園遺跡珪藻化石検出個体数	581・582
第 41 表 Cトレンチ第1地点における珪藻群集帶と堆積環境	588
第 42 表 花粉・胞子化石写真図版対照表	595
第 43 表 珪藻化石写真図版対照表	596
第 44 表 ジフェニルカルバジドによるスポットの呈色とR <sub>f</sub> 値	609
第 45 表 ジチゾンによるスポットの呈色とR <sub>f</sub> 値	609
第 46 表 胎土性状表（美園）	614

第 47 表 美園遺跡出土石器の岩石鑑定結果一覧	636
第 48 表 蛍光X線分析測定結果（原石）	640
第 49 表 蛍光X線分析測定結果（石器）	640
第 50 表 下層焼土の磁化測定結果	652
第 51 表 中層焼土の磁化測定結果	652
第 52 表 上層焼土の磁化測定結果	653
第 53 表 美園遺跡焼土の考古地磁気測定結果	653
第 54 表 B S K 230他から出土した変形土器	660
第 55 表 分析試料一覧	662
第 56 表 鉱物組成・外観の熱的影響	665
第 57 表 灰像分析試料一覧表	679

## 付 図 目 次

- 付図 1 美園遺跡調査区地区割図
- 付図 2 美園遺跡土層断面図
- 付図 3 美園遺跡 A 地区弥生時代前期Ⅰ 遺構面全体図
- 付図 4 美園遺跡 A 地区弥生時代前期Ⅱ 遺構面全体図
- 付図 5 美園遺跡 A 地区弥生時代中期Ⅰ 遺構面全体図
- 付図 6 美園遺跡 A 地区古墳時代前期遺構面全体図（弥生時代中期Ⅲ 遺構面を含む）
- 付図 7 美園遺跡 A 地区奈良～平安時代遺構面全体図
- 付図 8 美園遺跡 A 地区中近世遺構面全体図
- 付図 9 美園遺跡 B 地区弥生時代前期遺構面全体図
- 付図10 美園遺跡 B 地区南側弥生時代中期第Ⅰ 遺構面全体図
- 付図11 美園遺跡 B S A 212、B S D 257 土層断面図
- 付図12 美園遺跡 B 地区北側弥生時代中期Ⅱ 遺構面全体図
- 付図13 美園遺跡 B 地区古墳時代前期遺構面全体図
- 付図14 美園遺跡 B 地区中央部飛鳥時代遺構面全体図
- 付図15 美園遺跡 B 地区奈良～平安時代遺構面全体図
- 付図16 美園遺跡 B 地区中～近世遺構面全体図
- 付図17 美園遺跡 C 地区遺構全体図(1)（弥生時代前期・弥生時代中期前半）
- 付図18 美園遺跡 C 地区遺構全体図(2)（弥生時代中期後半・古墳時代前期庄内式第1期）
- 付図19 美園遺跡 C 地区遺構全体図(3)（古墳時代前期庄内式第2期・古墳時代前期布留式）
- 付図20 美園遺跡 C 地区遺構全体図(4)（鎌倉時代前半期・鎌倉時代後半期）

- 付図21 美園遺跡C地区遺構全体図(5)（室町時代・江戸時代）
- 付図22 美園遺跡C地区美園古墳（C S X307）平面図及び土層断面図
- 付図23 美園遺跡D・F・G地区縄文時代晩期遺構全体図
- 付図24 美園遺跡D・G地区弥生時代前期Ⅰ・Ⅱ遺構全体図
- 付図25 美園遺跡D地区弥生時代中期Ⅰ・Ⅱ遺構全体図
- 付図26 美園遺跡D地区古墳時代前期（庄内Ⅰ・Ⅱ）遺構全体図
- 付図27 美園遺跡D・E・F・G地区古墳時代前期（庄内Ⅱ）遺構全体図
- 付図28 美園遺跡D・G地区古墳時代前期（布留）遺構全体図
- 付図29 美園遺跡D・E・F・G地区古墳時代中期遺構全体図
- 付図30 美園遺跡D・E・F・G地区飛鳥時代遺構全体図
- 付図31 美園遺跡D・E・F・G地区平安時代遺構全体図
- 付図32 美園遺跡D・E・F・G地区鎌倉時代遺構全体図
- 付図33 美園遺跡D・E・F・G地区近世遺構全体図
- 付図34 美園遺跡出土弥生時代後期～古墳時代前期土器の分類図表（試案）
- 付図35 美園遺跡遺構変遷図

## 第Ⅰ章 はじめに

<sup>うちの</sup> 美園遺跡は、大阪府八尾市美園町1丁目から4丁目にかけて所在する。本遺跡発見の契機は、昭和50年12月に大阪府教育委員会が実施した、府道大阪中央環状線敷地内での側大阪瓦斯による河内ラインガス導管布設に伴う発掘調査によってである。この調査では、調査深度及び面積の点で限界があり、古墳時代から平安時代にかけての遺物と二枚の遺構面を確認したに止まった。また八尾市教育委員会においても周辺の開発に伴う調査を実施している。これらの調査においては、前述の理由から遺跡の広がりやその性格、下層遺構の確認等で解明すべき多くの課題を残していた。

昭和46年以来、大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局とが中心となって近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内松原～東大阪13.5Km区間の埋蔵文化財について協議が進められてきた。それを受け昭和48年に、すでに周知されていた9遺跡（南から、亀井、久宝寺、友井東、山賀、若江北、巨摩廃寺、瓜生堂、西岩田、新家）について、範囲と遺構深度を確認することを目的とした第1次発掘調査が(財)大阪文化財センターによって実施された。その際に、久宝寺遺跡の北側で佐堂遺跡が新たに発見された。また同年に大阪市交通局の委託を受けて(財)大阪文化財センターが行なった地下鉄谷町線延長予定地内の試掘調査によって、亀井遺跡の南側に城山、長原の2遺跡の存在が明らかとなった。最後に美園遺跡を追加して、合計13の遺跡が近畿自動車道天理～吹田線予定地内に確認されたことになる。昭和51年4月に大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター、日本道路公団大阪建設局の三者によってこれら13遺跡の調査に関する協定が締結された。現在では、大和川以南の大堀城跡を追加して合計14遺跡となっている。昭和51年7月に長原遺跡の調査から開始され、瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡、西岩田遺跡、新家遺跡、若江北遺跡、友井東遺跡、亀井遺跡、山賀遺跡、久宝寺遺跡の順で調査が進められている。

昭和55年9月に美園遺跡についても範囲及び遺構深度を把握するための第1次発掘調査が、(財)大阪文化財センターの玉井、小野によって実施された。その結果、南北約600mの範囲で現地表下約4mの深さまでに弥生時代前期から近世までの包含層を複数確認することができた。この結果を基にして、同年12月より美園遺跡の本格的な調査（第2次発掘調査）が始められた。

調査区は里道、水路、横断道路等によって分断されるため、便宜上A～Gまでの7区に分割した。また発掘調査の工事発注方式に伴う処置として、A・B地区をその1、C地区をその2、D～G地区をその3という3工区に分けて、昭和56年4月より表土層除去作業から実際的な調査に取り掛かった。なお調査は、A・B地区が岡本、C地区を渡辺、D～G地区まで小野、遺物整理を井藤がそれぞれ担当した。遺物整理は各現場担当者と井藤が共同して、遺物の洗浄、登録、復原等と概要報告書作成に必要な基礎的整理作業を中心実施した。昭和58年9月からは、渡辺が小野、岡本の協力を得て遺物整理を担当した。発掘調査は各地区のトレンチ部分を先に行ない、

その結果から遺構保存区域を決めている。道路橋脚の位置は先述の保存区域を避けて設定され、橋脚部分を切り広げ部とし、トレンチ部の両側に広げて調査する方法が取られた。現地での調査期間は、C地区が昭和58年8月まで、A・B・D～G地区が昭和59年1月までであった。

約2年10ヶ月の長期に亘る調査によって、既往の調査では確認できなかつた多くの知見を得ることができた。遺跡の範囲は、八尾市教育委員会の周辺での調査成果と合わせて考えれば、南北約600m、東西約500m以上の広がりをもつと思われる。また時期によつては、北側の友井東遺跡及び南側の佐堂遺跡と重複しており、それらとの関連性もかなり強いと言えよう。遺物は縄文時代後期前葉から近代までのものが認められ、遺構面は弥生時代前期から近世までの要約して八つの画期を示すものが検出された。特に弥生時代前期後半と古墳時代前期（庄内式、布留式）において集落の中心部分が確認され、両時期が本遺跡を代表すると言つても過言ではない。遺物の量も第1次発掘調査の予測をはるかに越えて、前述の二時期を中心に遺物用コンテナに約2000箱出土している。今回の調査成果によつて、美園遺跡が残してきた課題の一端が解明されたものと確信している。以下その概要について報告していきたい。（渡辺）

## 第Ⅱ章 位置と環境

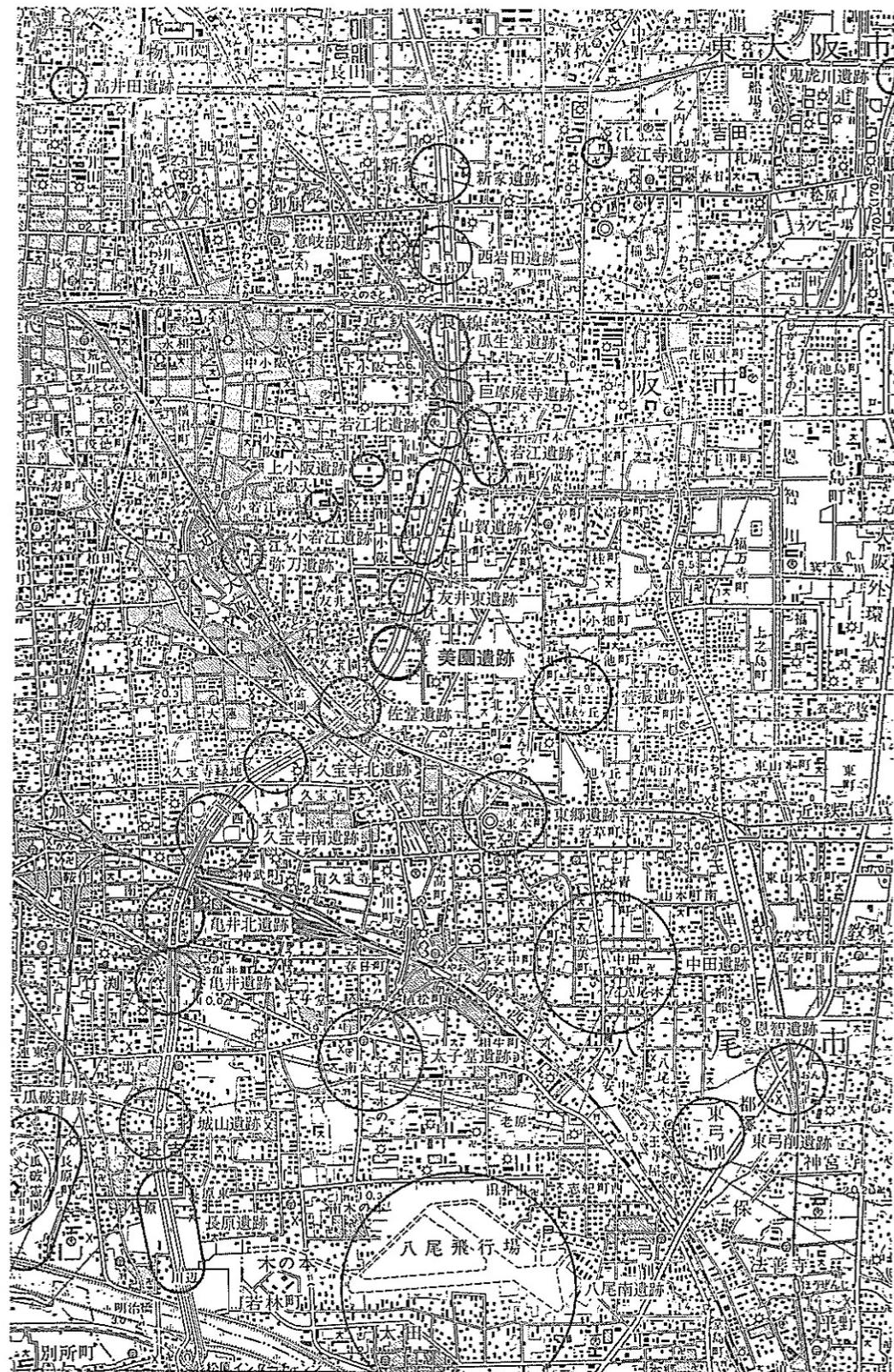
美園遺跡は行政区画上、八尾市美園町1丁目～4丁目に所在し、南北600m、東西推定500m以上の範囲で長瀬川の北東方向に拡がる遺跡である。美園遺跡は昭和50年にガス管理設工事によって須恵器が発見され、更に昭和55年の第1次調査によつて弥生時代～近世にかけての複合集落遺跡として知られるようになった。

美園遺跡が立地する河野平野は、西の上町台地と東の生駒山地との間に囲まれた三角州平野が旧大和川の分流である長瀬川、玉串川、平野川等の諸河川によって、氾濫原、潟湖性低地、扇状地、および自然堤防から成り立っている。美園遺跡は長瀬川の自然堤防の微高地上に立地している。河内平野の旧集落もまた微高地上に立地しており、洪水等の災害から避けていたようである。

現在の大和川が付替えられ以前は、長瀬川、玉串川、恩智川、平野川が北上し、ちょうど東大阪市新家遺跡より北側の地は、湾から潟→湖→平野という大きな地形的環境の変化があった。遺跡もまた、自然的・地形的環境に大きく制約を受けながら、縄文時代から弥生時代、古墳時代へと継続していく遺跡（集落）と、又は断続的になる遺跡（集落）と、一時期に限つて出現する遺跡（集落）があるようである。以下、美園遺跡の周辺遺跡に限つて概観してみたいと思う。

河内平野の中央部で人間生活の足跡が見られるのは、確実なところで縄文時代晩期からであるが、それよりも以前の旧石器時代の石器が若江北遺跡や長原遺跡で上層遺構に伴つて出土している。

縄文時代になると、海進の現象により古河内平野に海水が侵入し、湾を形成していた。湾は現在の生駒山麓までおよんでおり、縄文時代の集落もまた、湾の縁辺の上町台地や生駒西麓地域



第1図 美園遺跡と周辺遺跡

(1:50,000国土地理院)

に立地している。縄文時代草創・早期の遺跡としては現在のところ河内平野では発見されていないが生駒西麓地域で交野市神宮寺遺跡や東大阪市神並遺跡等があげられる。前期・中期の遺跡としては、交野市星田遺跡、東大阪市鬼塚遺跡、八尾市恩智遺跡等があり、近畿自動車道関係でも巨摩庵寺遺跡と山賀遺跡の上層遺構で中期の土器を検出している。

後期；晩期になると海退現象と諸河川の土砂の堆積が活発になって古河内平野も潟を形成していく。後期の遺跡としては生駒西麓で、四条畷市岡山遺跡、交野市星田遺跡、東大阪市日下、鬼塚、芝ヶ丘、縄手、馬場川遺跡、八尾市恩智、柏原市大県遺跡等があげられ、上町台地では大阪森の宮遺跡がある。近畿自動車道関係の調査では、若江北、山賀、美園遺跡で土器を検出している。

晩期では先の遺跡に枚方市域ノ山遺跡や、東大阪市西ノ辻遺跡等の遺跡が増える。近畿自動車道の調査では、晩期の確実な層として、新家遺跡、山賀遺跡、久宝寺北遺跡があげられる。新家遺跡では、T.P.-3mの粗砂層の上面より滋賀里Ⅲ式の土器がローリングを受けずにまとまって検出されている。この土層中にはセタシジミが含まれており、下層では海水性のエドザクラ幼貝を検出していることから、河内平野部の海水→淡水の変化、河内湾→河内潟→湖への移り変わりをとらえることが出来た。新家遺跡の南側に位置する山賀遺跡では、黒色粘土層を3層確認されている。上層より滋賀里Ⅱ式、第2層目より滋賀里Ⅰ式の土器が出土している。この第2層面より河川が検出され、人間と鹿の足跡が確認された。新家遺跡；山賀遺跡では、人間が集落を構えて生活を営んでいたかどうかは現在のところ不明であるが、山賀遺跡より南2.0Kmに位置する久宝寺北遺跡では、弥生時代前期中段階の土器と伴って、長原式と船橋式の土器が出土しており、土器の一部に粋痕がある。遺構は不明であるが、近くに集落の存在をうながしている。新家遺跡、山賀遺跡、美園遺跡、久宝寺北遺跡のローリングを受けていない土器を見ると、縄文時代の集落遺跡の発見も近いことであろう。

弥生時代になると、縄文時代に比して遺跡の数も相当多くなり、河内潟湖周辺にも人々が定住するようになる。自然堤防の微高地上に集落を営み、後背湿地で洪水と闘いながら稻作農耕が行われるようになる。弥生時代前期の遺跡として、生駒西麓地域では中垣内、芝ヶ丘、鬼塚、鬼虎川、恩智遺跡があげられ、河内平野では山賀、美園、久宝寺、亀井遺跡があげられる。山賀遺跡では水田跡や掘立柱建物跡を検出し、美園遺跡では多くの住居跡を検出することが出来た。これらの集落は次の時代へ大集落として発展していく。

弥生中期になると、河内潟・湖周辺には大規模な集落が出現する。このことは河内湖が、諸河川の沖積作用により汀線が後退し、大幅に陸化することによって肥沃な土壌を生み出し、稻作農耕が活発になっていったことに起因している。しかし、自然環境は縄文、弥生前期と比べて巨視的に安定しているものの、最近の調査では弥生中期初頭の段階でもやはり大洪水の痕跡があり、微視的にまだまだ不安定であったようである。河内潟・湖周辺の遺跡の数は、弥生時代前期に比して増えている。弥生時代中期の遺跡としては、平野部では瓜生堂、巨摩庵寺、若江北、山賀、

美園、久宝寺、龟井、長原遺跡があげられる。瓜生堂遺跡は、盛土を持つ方形周溝墓として著名になったが、近畿道の調査により、すぐ南に接して立地する巨摩廃寺遺跡と一つの集落となり、河内平野でも最大且つ中心的な大集落であることが判明した。また最近の調査で、方形周溝墓群は、小阪ポンプ場から東へ広がることが確認され、また従来不明であった居住地域も、竪穴式住居、掘立柱建物群が検出されていることが確認された。遺物も、銅鐸形土製品、銅戈の鋒型と銅戈、銅鎌・有釣銅鉤等が出土している。

弥生時代中期末葉から後期にかけて、巨摩廃寺遺跡では、3基の方形周溝墓と2基の木棺墓が確認された。その1基の方形周溝墓に最低15体の埋葬主体部を検出している。この時期の居住域は、竪穴式住居、掘立柱建物、井戸、溝、土坑が確認されたことから、若江北遺跡にあったと思われる。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、自然環境は非常に不安定になり、河内平野の河川は幾度も氾濫し、瓜生堂から巨摩廃寺遺跡周辺の集落や水田は川の砂によって厚く覆われてしまうこととなった。巨摩廃寺遺跡では、弥生時代後期の方形周溝墓の半分が破壊され、当時の洪水の様子を物語っている。弥生時代後期に於ては、集落が洪水でつかってしまう度にそれを放棄して点々と移動し、小規模ながら集落を営み続けていたと考えられる。

古墳時代になると弥生時代後期に比べて自然環境は安定し、生産性の高い河内平野を背景に、多くの集落が出現し、また巨摩廃寺遺跡、山賀遺跡、美園遺跡、龟井遺跡、長原遺跡で見られるように古墳が造られるようになった。巨摩廃寺遺跡では盾、蓋、美豆良を結った人物、水鳥、腰掛等の埴輪が、美園遺跡では壺形埴輪と家形埴輪を検出した。家形埴輪は高床式の構造で、埴輪内には寝台が造り付けてあり、また外部の柱と思われるところに盾が線刻されている。美園遺跡の古墳は古墳時代前期、巨摩廃寺遺跡では5C後半～6C初頭に位置付けられ、これらの古墳は1辺10m前後の小型方形墳である。長原遺跡では、塚ノ本古墳を中心にやはり埴輪円筒棺と小型方形墳が群集していた。その北の龟井遺跡では1辺7mの方形墳から甲冑、劍が出土している。

従来河内平野では古墳は見られなかったが、近年の発掘調査により除々に資料が揃いつつある。これらの遺跡の周辺にも古墳と思われる字名が残されている。例えば巨摩廃寺遺跡周辺では、現在東大阪市の岩田町石田神社境内に岩舟塚の伝説が残されており、付近にも3基ほど在ったことが言い伝えられている。その南方1.3kmの所に鏡神社があり、境内には鏡塚がある。時期的には新しいものと考えられるが、古墳であった可能性があると思われる。また近畿大学内に於ても埴輪が出土している。これらの古墳は自然堤防の微高地に造っていたものと思われる。

歴史時代では、本遺跡で7C後半の水田畦畔が検出され、条理制遺構としては最古である。

奈良時代に入ると大化の改新によって河内国に郡、郷がおかれて、本遺跡は若江郡に入る。郡衛跡は現在の東大阪市若江南町の若江小学校あたりに置かれていたと推測され、近畿自動車道の調査に於ても、「若」と墨書きされた土器が出土している。

河内平野に存在した莊園は奈良・平安時代に69莊、鎌倉時代では76莊見られる。本遺跡は若江

荘に入り、領主は醍醐寺である。現在の東大阪市水走には「大江御厨」荘、同市川俣、御厨には「河俣御厨」荘があり、当時勢力を誇っていた水走氏はこれらの皇室領を管理し、河内湖の魚介類、水産物等を朝廷に献進していた。合わせて水上交通・水利等も管理していたようである。

中世になると河内平野に若江城、萱振城、久宝寺城の城郭が築かれる。また寺院も多く建立され、久宝寺は室町時代に淨土真宗本願寺派の顕証寺を中心に寺内町として発展していった。

江戸時代になると河内平野では農村が「久宝寺木綿」から「河内木綿」栽培により発展していく、とくに大和川が付替えられてから増え盛んになっていった。近畿道関係の調査で抜きあげ田の遺構も検出されている。(小野)

## 第Ⅲ章 調査方法

### 第1節 第1次調査

1980年9月16日から同年9月29日まで、美園遺跡の第1次調査として、試掘調査を行なった。調査方法としては、美園1工区より3工区にかけて、1m幅で全長約650mの試掘坑を掘削した。深さは、約0.5mで表土を削平したのみであった。目的は第1面の遺構状況を観察することにあった。更にSTA98+50、STA100+20、STA100+50、STA101+55、STA101+85、STA103+80の7ヶ所に2.0×2.5mの試掘坑を入れた。目的は下層の層位、遺構、土器の有無を確認することであった。そのために、深さは限定することは出来なかつたが、約1～4m掘削した。以下順次層位の状態を説明することにする。

#### ① STA98+50

掘削深度は3.5m。第1層は黄褐色粘質土層で、近世である。T.P.+5.1m、厚さ26cm。第2層は暗黄褐色粘質土層で、中世に相当する。T.P.+4.82m、厚さ28cm。第3層は暗灰色粘質土層で、古墳～奈良時代の包含層である。T.P.+4.54m、厚さ26cm。第4層は青灰色粘質土層で古墳～奈良時代の水田面と思われる。T.P.+3.86m、厚さ66cm。第5層は淡灰色砂層である。T.P.+3.58m、厚さ30cm。第6層は灰色粘土層である。T.P.+2.42m、厚さ1m。第7層は黒色粘質土層(粘質砂質土的)で、弥生時代前期の土器を多く含む包含層である。畿内第Ⅱ様式の土器も含んでおり、この時点では、層位的に明確ではなかつた。T.P.+2.22m、厚さ20cm。第8層は砂層である。厚さは不明であった。

#### ② STA100+20

掘削深度は2.90m。第1層は灰オリーブ色粘質土層ないし、暗褐色土層で、近世～中世の層である。土師器が出土している。T.P.+5.18m、厚さ27cm。

第2層は砂礫混じりオリーブ灰色粘質土層で中世～奈良時代の層である。T.P.+4.86m、厚さ30cm。第3層は淡灰色粘質土層(鉄分を含む)で、須恵器を検出し、古墳時代である。T.P.+4.62m、厚さ25cm。第4層は淡灰色砂層である。T.P.+4.14m、厚さ29cm。第5層は(紫)

灰色粘土層である。T.P.+3.94m、厚さ20cm。第6層は白灰色砂層である。厚さ約1.6m。

#### ③STA100+50

掘削深度は4m。第1層は灰色粘質砂質土層で、近世である。T.P.+5.18m、厚さ41cm。第2層は黄褐色粘質土層で中世と思われる。T.P.+4.30m、厚さ52cm（この層の下にオリーブ灰色粘質土層が厚さ36cmで堆積している。この層の時期も中世と考えられる）。第3層は灰色砂層である。T.P.+3.82m、厚さ48cm。第4層は灰色粘土層である。T.P.+2.10m、厚さ1.5m。第5層は灰黒色粘土層である。土器の出土はないが、弥生前期の包含層と推測される。T.P.+1.90m、厚さ10cm。第6層は灰色シルト層で、厚さは不明である。

#### ④STA101+55

掘削深度は4.2m。第1層は黄褐色粘質土層（砂質気味）で、近世～中世の時期である。T.P.+5.42m、厚さ12cm。第2層は灰褐色粘質砂質土層で、中世？である。T.P.+4.94m、厚さ17cm。第3層はオリーブ褐色粘質土層で古墳時代？である。T.P.+4.78m、厚さ8cm。第4層は淡灰色砂層である。T.P.+4.30m、厚さ17cm。第5層は暗灰色粘質土層（砂質気味）で、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の土器が出土しており、弥生中期の包含層である。T.P.+4.10m、厚さ10cm。第6層は灰色粘質微砂層で、弥生中期の遺構面のベース層であろう。T.P.+3.34m、厚さ38cm。第7層は灰色砂層でSTA100+50の第3層と同一層と思われる。T.P.+2.74m、厚さ30cm。第8層は灰色粘土層で、STA100+50の第4層に相当する層である。T.P.+2.10m、厚さ32cm。第9層は灰黒色粘土層である。土器等の遺物の出土はないが、STA100+50の第5層と同一の層と考えられる。弥生時代前期の包含層と思われる。T.P.+1.94m、厚さ9cm。第10層は青灰色粘質土（シルト）層である。

#### ⑤STA101+85

掘削深度は4.5m。第1層は暗灰色粘質土層で、近世である。T.P.+5.86m、厚さ12cm。第2層は黄褐色粘質土層で、中世～奈良時代？である。須恵器（鉢）や土師器が出土している。T.P.+5.46m、厚さ28cm。第3層は、灰色粘質土（シルト）層である。T.P.+4.74m、厚さ36cm。第4層は砂層である。T.P.+4.50m、厚さ12cm。第5層は緑灰色粘土層である。T.P.+3.98m、厚さ26cm。第6層は暗灰色粘質砂質土層で、弥生中期（畿内第Ⅲ～Ⅳ様式）の土器が出土している。STA101+55の第5層に相当する。T.P.+3.78m、厚さ10cm。第7層は灰色粘質土（シルト）層で、弥生時代中期の遺構面のベース層と思われる。T.P.+2.94m、厚さ42cm。第8層は灰色砂層である。T.P.+2.54m、厚さ19cm。第9層は灰色シルト層である。T.P.+2.06m、厚さ24cm。第10層は暗灰色粘土層で、弥生時代前期の層と推測される。T.P.+1.94m、厚さ6cm。第11層は灰色の砂層である。厚さは不明。

#### ⑥STA103+30

掘削深度は1mにとどめた（砂層の湧水が著しい）。第1層は黄褐色粘質土層で、近世～中世である。T.P.+5.70m、厚さ40cm。第2層は砂層である。厚さは不明。この層は、第2次調査

で飛鳥時代の自然河川であると判明した。

#### ⑦ STA103+80

掘削深度は2.50m。第1層は灰色粘質土（黄褐色をおびる）層で、近世である。T.P.+6.42m、厚さ14cm。第2層は明褐色粘質砂質土層で、中世である。T.P.+5.98m、厚さ21cm。第3層は浅黄色細砂層である。T.P.+5.70m、厚さ15cm。第4層は暗灰色粘土層である。T.P.+4.50m、厚さ59cm。第5層は砂層である。厚さは不明。

以下、美園遺跡の試掘結果をまとめてみると、

- ① 時代は近世、中世、奈良時代、古墳時代、弥生時代中期、弥生時代前期の6時期に亘っている。
- ② 耕作土を削ぐと（黄）褐色土層が堆積しており、近世～中世の時期であり、遺構として唐鋤跡と思われる小溝がある。
- ③ 古墳時代の層としては、STA100+20で確認した第3層である。弥生時代中期の層としては、STA101+55；STA101+85で確認した第5層と第6層である。  
美園遺跡の北側に立地する友井東遺跡の関係が考えられる。
- ④ 弥生時代前期の層としては、STA99+50で確認した第7層である。畿内第Ⅰ様式の土器と畿内第Ⅱ様式の土器を多く検出した。この段階では、畿内第Ⅰ様式と畿内第Ⅱ様式の層位的関係はつかめなかったが、出土した多量の土器から、北側に立地する山賀遺跡と、ほぼ同規模の集落を推測される。（小野）

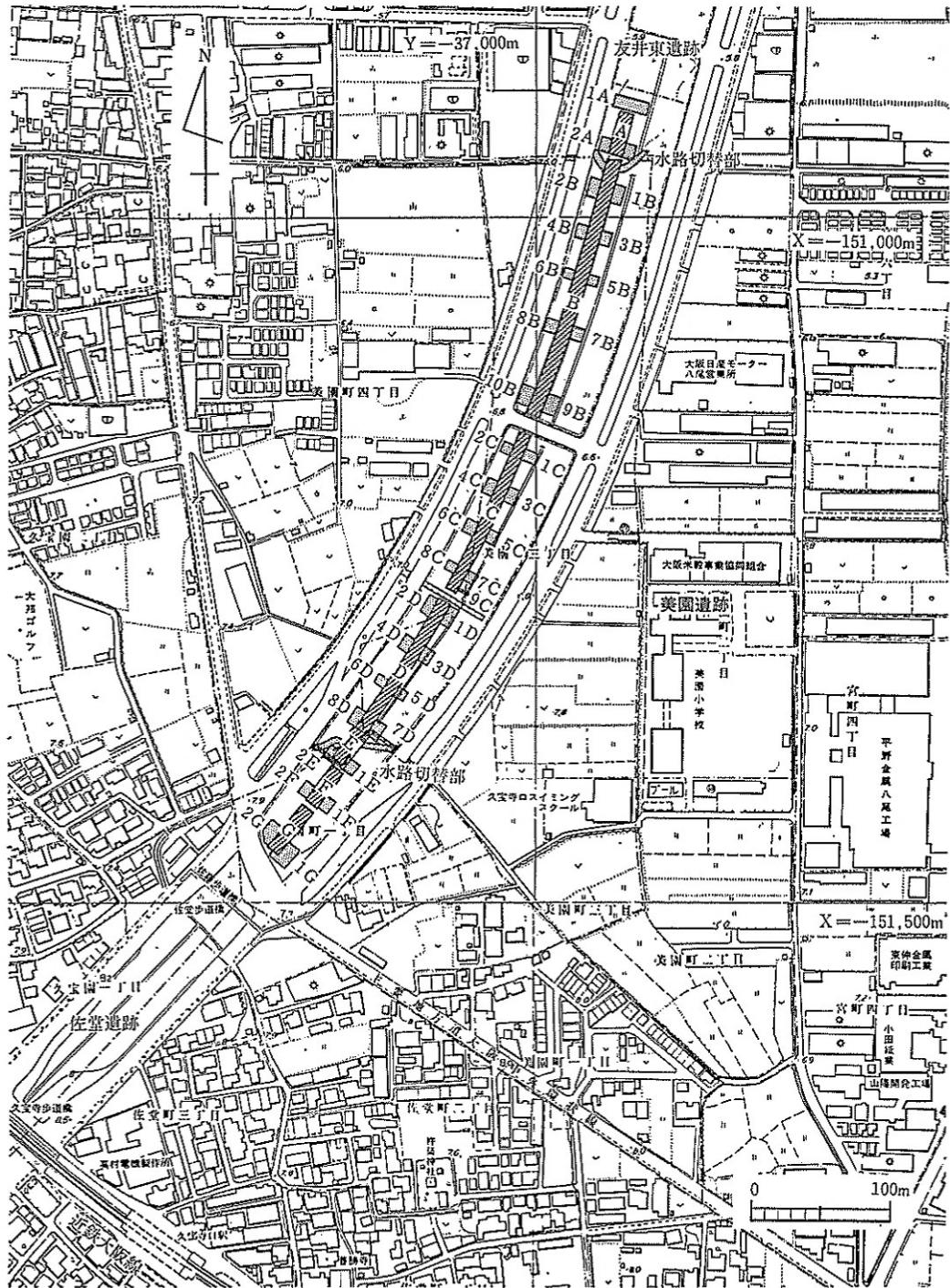
## 第2節 第2次調査（第2図、付図1）

第Ⅰ章すでに触れたとおり、便宜的に北からA～Gの7調査区に分けて調査を実施した。調査は、遺跡の平面的な広がりと道路橋脚部分を決定するための資料を得ることに目的を置いて、各調査区のトレンチ部から開始された。統いて、その結果を基にして設定された道路橋脚部分（切り広げ部）の調査を行なった。切り広げ部の調査箇所は、A地区で2ヶ所（1Aトレンチ・2Aトレンチ）、B地区で10ヶ所（1Bトレンチ～10Bトレンチ）、C地区は8ヶ所（1Cトレンチ～8Cトレンチ）、D地区で8ヶ所（1Dトレンチ～8Dトレンチ）、E地区は2ヶ所（1Eトレンチ・2Eトレンチ）、F地区2ヶ所（1Fトレンチ・2Fトレンチ）、G地区2ヶ所（1Gトレンチ・2Gトレンチ）の合計34ヶ所であった（第2図参照）。それに加えてB地区とE地区において、橋脚設置に伴う水路付け替えが生じ、その部分についても発掘調査を実施している。またCトレンチ南端部において美園古墳が発見され、古墳の規模を確認することを目的として9Cトレンチを東側に設定した。なお美園古墳とBトレンチで検出された弥生時代前期の集落中心部分については保存処置を講ずることになり、遺構の検出された面で調査を止め、砂で埋め戻している。最後に各調査区の最終遺構検出面（G.L.-4m前後）の調査が終了した後で、より下層の遺構が存在するかどうかを確認するための試掘坑を1～2mの深さで掘削した。第1次調査の

結果から、現地表下約4mの深さで弥生時代前期包含層が検出されることが明らかになっていた。また沖積地特有の激しい湧水も認められたため、調査に際してはその安全面を考慮して長さ約7.5mの鋼矢板を調査区全域に打ち込んで行なわれた。

調査は盛土及び旧耕土を機械で掘削し、それ以下の各層については全て人力で分層発掘を行なっている。包含層中の遺物については、A～G地区の各トレンチ部でそれぞれ5mグリッドを設定して取り上げた。各グリッドの名称はAトレンチでa1～a10、Bトレンチはb1～b14・c1～c12・d1～d12・e1～e12・f1～f12・g1～g14である。Cトレンチは1区～52区まで、D～GトレンチはそれぞれSTA（日本道路公団の設定したステーションライン）の距離を基準とした（付図1参照）。遺構検出作業は各層ごとに実施し、遺構の実測は各調査区とも国土座標第Ⅱ系を用いて行なっている。土層断面の観察は、各調査区の両端に東西方向のセクションベルトを設け、それに加えてA・Bトレンチについてはステーションラインに添って南北方向に1本、C～Gトレンチは矢板に添って東側と西側に2本の南北方向セクションベルトを設置して行なった。また長いトレンチについては両端以外でも東西方向のセクションベルトを一定間隔で設け、土層の堆積状況を観察している。切り広げ部については、原則として北側の東西方向セクションベルトとトレンチ部の反対側の南北方向セクションベルトを設けた。

今回の調査では、当初から二つの課題を解明することを目的に各担当者間で討議してきた。その一つは、第1次調査から予測された複数の遺構面の検出と、それぞれの面の広がりを各調査区相互に関連づけて確認する作業である。その中には、既応の調査で残されていた課題（美園遺跡の時期ごとの変遷及び遺跡の存続期間の解明）の探求も含まれている。もう一つは、自然環境の変遷と各時期の遺構との関係を明らかにする作業である。これについては、各層に含まれている花粉及び珪藻と種子等の植物遺存体を分析することも合わせて実施した。（渡辺）



第2図 美園遺跡調査区位置図

## 第Ⅳ章 調査結果

### 第1節 層序

#### 第1項 層序の概要（付図2）

美濃遺跡は、旧大和川（長瀬川）によって形成された沖積平野、いわゆる河内平野の中央部やや南に位置する。堆積層は沖積平野特有の複雑さを呈し、概して粘土と砂の堆積を繰り返している。現地表面は南側が最も高く、北側へゆるやかに傾斜している。最も高いところでT.P.+7.1m、最も低いところでT.P.+5.2mを測る。このような傾向は一部の時代を除いて同様に認められ、南から北へゆるやかに傾斜している。

層序については、調査した範囲が南北に非常に長く、約600mにも達することから各地区、各地点によってそれぞれ異なる。したがって各地区の基本層序については第2項で改めて説明することにし、本項では各時代ごとに全体のおおまかな概略を記述するにとどめる。

**縄文時代以前** 沖積層は地表下10m以上におよび、粘土、砂、シルトが交互に堆積する。これらは明らかに自然堆積である。T.P.+1～2m前後のところで黒色有機質粘土層を2枚検出した。これを仮りに下層を第1黒色粘土、上層を第2黒色粘土とする。これら黒色粘土層は北接する山賀遺跡や友井東遺跡から続くもので、第1黒色粘土は縄文時代後期～晩期に相当する層である。B地区でこの時期の自然流路、F・G地区では、第1・2黒色粘土よりさらに下層で、もう1枚の黒色粘土層を検出し、これを切って縄文時代後期の自然河川が検出されている。

第1黒色粘土はA・B地区では縄文時代晩期に相当する層であるが、地形が南へ行くほど高くなっているため、C地区より南側では弥生時代前期に相当してくる。B地区では第1黒色粘土の上層に南北約150mにおよぶ砂の堆積が認められる。これはおそらく縄文時代晩期から弥生時代前期前半にかけての大河川の跡と考えられる。

**弥生時代前期** A・B地区で集落が検出されている。ベースは第2黒色粘土上層の砂、もしくは粘質土及びシルトであり、粘土の堆積は比較的少ない。しかし、C地区より南では厚い粘土の堆積が認められ、それに反して砂や粘質土、シルトの堆積は認められなくなり、遺構もほとんど検出されなくなる。集落が検出されたA・B地区では粘質土と砂質土の包含層が認められ、最も厚い所（B地区中央部）で約40cmの厚さを測る。

**弥生時代中期～後期** この時期は土地があまり安定していなかった時期のようであり、自然河川や流路がいたるところに認められる。これらの河川は氾濫をくり返し、砂の堆積も多く見られる。この期間に1.5～2.0mもの堆積層が形成されている。中期前半はB地区で粘質土をベースとした水田遺構が検出されているが、C地区より南では、幅約90mの自然河川や流路がいたるところに走り、流路以外は全体に厚い粘土の堆積が観察される。中期中頃から後半になると逆にB地区北側に自然河川や流路が多くなり、C地区より南側でこの時期の遺構や遺物がいくつか検出さ

れるようになる。この傾向は後期に至っても同様であるが、遺構数は極めて少なくなる。

**古墳時代前期** 美園地域では、この時期以降、土地が比較的安定してくるようである。遺構面は、各地区とも2～3面検出され、基本的に北側と南側ではシルト、中央部では粘土層をベースとしている。B・C・D地区ではそれぞれ集落跡が検出されている。概して南側のD地区が最も古く、次いでC地区というように、しだいに南側から北側へ時代が下るようであり、北接する友井東遺跡では中期の集落が確認されている。<sup>(1)</sup> C地区ではこの時期の上層で美園古墳が出現する。自然河川はB地区の北側で幅約11mのものが検出されているにすぎない。包含層は粘質もしくは粘土で、全域に認められ、遺物の量もかなり豊富である。

**古墳時代中期～後期** 中期の遺構面はB地区の南端のみでしか検出されなかった。ベース層は古墳時代前期のベースであるシルト層を切って堆積する粘土層である。後期遺構面は北側A・B地区では1、2の遺構を検出したものの明確には検出されず、包含層も観察されなかった。調査区南側G地区では、畦畔を伴った5世紀後半～6世紀代の水田面が検出されている。この水田面は古墳時代前期砂層上面に粘土層を客土したものである。包含層は一部途切れる部分もあるが、C～G地区にかけて存在するが、遺物量はあまり多くない。この時期の集落の中心は前述のように北接の友井東遺跡よりに移動したものと思われる。

**飛鳥時代～平安時代** この時期は概して粘質土もしくはシルトが堆積している。また検出した遺構も大半が水田や畑などの耕作に関係した遺構である。飛鳥時代遺構面はA・B地区の一部で検出したのみであるが、すでに現在の条里と合致する坪界畦畔や溝が検出されているのに注目されよう。また、F～G地区にかけてこの時期の長瀬川と考えられる大河川が検出されている。奈良～平安時代になると、この地域での河川は検出されなくなり、B地区の一部を除いて全面が水田化されたようである。

**中世以降** この地域の生活に大きな影響を与えていた旧大和川（長瀬川）の流れは10世紀以後、美園遺跡の南側に位置するほぼ現在の位置を流れるようになる。さらに13世紀以後は堤防の築堤により流路が固定されるに至って、土地はかなり安定し、現地形の基礎ができあがった時期である。堆積層は、粘質土とシルトが主で、条里制に合致した水田や播上田、さらには用水路等が形成され、現在に至る。

以上のように各時期の土層の状況を概観したが、美園遺跡では、弥生時代前期と古墳時代前期に大規模な集落が検出されている。これらの集落が位置していた地点を付図2より検討してみると、大河川の上に位置していることがわかる。これは、下層の河川が砂の堆積をもたらし微高地形を形成させているためと思われ、沖積平野における集落の一端がうかがえる。（岡本）

#### 註

(1) 亀島重則編「友井東」(その1) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。

(2) 阪田育功「河内平野の形成と河川の変遷」「佐堂」(その2)－1 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。

## 第2項 各地区の層序

美園遺跡における土層調査はA地区の北端よりG地区の南端までの約600mの縦断面調査を実施し、さらに数ヶ所の横断面調査を行なった。今回これらの土層図をすべて載せることは紙数の関係より不可能なため、各地区的最も代表的な地点を選び柱状模式図として表わすことにした。以下、各地区ごとに説明していくこととする。

### (1) A地区(第3図)

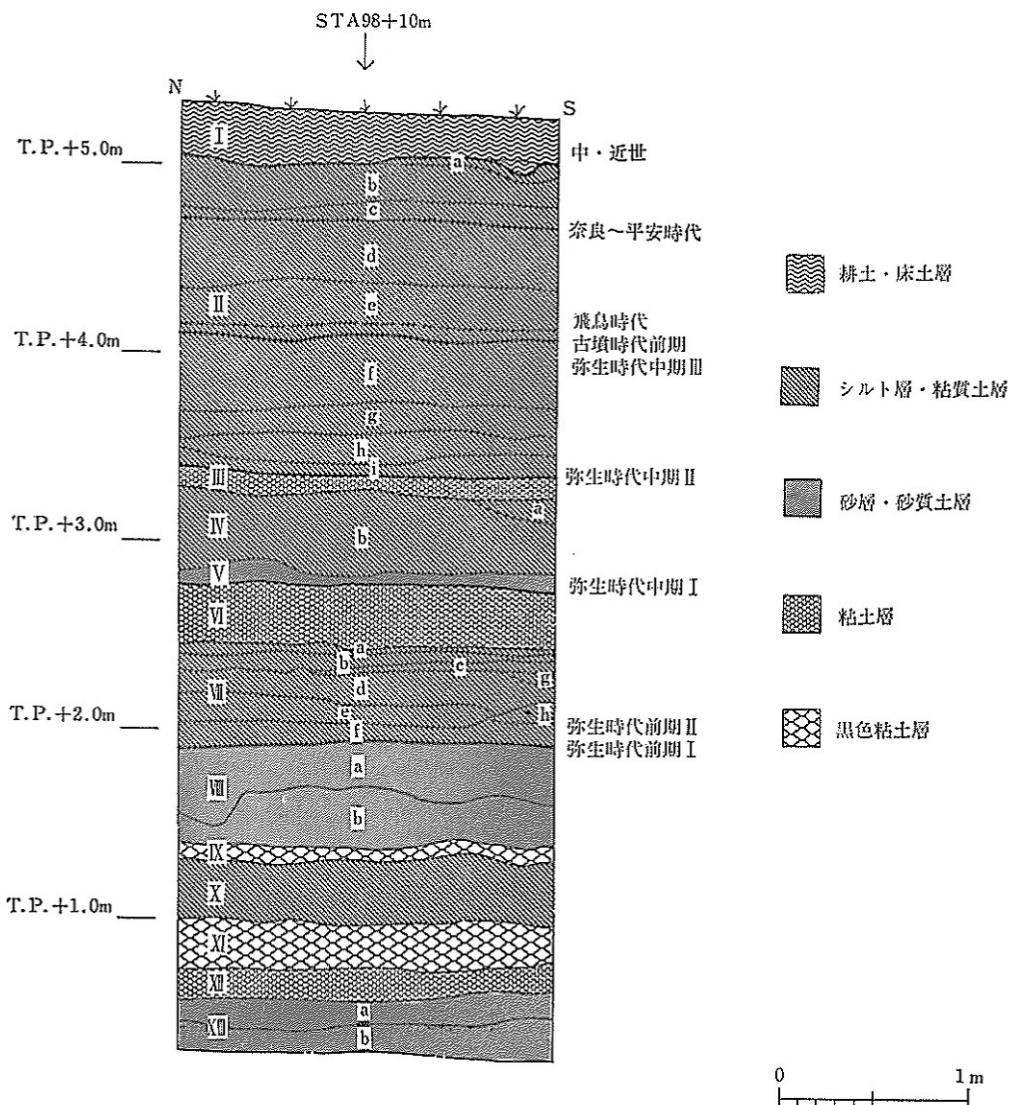
A地区の調査は断面調査も含めて、現地表(T.P.+5.3m)下より深さ5mまで実施した。その間に9遺構面を検出することができた。すなわち、上層より中・近世遺構面、奈良～平安時代遺構面、飛鳥時代遺構面、古墳時代前～中期遺構面、弥生時代中期Ⅲ遺構面、弥生時代中期Ⅱ遺構面、弥生時代中期Ⅰ遺構面、弥生時代前期Ⅱ遺構面、弥生時代前期Ⅰ遺構面の計9遺構面である。これらの遺構面を形成、もしくは、覆っている土層を質で分けると、基本的には13層に大別でき、さらに、各層は、色調や時期差によっていくつかに細分することができる。以下、層別に観察していくこととする。

**第I層** 喰灰色を呈した、府道中央環状線建設時までの耕作土である。A地区全域に0.2m～0.3mの厚さで堆積する。この地区では、その後の盛土等は認められなかった。

**第Ⅱ層** 粘質土及びシルトである。約1.6～1.7mの厚さで堆積している。この層は比較的安定した層で、全域にわたって起伏はあまり認められない。そのためか、この層が形成される過程で5遺構面(弥生時代中期Ⅲ～中・近世面)が検出された。また、土質や色調により9層に細分できた。Ⅱa層は明茶褐色粘質土、Ⅱb層は茶褐色粘質土で、両層とも現水田面の床土であるとともに、中・近世遺構面のベースを成している。数百年間の遺構面が同一面で検出されることから、幾度となく、削平され、開墾されていたことがうかがえる。Ⅱc層は黄褐色粘質土である。この層からは奈良～平安時代の遺物が若干出土するが、瓦器片は全く含まれていない。したがって中世以前の堆積と思われる。Ⅱd層は褐色粘質土で、奈良～平安時代遺構面のベースである。Ⅱe層は暗茶褐色粘質土で、ほぼ0.2～0.25mの厚さで堆積し、4～5世紀代の遺物を含む。A地区的北側ではこの層の一部を削取り飛鳥時代の遺構面が検出される所があるが、Ⅱe層を明確に分層することはできなかった。Ⅱf層は暗紫褐色粘質土(一部粘土)で弥生時代中期(Ⅲ)～古墳時代前・中期遺構面のベースとなる。この層は北側にいくと黄灰色シルトとなり安定した層を成す。Ⅱg層は緑灰色シルト、Ⅱh層は暗灰色粘質土で、両層は、A地区中央部のみで観察された。Ⅱi層は黄灰色シルトであるが、中央部では砂質土となり、この砂質土の下層のみに弥生時代中期Ⅱ遺構面を検出することができた。

**第Ⅲ層** 黒灰色粘土である。厚さ約0.1mと比較的薄い堆積層であるが、全域に認められる。また弥生時代中期Ⅱ遺構面のベース層と思われるが、上層に砂質土が覆っている部分でしか遺構を検出することができなかった。遺物は全く含まれない。

**第Ⅳ層** 砂層に近いシルトである。流水堆積により形成されたものであり、厚さ0.4m前後で



第3図 A地区土層断面図

A地区のほぼ全域にわたって堆積する。さらに、色調により2層に分層できる。**Ⅳa**層は灰色シルトで、同地区的南側では、砂質土となる。**Ⅳb**層は淡緑灰色シルトで、ブロック状に砂を含む。なお、両層とも遺物は含まれない。

**第Ⅴ層** 茶灰色砂質土である。上層第**Ⅳ**層とは同一時の流水堆積と思われる。第**Ⅳ**・第**Ⅴ**層が堆積した原因としては、A地区北側検出のANR202、さらには北接する友井東遺跡検出の弥生時代中期の自然河川<sup>(1)</sup>の氾濫によるものと思われる。堆積した時期は遺物が出土していないので明確ではないが、上・下層の関係や上記の自然河川の関係より弥生時代中期前半に形成された堆積層と考えられる。

**第**Ⅺ**層** 暗青灰色粘土で一部に淡黄褐色の砂がブロック状にはいる。比較的均質で水成堆積と

思われる。厚さ0.4m前後で北側にゆるやかに傾斜していく。この層の上面は、弥生時代中期I遺構面のベース層を成すが、上記第Ⅶ層のところで述べた自然河川の氾濫により、この遺構面は消滅したものと思われる。

**第Ⅸ層** 弥生時代前期（新段階）の遺物を包含する粘質土もしくはシルトである。この下層には弥生時代前期の遺構面が存在し、堆積も除々に行なわれたためか同一土層内ではあるが幾層もの堆積が観察された。この層は同地区中央部から南側にかけては厚さ約0.5mと厚い堆積で、南端では粘土となり、北側に行くと0.2m前後と薄くなる。これは下層の弥生時代前期の遺構と関係しているためであろう。Ⅷd層は幾層にも分層されている中で同地区のはば全域に0.1m～0.15mの厚さで堆積しており、弥生時代前期の遺物を最も多く含んでいる。Ⅷf層は黒灰色粘質土であり、ところどころ粗い砂質土のところがある。また、この層の上面で弥生時代前期IIの遺構面が検出されるため、整地土の可能性も考えられる。

**第Ⅹ層** 弥生時代前期I遺構面のベースを成す砂質土、もしくは、シルトである。この層は弥生時代前期以前の洪水等による堆積層と考えられ、厚さ0.5mと厚く微高地形を形成している層である。そのためこの層が形成されている同地区中央部からB地区にかけては、弥生時代前期の遺構面が特に密集している。北側に行くと同層は粘質土となり、さらに暗緑褐色粘質土と紫褐色粘質土の2層に分かれる。この北側の粘質土は弥生時代前期の水田耕土と考えられ、暗緑褐色粘質土、紫褐色粘質土はともに弥生時代前期I遺構面、弥生時代前期II遺構面のそれぞれの水田耕土になるものと思われる。なお、Ⅹa層は黄灰色砂質土、Ⅹb層は青灰色砂質土である。

**第Ⅺ層** 第2黑色粘土である。厚さはほぼ0.1m前後で比較的うすい堆積層であるが、同地区全域にわたって認められ、南側から北側にかけてゆるやかに傾斜する。この層は北接の山賀遺跡との関係より、縄文時代晚期の層と考えられるが、明らかに自然堆積層と思われる。また色調によると当時は湿地帯であり、かつ長い期間大気にふれていたものと考えられる。

**第Ⅻ層** 緑灰色粘質土であるが、中央部より南側にかけて粘土となる。厚さは0.2m～0.3m前後ではほぼ水平に堆積する。

**第Ⅼ層** 第1黑色粘土である。第Ⅺ層とはほぼ同じであるが、やや茶色が混じる。厚さは0.2m前後で全域にわたってほぼ水平に堆積する。縄文時代後期から晚期の層と思われるが、自然堆積層であるため遺物、及び遺構が検出されなかったので明確にしがたい。

**第Ⅽ層** 緑灰色粘土もしくは粘質土で、色調はほぼ第Ⅻ層と同じである。中央部では0.15m前後の厚さであるが、北側に行くほど厚くなる。

**第XIII層** 砂質土である。南側から北側にゆるやかに傾斜し、南側にはさらに下層の砂層が認められる。XIIIa層は灰色微砂質土であり、同地区中央部より南側にかけて観察された。

以上、A地区の土層堆積時期をまとめてみると次のようになる。第I層→近世～現代、第II層→弥生時代中期～近世、第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層→弥生時代中期前半～弥生時代中期中頃、第Ⅵ・Ⅶ層→弥生時代前期後半～弥生時代中期前半、第Ⅷ・Ⅸ層→縄文時代晚期～弥生時代前期後半、第Ⅹ・

Ⅹ層→縄文時代後期(?)～縄文時代晚期、第Ⅺ・XIII層→縄文時代後期以前の堆積である。(岡本)

註(1) 鬼島重則編『友井東』(その1) 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター 1984年。

## (2) B地区 (第4図)

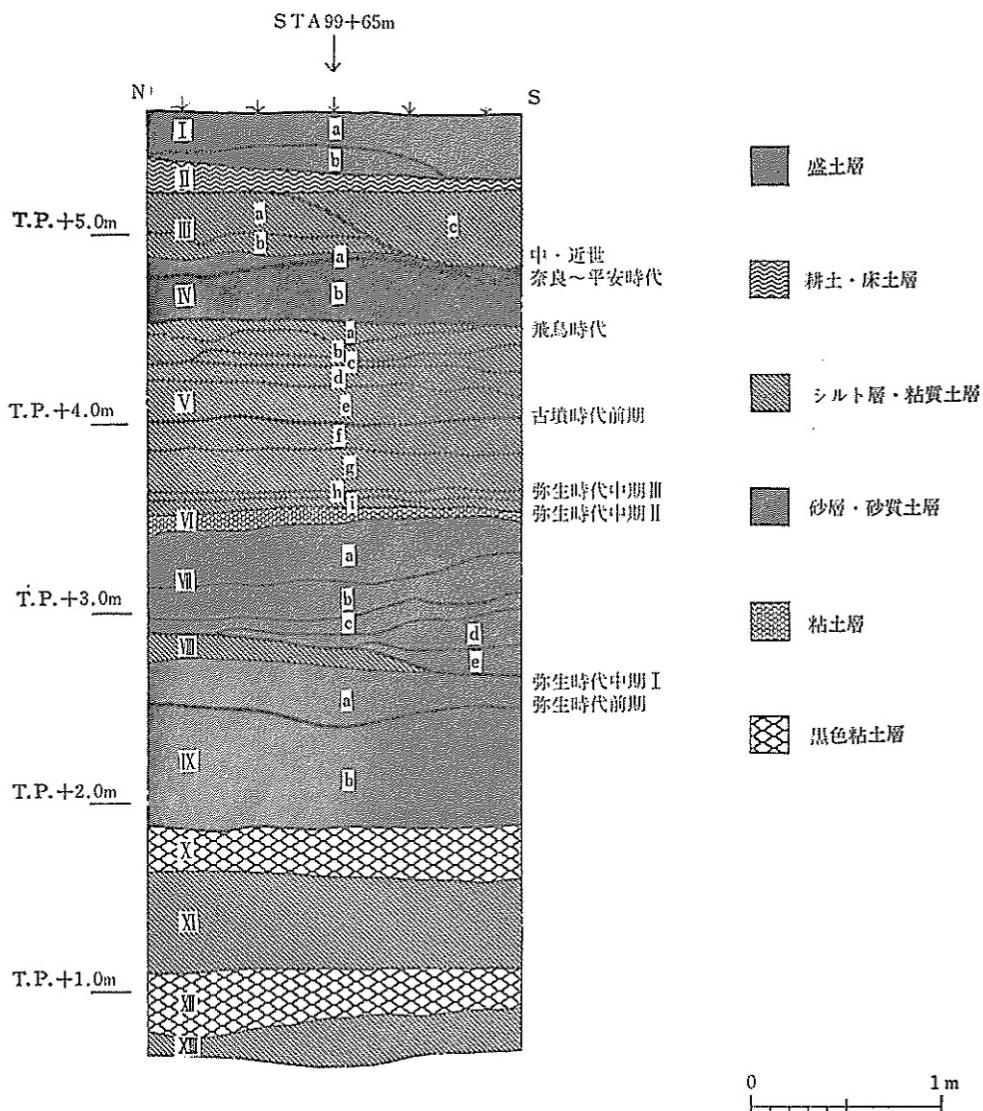
B地区における断面観察は、全地域にはおよばなかったが、何箇所かにおいて現地表 (T.P. +5.7m) 下5mまで行なった。土層の堆積状態はトレンチが長いため、それぞれの場所で様々に異なるが、その中でトレンチのやや南側ではあるが表土下5mまで観察したSTA99+65m地点の土層断面を例にあげて説明してみよう。この地点は、A地区同様、土質で分けると13層に大別でき、さらにこれらの層は、色調や時期差によっていくつかの分層が可能であった。また、同地点における遺構面は表土下5mまでの間に中・近世遺構面、奈良～平安時代遺構面、飛鳥時代遺構面、古墳時代前期遺構面、弥生時代中期Ⅲ遺構面、弥生時代中期Ⅱ遺構面、弥生時代中期Ⅰ遺構面、弥生時代前期遺構面の計8遺構面を検出したが、さらに同地区中央部では古墳時代前期遺構面が1面のみならず2面、南端部では古墳時代前～中期の遺構面が、それぞれ認められた。しかも、STA99+65m地点で検出した遺構面でも北側や南側にいくとかならずしも検出できたわけではない。B地区全域にわたって検出した遺構面は弥生時代前期遺構面、古墳時代前期遺構面、奈良～平安時代遺構面の計3遺構面にすぎず、他の遺構面は部分的にしか検出することができなかった。遺構面を全域にわたって検出することができた時期は土地が比較的安定していた時期であり、他の遺構面は、長い歴史の中で洪水等による自然の力や人的による開墾や削平により消滅したものと思われ、そのために全域にわたって検出できなかったものと考えられる。ではSTA99+65m地点の土層断面を層別に概観してみよう。

第Ⅰ層 府道中央環状線設置後の盛土(攢乱層)であり、0.2～0.3m前後の厚さで全域に堆積する。

第Ⅱ層 府道中央環状線設置前の耕作土である。この部分は厚さ0.1m前後と薄いが、それはやや北側に近世～近代の東西方向の里道が下層より盛り上がっているためであり、他の部分では、ほぼ0.2m前後の厚さで全域に認められる。

第Ⅲ層 粘質土である。厚さは0.3m前後ではほぼ水平に全域にわたって堆積する。この堆積層は中・近世のベース層を形成するが、A地区同様、ほぼ同一面でしか検出しえなかった(一部分において中世面と近世面の分層が可能であった)。同地点におけるⅢa層(茶灰色粘質土)、Ⅲb層(黄褐色粘質土)は攝上田による盛土であり、Ⅲc層(暗茶褐色粘質土)は攝上田と攝上田の間の谷(溝)の部分の堆積土である。

第Ⅳ層 砂及び砂質土である。Ⅳa層は褐色もしくは、黄褐色の砂でこの付近と同地区北側で観察され、他の地点は粘質土であった。この層の下層が奈良～平安時代の遺構面であり、同層が覆っているところでは当時の足跡が多数検出され、遺存状態も比較的よかつた。Ⅳb層もこの付近のみでしか観察されなかった層で淡茶灰色を基調とした微砂質土で北側では若干シルト質になる。ここでは、この堆積層が奈良～平安時代のベース層を形成している。



第4図 B地区土層断面図

**第V層** 厚さ1mの粘質土もしくはシルトで、最も安定した時期の堆積層と考えられ、幾層にも分層できるとともに遺構面も、飛鳥時代、古墳時代前期、弥生時代中期Ⅲの3遺構面が検出された。Ⅴa～d層はシルトで飛鳥時代(7世紀末)のベースを形成する層であるが、上層に第Ⅴb層が覆っている部分でしか同遺構面を検出することができなかった。Ⅴe層は黒褐色粘質土で古墳時代前期の遺物を包含する。Ⅴa～d層はこの北側で徐々に薄くなり、かわりにⅤe層が厚くなっていく。そしてB地区中央部北側ではⅤe層がそのまま飛鳥時代のベースを形成するに至る。また同様に南側でもⅤa～d層は徐々に消滅ていき、かわりに同地区南端では古式の須恵器を含む淡茶色の砂の堆積が認められ、同時期の遺構面も検出されている。

Ⅴf層は古墳時代前期のベース面を形成する緑灰色を呈したシルトである。このⅤf層は中央部

から北側にいくと淡黄灰色のシルトに変化し、同地区中央部で最も高くなり、両側にゆるやかに傾斜する。これは下層の自然河川（B N R 202）によって微高地が形成されたためであり、その最も高い所に住居等の遺構が密集する。また、中央部ではⅤf層の上に、さらに約0.1mの厚さで茶褐色の整地土が観察され、その上層にも古墳時代前期の遺構面（特に住居跡等）が検出され、計2面の古墳時代前期遺構面の存在が確認された。

Ⅴg層は青灰色シルト（一部に砂質土有り）である。ほぼ0.2m前後の厚さで全域に観察されるが、同地区中央部では下層のB N R 202によって形成された微高地のため観察できないところがある。Ⅴh・Ⅴi層はそれぞれ淡灰色粘質土及び茶灰色粘質土である。同層はともに弥生時代中期Ⅱ遺構面のベースを形成しているが、明らかに自然堆積層と考えられ、遺構としても同地区北端と中央部において自然河川のみしか検出されなかった。また、これら自然河川のオーバーフローと思われる砂の堆積がⅤg層とⅤh層の間に認められる部分があり、わずかではあるが、その中より弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式）の土器片が出土する。

**第Ⅵ層** 弥生時代中期Ⅱ遺構面を形成する暗灰色粘土である。同層はB地区北側で若干厚くなり、その部分でのみ弥生時代中期Ⅱ遺構面を検出した。

**第Ⅶ層** 砂である。しかしこの地点における同層は、下層のB S D 257の氾濫によって形成された堆積層であり、他の地点では暗緑灰色粘土が、ほぼ0.2mの厚さで堆積している。

**第Ⅷ層** 紫褐色もしくは黒色の粘質土である。弥生時代中期Ⅰの遺構面を成すとともに弥生時代前期（新段階）の遺物包含層である。同地区中央部では上層のB N R 202により弥生時代中期Ⅰの遺構面は検出できなかったが、北側や南側では同層を盛ったと思われる畦畔状の遺構がいくつか認められた。

**第Ⅸ層** 砂質土及び砂である。Ⅸa層は紫褐色（一部に黄褐色が混じる）砂質土で弥生時代前期（新段階）の遺物を包含する。同層は同地区的北側と南側でしか認められず、中央部では粘質土となる。さらに同層内でも分層が可能な場所があり、その部分では弥生時代前期面が2面検出されたが厳密には全域に拡がっていたものと思われる。そのように考えると、同層は当時の整地土的な性格にあった可能性がある。

Ⅸb層は黄色砂である。弥生時代前期遺構面のベースを形成する。厚さ0.7m前後の堆積層ではほぼ全域に観察されるが、同地区南端よりC地区側では全く認められなくなる。この砂層は縄文時代晩期の河川跡、または、その氾濫によってたらされた砂の堆積と思われ、周辺の地域より若干レベルが高くなり、微高地を形成する。弥生時代前期の住居跡等の遺構はこの微高地上に密集し、同地区中央部が最も高く、そこを頂点として両サイドにゆるやかに傾斜していく。

**第Ⅹ層** 第2黑色粘土である。同層はA地区より続くものであるが、同地区北側で一度上層のⅨb層に切られ、中央部やや南側で再び観察されるに至るものである。同地点では厚さ0.2～0.3mの堆積であるが、北側では0.1m前後と比較的薄い。しかも、水平堆積でなく、ある程度の起伏が見られる。時期は無遺物であるため明確にしがたいが、山賀遺跡等の関係より縄文時代晩期

の有機質を多く含んだ水成堆積と考えられる。

**第Ⅹ層** 緑灰色粘質土である。0.5~0.6mの厚い堆積層で、ほぼ水平で全域に堆積する。なお、同層は同地点において花粉・珪藻分析を実施した。詳細については第Ⅱ章、第3節を参照して頂きたいが、その結果によると、広葉樹の林地が推定され、その下に草本植物が生育していたものと考えられている。それらの植物が長い間に腐植し、やがて水などと混じり合って、上層の**第Ⅸ層第2黑色粘土**が形成されたものと考えられる。

**第Ⅺ層** 第1黑色粘土である。南から北へゆるやかに傾斜する層で、同地区北側で同層を切って幅2m、深さ0.3mの流路を断面で検出した。時期は無遺物のため明確にしがたいが、D地区で同じように同層を切った大流路が検出され、その中より縄文時代後期の土器が出土していることからほぼ同時期か、それ以前の堆積層と考えられる。なお、本層も花粉・珪藻分析を実施した。

**第XIII層** 灰色粘質土である。全域に認められるが、さらに北側の一部で下層より砂の堆積が観察される部分がある。本層も花粉・珪藻分析を実施した。

以上、STA99+65m地点を中心にB地区全体の基本層序を概観してみた。それによると弥生時代前期と古墳時代前期の集落遺構が、レベルを異にするがほぼ同一地域で検出された。その下層にはそれぞれ自然河川が流れしており、ともにその河川によって形成された微高地上に位置することが判明した。

次にそれぞれの土層の堆積時期をまとめてみることにしよう。第I層は現代、第II層は近代、第III層は中・近世～近代、第IV層は飛鳥時代～中・近世、第V層は弥生時代中期前半～飛鳥時代、第VI・VII層は弥生時代中期初頭～同時代中期前半、第VIII層は弥生時代前期～同時代中期初頭、第IX・X層は縄文時代晚期～弥生時代中期初頭、第XI層は縄文時代後期～縄文時代晚期、第XII・XIII層は縄文時代後期以前となる。(岡本)

### (3) C地区(第5図・付図2)

C地区においては、弥生時代前期から近代に及ぶ11枚の遺構面が確認された。遺構面とそれを覆う各土層の状況を地形環境の変遷と関連させて、下層から順に述べてみたい。

#### 第1黑色粘土層

T.P.+0.9~2.0mにかけて黒色粘土層が堆積している。この層はほぼ美園遺跡全域に存在すると考えられ、調査区相互の関係を把握する上で重要な鍵層の一つである。堆積した時期については、F地区の所見(滋賀里式土器を上部に含む自然河川によって切られている。)から判断して縄文時代晚期初頭以前と考えられる。美園遺跡の北方に位置する山賀遺跡、友井東遺跡において<sup>(1)</sup><sup>(2)</sup>も類似する層が検出されている。また南側の佐堂遺跡、久宝寺遺跡でも黒色粘土層の堆積が認められ、今後各遺跡相互の土層対比が進展すればその広がり及び堆積状況が明らかになろう。時期<sup>(3)</sup><sup>(4)</sup><sup>(5)</sup>的な面から比較すれば、山賀遺跡の第2黑色粘土層と同一になる可能性が大きい。

#### 弥生時代前期遺構面

T.P.+1.9~2.3mにかけて、青灰色粘土(部分的に青灰色シルトが存在する)をベースとする

遺構面が検出された。この遺構面の時期は、B地区との対比及び出土遺物から判断して弥生時代前期前半に相当する可能性がある。堆積状況は比較的平坦であるが、南側でやや高まりを示す。この面は黒色シルト層、黒色粘土層（第2黒色粘土層）、暗青色粘土層等によって覆われており、これら弥生時代前期遺物包含層の厚さは、0.3～0.4mである。第2黒色粘土層はB地区において弥生時代前期後半の遺構面を形成しているが、C地区でその上面から遺構は検出されていない。<sup>(6)</sup> この層も第1黒色粘土層と同様山賀遺跡、友井東遺跡で認められる。しかし堆積が不連続であり、時期的にも縄文時代晩期末から弥生時代前期までと幅がある点等から鍵層として広範囲に比較するには問題が残る。その一枚上層の暗青色粘土層上面で溝（C S D 201）が認められた。溝から遺物は出土していないが、B地区との関係から推察して弥生時代前期後半の遺構と考えられる。

#### 弥生時代中期前半遺構面

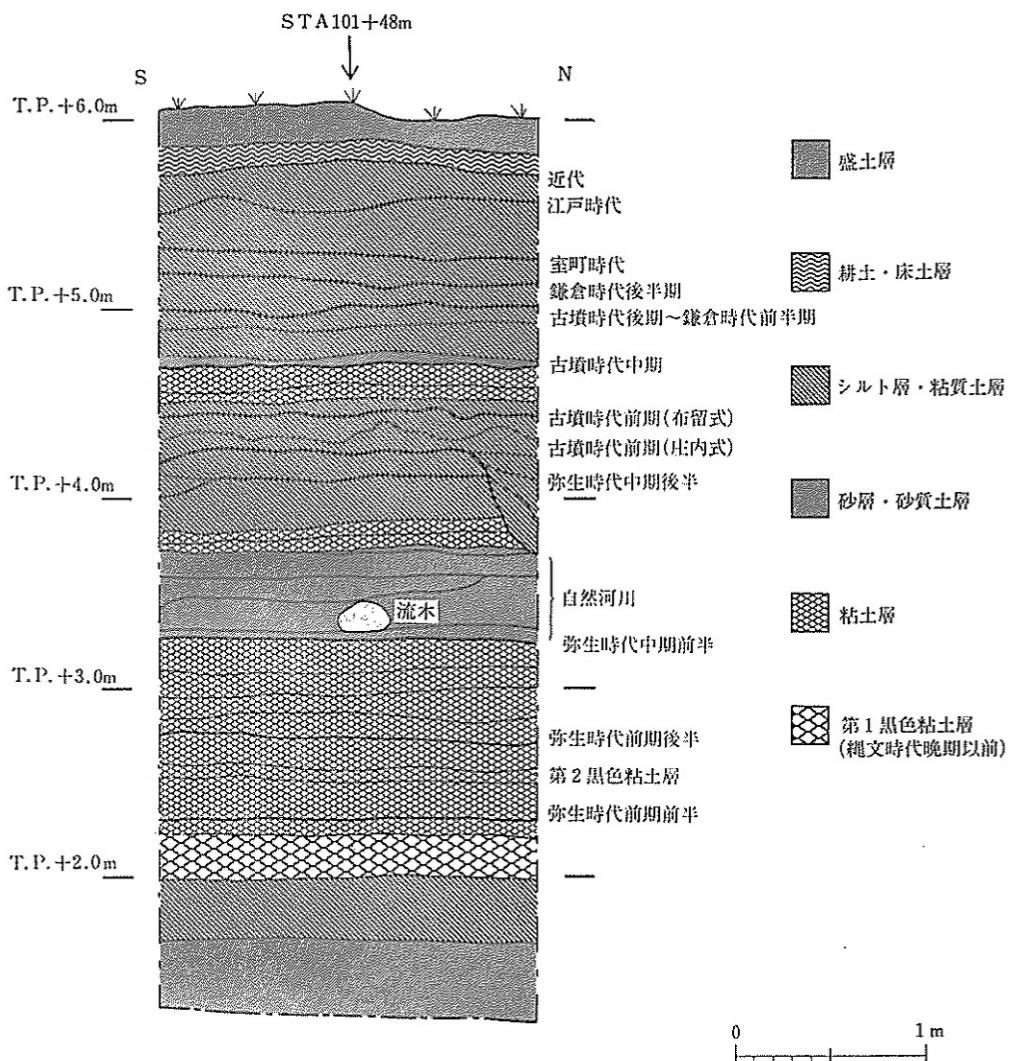
T.P.+2.8～3.3mにかけて、調査区中央より南側で自然河川（C N R 202）の河床面を検出した。C N R 202からは直接時期の明らかとなる遺物は発見されなかったが、B地区との関係から弥生時代中期前半に相当すると思われる。弥生時代前期後半の遺構面からC N R 202河床面までの間は、青灰色粘土が約0.7m堆積していた。この青灰色粘土層中には、調査区南半部で砂とシルトの堆積が部分的に認められ、一時自然河川が流れているようである。7CトレンチのC N R 201もこの川が流れている時期と一致する可能性もある。C N R 201についても時期は不明であるが、弥生時代前期後半から中期前半の間に位置付けられる。C N R 202は砂層の広がりが幅90m以上もあり、時間的累積の結果とはいえかなり大きな川が存在したと思われる。この自然河川の堆積作用で、最も厚いところで約1.3mの砂層が観察された。また川床近くでは径約2cmの小礫と粗砂の堆積があり、一時期かなりの流速をもって流れていたことがうかがわれる。

#### 弥生時代中期後半遺構面

T.P.+4.0～4.2mで調査区南側を中心に弥生時代中期後半の遺構面が検出された。この面は、下層のC N R 202によって堆積された砂層の高まり部分に重なって存在する。遺構面は砂層の上に堆積した青灰色シルト層と一部細砂層から構成される。この時期にもC N R 202の末裔とでも言える自然河川（C N R 203）が、同時期の遺構密集部分の北側に存在した。C N R 203周辺及び北側では、足跡が検出される以外は遺構が認められず、水田の可能性もある。C地区では弥生時代前期前半から中期後半までの土層の堆積が最も大きく、最高約2.3mもある。この状況はC N R 202によって代表される自然河川の影響が強く作用しており、弥生時代中期後半から現在に至る土層の堆積量を越えている。

#### 古墳時代前期（庄内式）遺構面

T.P.+3.9～4.25mにかけて、弥生時代中期後半の遺構面にすぐ重なるようにして庄内式の遺構面が認められた。この間の厚さは0.1～0.15mであり、暗黄褐色シルト（粘質シルトも含む）が堆積している。基本的には、前時期同様にC N R 202が形成した微高地の上に集落が立地している状況である。C地区の中央より北側については、足跡面が確認されるだけであり、花粉及び



第5図 C地区土層断面図

種子等の分析結果から判断して水田の可能性が高い。調査区北側部分は、すでに弥生時代中期前半よりやや窪んでおり湿地化した状態が永く続いたと考えられ、自然河川の後背湿地から水田等に利用されていったのではなかろうか。また調査区中央やや南側部分で数条の溝が重複しており、この部分はすでに弥生時代中期後半よりやや窪んでいる。この時期のCNR203との関係が考えられる。

#### 古墳時代前期（布留式）遺構面

T.P.+4.1~4.8mにかけて、暗黄褐色細砂層及び暗黄灰色シルト層で構成される布留式の遺

構面を検出した。この面は、調査区中央部から北側にかけて古墳時代中期の遺構面と重なる部分をもつが、時期的に安定した面を形成している。庄内式遺構面との間は主に粘土とシルトの堆積を見るが、庄内式時間幅の中で C S D 301、303、304、305が埋没する際に砂を被る。この時の砂が、前述の溝周辺に堆積している。また布留式の C S D 323～C S D 325は、庄内式の時期に溝が集中した部分にはほぼ重なった状態で検出され、継続的な使用が行なわれている。調査区南側はやや高まりを示してはいるが、美園古墳基底部周辺で粘土層の堆積が広がっており、不安定な状況が想定される。このような理由から、古墳造営に際して整地を行なったものと考えられる。

#### 古墳時代中期遺構面

T.P.+4.7m付近で調査区南側部分に限って布留式遺構面の約0.2～0.3m上方から、古墳時代中期の面を検出した。この面では遺構は検出されなかったが、須恵器が少量出土している。また調査区中央部より北側では布留式の遺構面と同一面になる。布留式の C S D 323、C S D 324はこの時期かなり浅くはなっているものの痕跡程度に存在したようである。5Cトレーナー C S D 323最上層から5世紀後半の須恵器高杯、杯身、杯蓋が出土した。布留式の遺構面との間には、暗青灰色の粘土が堆積している。調査区北側部分は、庄内式以降この時期まで水田として使用されていたと考えられる。古墳時代中期になると、この部分に自然河川が流れ込み水田が埋没してしまう。

#### 古墳時代後期～鎌倉時代前半期（12世紀末～13世紀）遺構面

T.P.+4.7～5.2mにかけて古墳時代後期から鎌倉時代前期（13世紀）にかけての遺構面を検出した。布留式及び古墳時代中期遺構面との間には、黄灰色シルト層及び粘質土層、砂質土層の堆積がある。調査区南端の美園古墳を覆う暗茶褐色粘質土層中には、古墳時代後期（6世紀後半）の遺物が含まれていた。この時期に古墳が削平を受けたものと思われる。古墳時代後期から平安時代にかけての遺構は部分的にしか認められなかったが、遺物はこの間各時期のものが出土している。遺構が面的に捉えられるのは、鎌倉時代前半期になってからである。その観点から見ればこの遺構面の主たる時代は鎌倉時代前半期と言えよう。条里の坪境にそって南北方向に走る幅8～9mの大水路（C S D 501）が検出された。C S D 501からは、6世紀から13世紀後半までの遺物が出土している。この水路は、ほとんど黄褐色粗砂、細砂の互層によって埋まっているが、上層では青灰色シルトの堆積が観察できる。一定時期かなりの流速をもって水が流れていたと思われる。調査区北半部は若干低くなっている、足跡等が検出されている点から水田の可能性がある。この部分についてもベースは粘質土層及びシルト層であった。

#### 鎌倉時代後半期（14世紀）遺構面

T.P.+4.9～5.2mにかけて検出された遺構面である。一部で下層の鎌倉時代前半期遺構面と同一面を構成している。前時期の C S D 501が埋った後に、水田跡等を中心とした遺構が検出された。前時期の遺構面との間には黄灰色シルト層及び黄褐色粘質土層の堆積があり、調査区北側でやはり若干低くなっている。

#### 室町時代（15～16世紀）遺構面

T.P.+5.1～5.4mにかけて、水田跡等の耕作地に関する遺構が検出された。遺構に伴った遺物は少ないが、包含層中より時期を捉えられるものが出土している。ベースとなる土層は、赤灰色土及び黄灰色粘質土等であり、比較的平坦な堆積を示す。

#### 江戸時代（17世紀以降）遺構面

T.P.+5.4～5.6mにかけて江戸時代に相当する遺構面が認められた。調査区南側を除いて、ほとんどの部分で床土層直下から検出される。水田、畠、井戸、水路等の遺構が認められ前時期同様にはほぼ平坦な土層の堆積を示した。赤灰色土層及び灰褐色粘質土層をベースにしており、遺構と土層堆積状況から室町時代遺構面との連続性が考えられる。

#### 近代遺構面

T.P.+5.65～5.8mにかけて調査区南側の部分で確認された。この面は、耕土層直下に検出されるもので、江戸時代の面と一体を成すようである。暗青褐色粘土及び赤黄褐色砂質土をベースにしている。

#### 現地表面

T.P.+5.8～6.2mにかけて、南側ほど高まりを示す現地表面がある。府道大阪中央環状線建設の際、平均0.2～0.3mで耕土層の上に盛土を行なっている。

#### まとめ

C地区においては、弥生時代前期前半から中期後半までの土砂堆積量が最も大きい。特に、弥生時代中期前半の自然河川（C N R 202）による堆積作用が目立つ。この時期に形成された地形の状況（北側が低く中央より南側にかけて微高地状を呈する）が、その後鎌倉時代前半まで影響として残るようである。弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけての集落は、C N R 202が形成した微高地に立地すると考えよう。（渡辺）

(1) 生田維道編「山賀(その4)」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター1983年。

(2) 魁島重則編「灰井東(その1)」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター1984年。

(3) 枝本哲氏、森屋直樹氏の御教示による。

(4) 寺川史郎氏、尾谷雅彦氏、金光正裕氏の御教示による。

(5) 註(1)文献参照。

(6) 註(1)文献参照。

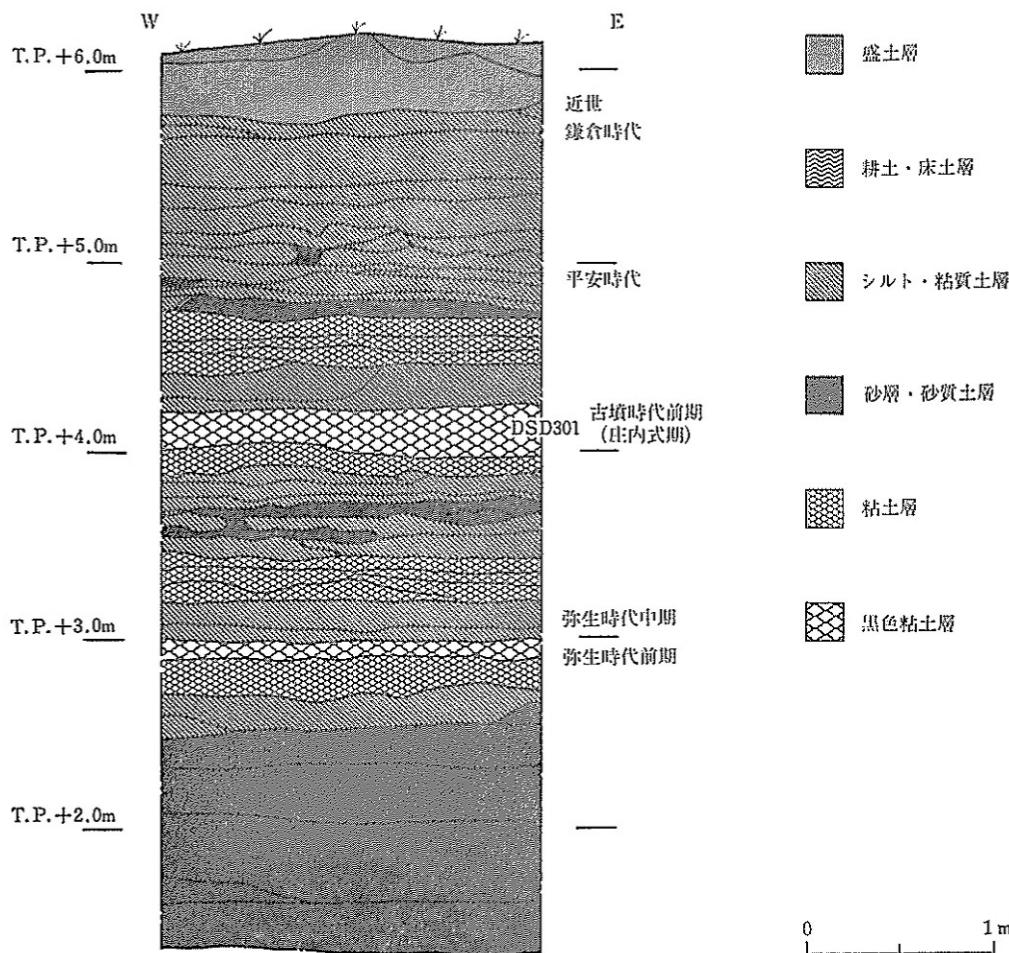
(7) 註(2)文献参照。

(8) 本書第Ⅳ章第2節、第3節参照。

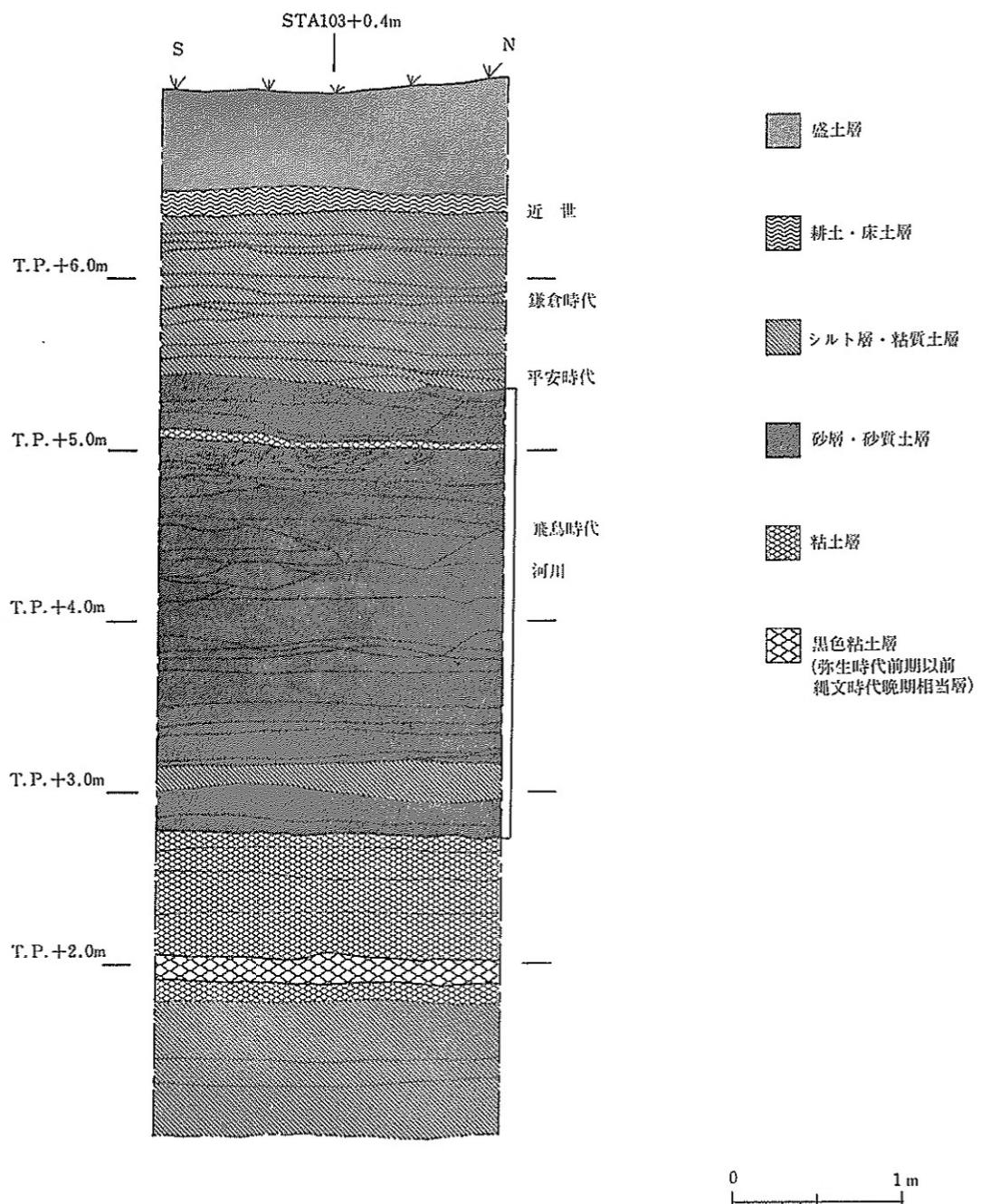
#### (4) D地区（第6図）

現地表面は北端でT.P.+6.10～6.6m、D地区の南端でT.P.+6.60m～mに位置し、南へ行くに従って徐々に高くなっている。以下上層より記述すると、上層より大きく13層を確認し、遺構面は6面を検出した。

第1層は盛土および旧耕作土（近・現代の水田床土も含む）の層である。第2層はシルト層で上層が黄褐色シルト層乃至青灰色シルト層で近世・鎌倉時代、下層が青灰色粘質土層で平安時代である。上層と下層の間に場所によっては砂層が認められる。鎌倉時代の遺構は溝、井戸、畦畔を確認し、平安時代の遺構としては溝、畦畔、足跡を確認した。第3層は砂層である。D地区をほぼ全体的に覆っているが場所によってはシルト層ないし粘土層となり、途切れる所がある。第4層は、青灰色粘土層である。第5層は黒色粘土層で古墳時代前期（庄内式期）の包含層である。包含層の厚さは約20cmを測る。この層はD地区全体を覆っているが、E・F・G地区では飛鳥時代の自然河川が流れている為に、これに相当する層の比較は困難である。更に5・6Dトレインチより以南は全く土器が出土していないので一層難しいものとなっている。第6層はT.P.+4.3~4.5mに位置し、青灰色シルト層で古墳時代前期遺構面（庄内Ⅱ・Ⅲ）のベース層となり、地区の北端では低く、中央部へ行くに従って徐々に高くなり、中央部から南端にかけて平坦になっている。層はやや複雑で、庄内Ⅱ・Ⅲの時期に庄内Ⅰの自然流路の砂層を掘削している為、土



第6図 D地区土層断面図

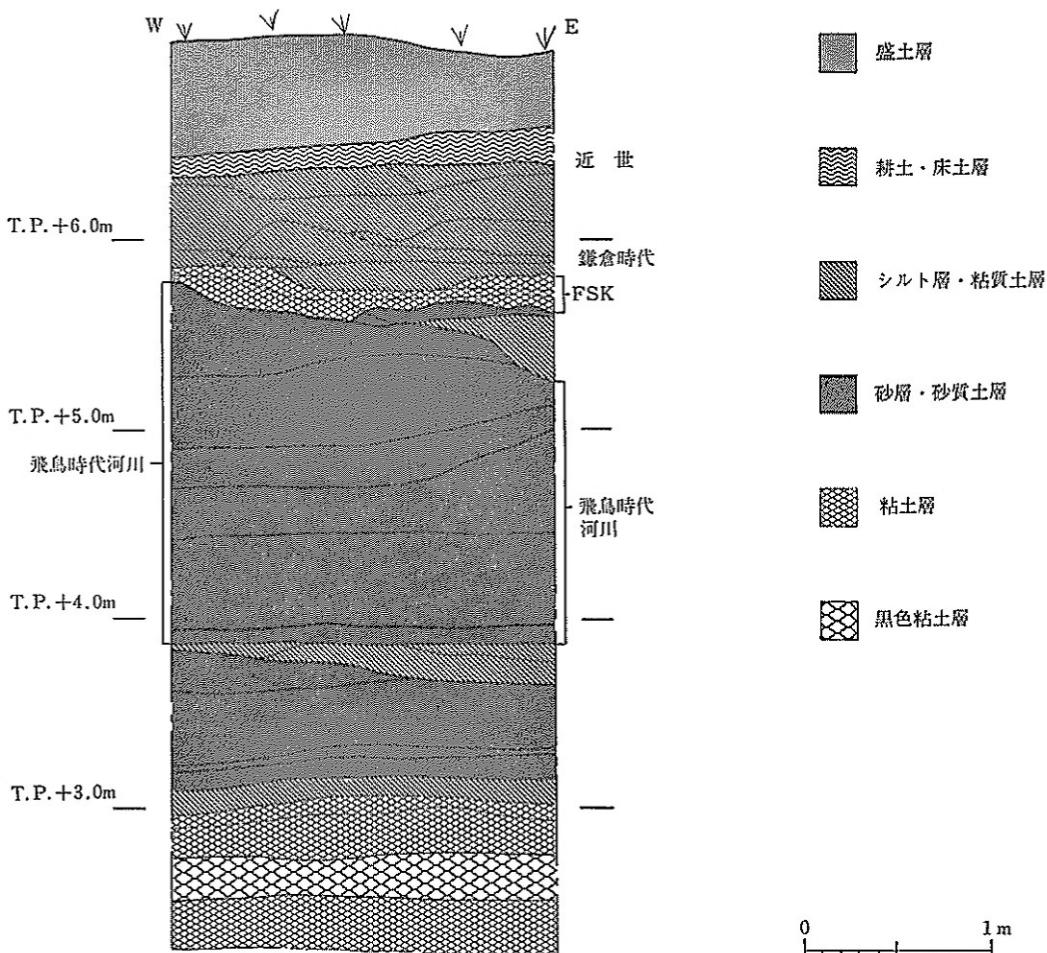


第7図 E地区土層断面図

層中に多くの礫が混入している。第7層はシルト層と砂層との互層である。第8層は粘土層で弥生時代中期の土器を検出している。この層を弥生時代中期Ⅱ面とした。Ⅱ面では溝、土坑、木棺墓、落ち込み、畦畔、足跡を検出した。第9層は青灰色シルト層で弥生時代中期Ⅰ面とした。Ⅰ面では溝と自然河川を検出している。T.P.+3.0mに位置する。第10層は黒色粘土層で弥生時代前期Ⅱ面とした。この層は包含層と思われるが、この層の上面には溝と堰を検出している。第11層は暗灰色粘土層で弥生時代前期Ⅰ面のベース層となる。T.P.+2.7mに位置し、自然河川と土器群を検出している。第12層は青灰色シルト層である。第13層は砂層で縄文時代後期ないし晚期の自然河川である。(小野)

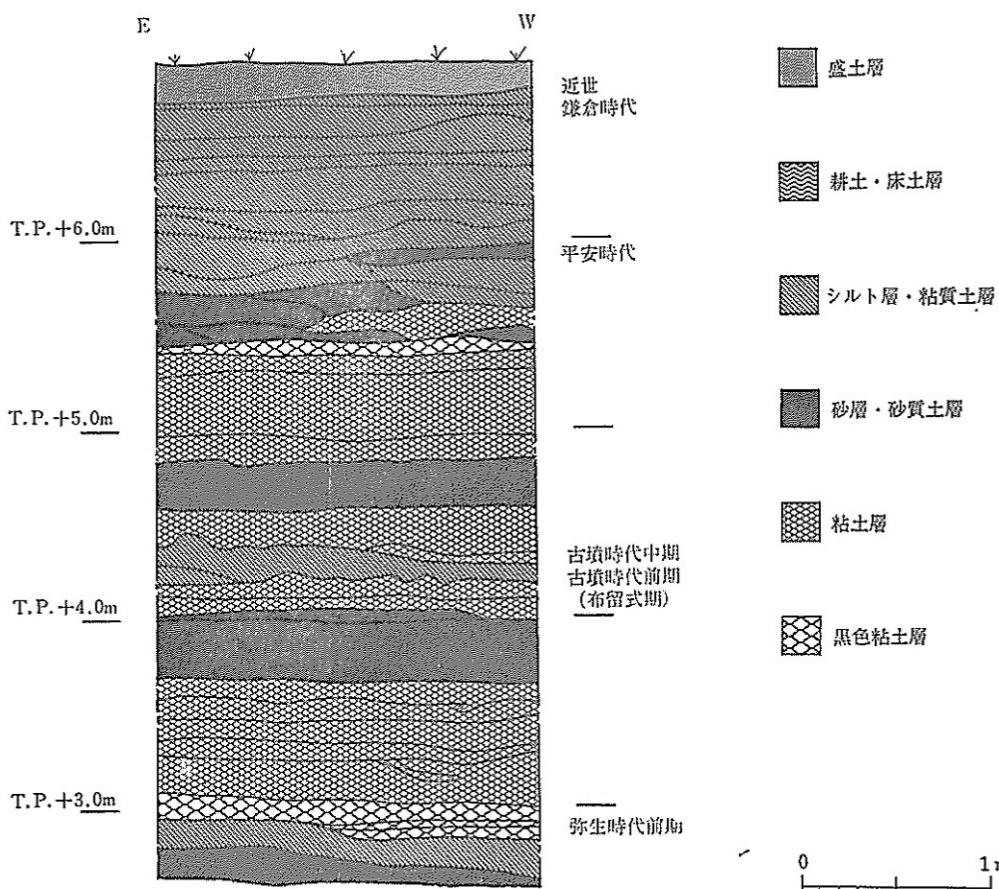
#### (5) E・F・G地区(第7～9図)

E地区の現地表面はT.P.+7mに、F；G地区では7mに位置する。第1層は盛土層で旧耕作土層である。第2層は黄褐色シルト層で近世、鎌倉時代の遺構を形成する。F地区では、地区中央部からG地区北端部まで飛鳥時代自然河川が流れている為若干隆起し、鎌倉時代の遺構面は



第8図 F地区土層断面図

砂層がベース層となる。第3層はE地区北半部とG地区南半部で青灰色シルト層、E地区南半部、F地区中央部、G地区北端部は砂層である。E地区北半部、G地区南半の青灰色シルト層の上面では平安時代の水田面が、またF地区的自然河川の上面では鎌倉時代の遺構が形成される。飛鳥時代自然河川の下部の層位は、青灰色シルト層、砂層、青灰色シルト層、青灰色粘土層、黒色粘土層、青灰色粘土層となり、その下に縄文時代晚期の自然河川の砂層が堆積する。G地区的第3層の下層は、砂層、黒色粘土層、灰色粘土層、砂層、灰色粘土層、灰色シルト層となる。第9層の灰色シルト層は古墳時代中期の水田面のベース層で、T.P.+4.0mに位置する。第10層は砂層または粘土層で、布留式期のベース層となる。その下は、砂層、灰色粘土層、黒色粘土層となり、第13層の黒色粘土層は弥生時代前期の包含層で、T.P.+3.0mに位置する。なお、上層の灰色粘土層からも弥生時代前期の土器を検出した。第13層以下はシルト層、砂層となる。(小野)



第9図 G地区土層断面図

## 第2節 遺構及び遺物

### 第1項 繩文時代

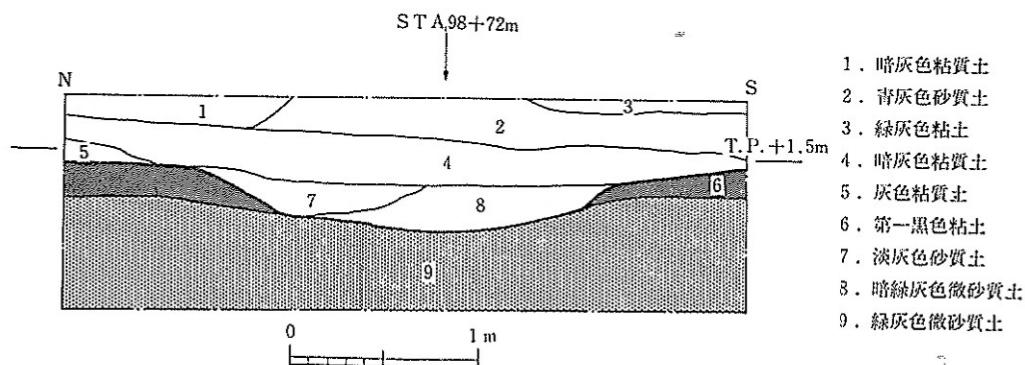
#### 1. 後期

##### (1) B地区

B地区における縩文時代後期遺構面は、第Ⅳ章第1節で述べたように第1黑色粘土上面と考えられる。しかし、平面的に遺構面を検出するまでにはいたらなかった。ただ調査を実施した深度より、さらに下層遺構の有無を確かめるために幅1m、深さ1mの試掘溝を何箇所かに設定した。その際断面観察において小規模ではあるが自然流路を1条検出した。また、当遺構面には対応しないが、上層の弥生時代前期包含層と弥生時代中期Ⅱ遺構面のBNR202より縩文時代後期の土器がそれぞれ出土している。

#### 遺構

BNR101(第10図)STA98+72m地点の断面調査で検出した。第1黑色粘土を切ってほぼ南北方向に流れる。幅は上面で約2.2m、下面で約1.5mを測る。深さは約0.25mで2層に大別できる。なお、遺物は全く出土しなかった。(岡本)



第10図 BN R101土層断面図

#### 出土遺物

##### 〔土器〕(第11図)

弥生時代前期の土器の中に縩文土器が1点混在していた(B1208)。深鉢の口縁部の一部である。暗褐色を呈し、胎土には径0.05~0.2cm大の砂粒を大量に含む。外面の文様は太筋の沈線文によって直線と弧線を組み合せた構成を示す。後期前葉、北白川上層1式に属するものである。

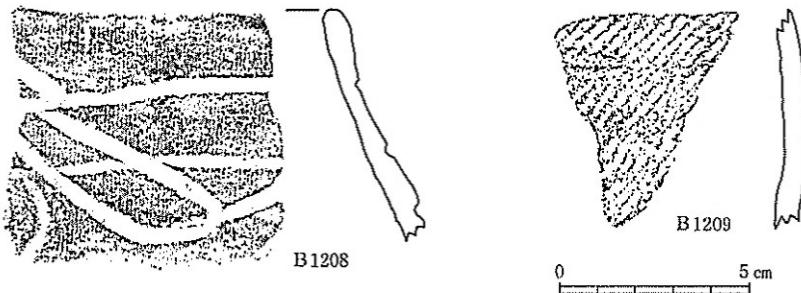
本品は縦横7.0cm強の方形に近い土器片である。磨滅が著しい。しかし、描かれた文様線は非常に明瞭である。弥生土器の中に混在した状況から、あるいは縩文時代の土版や弥生時代中~後期の分銅形土製品などのような文様をもつ土製品として再利用されていたものかもしれない。

なお、縩文晩期以前の縩文土器は包含層からも1点出土している。茶褐色を呈し、胎土には径0.05~0.2cm大の砂粒を大量に含む。器外面には約1.5cm単位の縩痕をもつ。内面はナデ調整であ

る。上記の深鉢の破片と同時期位のものであろう。参考として掲載する。(井藤)

本調査区では人為的な遺構は全く検出されなかったことから、付近には縄文時代後期の集落は存在しなかったものと断言できよう。さらに、当地区は当時、土層の堆積状態や色調より考えて湿原地形を形成し、その中に B NR 101 のような小流路が幾条も流れていたものと推定できる。

(岡本)



第11図 B地区出土縄文時代後期土器

## 2. 晩期

### (1) B地区

縄文時代晩期の遺構は調査した範囲内では検出されなかった。しかし、周辺の調査より第2黒色粘土が同時代に比定される。それによると、この時期も縄文時代後期同様湿原地、もしくは湿地帯であったと思われる。ただ同層を切って、後述する弥生時代前期遺構面のベース層を成す黄色砂層が第2黒色粘土を切って形成されていることから、同層が、縄文時代晩期の河川跡であった可能性がある。もしこれが河川であったとすれば、幅約150m、深さ約0.7mの大河川となり、この時期の旧長瀬川の一部であった可能性が考えられる。しかし、なにぶん調査幅が狭かったことと、弥生時代前期面の遺構をできるだけ保存しようとしたことから、下層の立割り調査ができず、それを明らかにすることできなかった。

なお、同層に対応した縄文晩期の遺物は全く出土しなかったが、上層遺構面の弥生時代前期の遺物に混じって縄文時代晩期終末のいわゆる長原式の土器片が若干出土している。この遺物の詳細については出土場所が弥生時代前期遺構面であるということと、しかも弥生時代前期遺物と混在しているということから、弥生時代前期の遺構・遺物のところで述べることにする。(岡本)

### (2) D・F地区

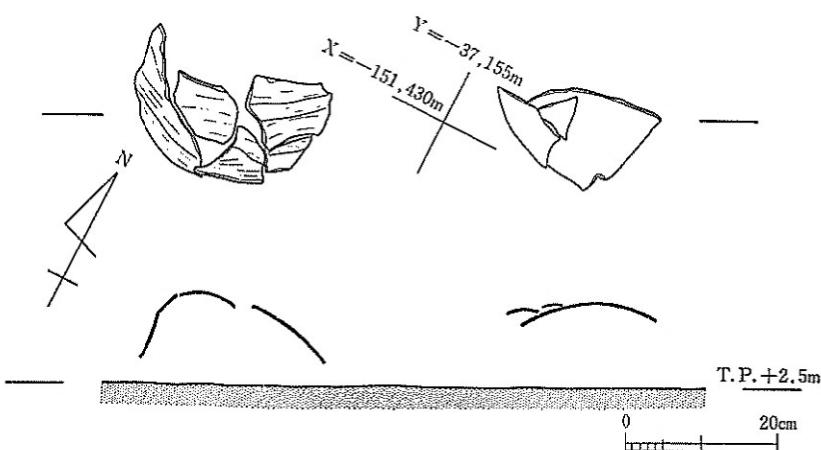
縄文時代の遺構は、2Dトレンチ北端で自然河川 (D NR 101)、Fトレンチで自然河川 (F NR 102)、Gトレンチで自然流路 (G SD 101) を確認した。D NR 101は縄文時代後期 F NR 102は縄文時代晩期である。

**G SD 101** 2Gトレンチの南半部に位置し、幅約5m、深さ0.15~0.25mを測る浅い自然流路である。主軸は北西一南東方向におく。

**D NR 101** 2Dトレンチの北端に位置する。調査最終時の試掘によって河川の上面を確認した

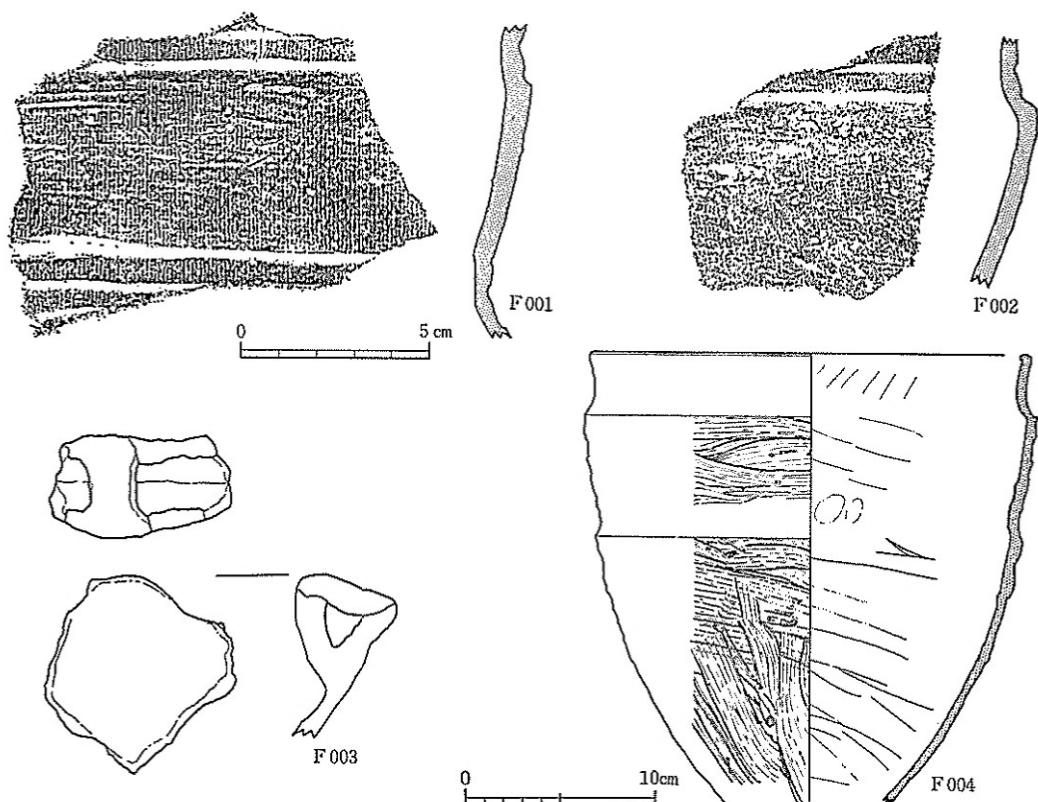
のみであった。依  
って河川の幅、深  
さは不明である。  
出土遺物として土  
器細片がある。

**F N R 102** (第  
12図) Fトレンチ  
に位置し、主軸を  
南北におく。幅は  
約18.5mを測る。  
深さは、底を未検



第12図 F N R 102遺物出土状態図

出の為に不明であるが、約1mと推測される。河川内より T.P.+2.5m のところで深鉢（第12図）を検出した。< F N R 102出土土器 >（第13図・第125図版）F 001・002・004は深鉢で、F 003は浅鉢の口縁部である。F 001・002は2段の段を有し、上段と下段に2～3条の沈線をめぐらす。外面は巻貝条痕のナデ調整、内面はナデ調整を施している。F 004は2段の段を有し、口縁端部は内側に若干折り曲げられている。口縁部は内外面ともにナデ調整を施し、とくに内面は



第13図 F N R 102出土縄文時代後・晩期土器

縦方向のナデが認められる。体部は上段部で横位の削り、下段部で横位の削りの後に縦位の削りを施している。内面は刷毛目状のナデ調整である。(小野)

### 3. 小結

後期もしくは晩期の遺構としては、D地区で弥生時代前期Ⅰ面の下層より自然河川を検出した。自然河川の幅、深さ等は、最終面時の試掘であった為に不明であるが、河川内の砂層中より後期または晩期と思われる土器片1点を検出することが出来た。またB地区に於ても同時期の土器片を弥生時代中期の自然河川より2点出土している。これらの土器は、摩滅しているので上流から流されてきたものと思われる。晩期の遺構としては、F地区で自然河川を検出することができ、河川内より深鉢、浅鉢の土器が出土している。この土器は、あまり摩滅していないので近くには、この時期の集落が形成されていたものと推測される。この土器よりも時期は下がるが、やはりB地区的弥生時代前期遺構面より所謂「長原式」土器を検出している。

近年、近畿自動車道関係の発掘調査により、縄文時代の中河内の様相が徐々に明らかになりつつある。巨摩廃寺遺跡で縄文時代中期初頭の船元式に比定される深鉢体部片が上層の河川より出土している。若江北遺跡でも上層の河川より後期中葉の深鉢片が出土している。山賀遺跡では、中期～後期にかけて遺物が、晩期では、自然河川と遺物が検出され、自然河川内では、人と鹿の足跡が確認されている。また久宝寺北遺跡では、紋痕のある長原式の土器が弥生時代前期中段階の土器と一緒に出土している。(小野)

## 第2項 弥生時代

### 1. 前期

#### (1) A地区

A地区では前期遺構面が2面検出された。遺構はすべて新段階に属するものである。

#### 弥生時代前期Ⅰ遺構面

本遺構面は2Aトレンチの位置する南側では認められなかった。遺構も前期Ⅱ遺構面に比べて少なく、若干の溝及び土坑と水田遺構のみで、他に足跡面を検出したにすぎない。遺構面はT.P.+2.2m前後の砂質土もしくはシルト上に位置するが、北東側で検出した水田面はT.P.+2.6mとやや高くなり、ベース層も粘質土もしくは粘土に変わる。以下、北側の遺構より順次説明していく。

**水田(付図3)** 1Aトレンチ東側で検出した。ANR201を境として北側に同時期の水田面<sup>(1)</sup>が拡がるものと思われる。現に北接する友井東遺跡でも同時期の水田面が検出されている。耕作面は暗緑褐色粘質土で、多数の足跡が検出された。耕作面直下は砂質土もしくは砂で、この時期の水田としてはかなり水はけがよかったと思われる。したがって今回の調査では検出できなかつたが、当然、通水施設が設けられていたものと想定できる。<sup>(2)</sup>

本水田面では畦畔を1条検出した。唯一の畦畔であるASA201は水田中央部やや西よりで検出し、ほぼ南北方向に弧状を呈している。底面幅0.8m、上面幅0.5m、高さ0.05mの断面台形を

した削り出しの畦畔で、土色は耕作面より若干紫がかかる。また、高さが0.05mと低いことと、すぐ直上に弥生時代前期Ⅱ遺構面の水田があることから、かなり削平されているものと思われる。なお、畦畔が1条しか検出されなかったことから水田がどのような区画をもって構成されているかは不明である。

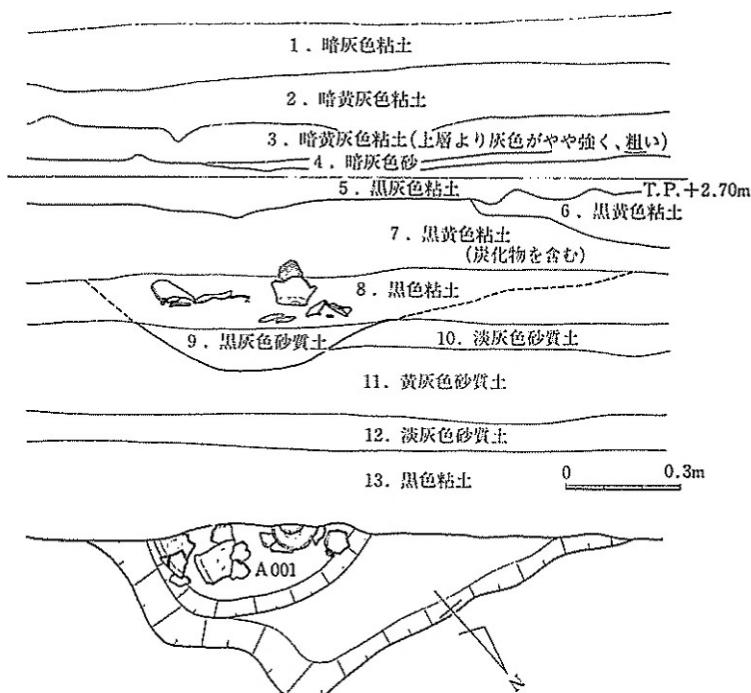
**A NR201 (付図3)** この時期にはすでに小規模の流路として流れていたものと思われるが、前期Ⅱ遺構面の時期に本格的に形成されたものと思われるため、詳細については前期Ⅱ遺構面のところで説明することにする。後述する弥生時代前期集落の北側を画する河川で、集落の北限をなしていたものと思われる。また、この河川は北側水田地帯の用水路的機能を有していたものと想定される。

**A S D201(付図3) A**  
トレンチ中央部で検出した。溝の方向は南東方向から北西方向に走る。幅は約1m、深さ約0.2mを測り比較的浅く、黄褐色砂が堆積する。遺物は、わずかではあるが前期新段階の土器片を含む。なお、同溝は次の前期Ⅱの時期にも継続して使用されていた可能性がある。

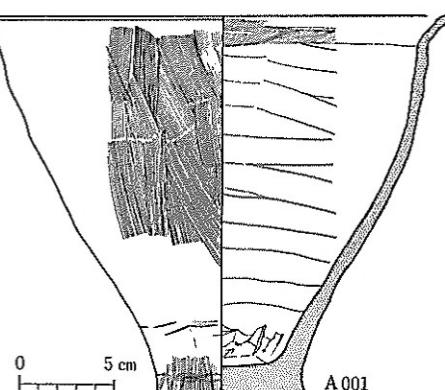
**A S K201 (第14図)**  
Aトレンチ南端で検出した。南側がセクションベルト内であったため平面形や大きさについては不明であるが、2Bトレンチでは検出できなかった。深さは0.25mを測り、2層に分層が可能であるが、上層の黒色粘土は当土坑が掘り込まれている黒色粘土とほとんど見分けがつかない。出土遺物は前期新段階の甕形土器(A001)が1個体分出土している。(岡本)

出土遺物  
〔土器〕(第15図)

第I様式甕1点を抽出する(A001)。如意形口縁



第14図 A S K201遺物出土状態図



第15図 A S K201出土土器

をもつ倒鐘形のものである。(井藤)

### 弥生時代前期Ⅱ遺構面

前期Ⅰ遺構面とほとんど時期差は認められない。遺構は全域にみられるが、ANR201を境にして北側に水田、それより南側に溝、土坑、小穴、ピット等が多数検出された。そのことからB地区とも考え合せてANR201が当時の集落の北の境界線的機能を有していたものと思われる。また、ベースを成す層はA地区の層序(第Ⅳ章、第2項)で述べたが、もう少し詳しく説明するならば2Aトレンチ東側水田面は紫褐色粘質土、Aトレンチ中央部は砂混りの黒灰色粘質土である。しかし、この黒灰色粘質土直下約0.1mのところのみに弥生時代前期Ⅰ遺構面が検出されることと、Ⅰ・Ⅱ両遺構面がほとんど時期差がないことからこの黒灰色砂混り粘質土は当時の整地土的性格の土層であった可能性がある。事実、前期Ⅰ遺構面では、水田面と集落部分とでは、著しく高低差が認められ、しかも水田面の方がレベルで約0.4mも高かった。これは通水等の問題をおこす原因になり、そのようなことから考え合せて盛土・整地が行なわれた可能性が強い。したがって前期Ⅱ遺構面の時期では前期Ⅰ遺構面の時期のような高低差はほとんどみられなくなり、平均にしてT.P.+2.4~2.6m前後のところで遺構が検出される。さらに、南側の2Aトレンチでもベースを成す層は異なり、中央部より東側では緑灰色シルトもしくは砂質土、中央部や西側では緑灰色粘土、西側ではよく引き締まった緑灰色粗砂である。このように当遺構面は異なる地点において、ベース層もそれぞれ異なり、沖積平野における土層堆積状況の複雑な様相の一端がうかがえる。

次に包含層の状態をいま少し概観してみるとしよう。当地区の弥生前期包含層はA地区第Ⅲ層がそれに相当する。この層は厳密には幾層にも分層が可能であり、遺物を包含する量もそれぞれの層によって異なる。また、本層は概して粘質であるが、一部は砂質土、シルト、粘土と異なる部分がある。特に南側では粘土質の包含層となる。この包含層は南に行くほど厚くなり、それに反し、北に行くほど薄くなる。そしてANR201を境にして北側では全く認められなくなる。遺物を包含する量もそれに比例することから明らかに遺構の密集度と関係しているものであろう。

以下、主要遺構ごとに概観する。

#### A 溝

Aトレンチより南側で最も多く検出された遺構の一つである。深さは削平されているためかもしれないが比較的浅いものが多く、溝の方向も大きく2方向に分けられる。すなわち、南東方向から北西方向に延びるものとほぼ南北方向に延びるものである。これらはさらに重複関係により3時期に大別できる。

**ASD201**(付図4) 前期Ⅰ遺構面の時期にすでに掘られていた溝である(前期Ⅰ遺構面参照)。

**ASD202**(付図4) Aトレンチ中央部で検出した。南東方向から北西方向に弧状を呈して流れれる溝である。Aトレンチ中央部や西側でASD204と接続し、さらに4条の溝に分かれるこ

とからこの地点が溝の分岐点と考えられる。幅は2.5m前後、深さは溝幅に比べて非常に浅く、最も深いところでも0.3mしかない。堆積土も黄褐色粗砂のみで分層は不可能である。前期新段階の土器片が出土する。

**A S D 203** (付図4) Aトレンチ南東で検出した。東西方向に走る溝でA S D 204に対して直角に接続する。溝幅の最もあるところで1.8mを測り、深さは0.1mと浅く、黄褐色砂混りの黒色粘土が堆積する。遺物は出土しなかった。

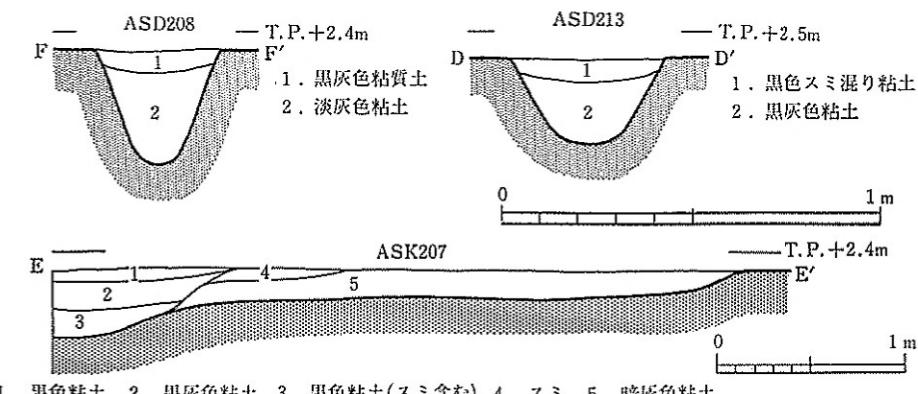
**A S D 204** (付図4) 2 Aトレンチ中央部からAトレンチ南側のほぼ中央部で検出した彎曲しながら南北方向に延びる溝である。その北端はA S D 202と接続する。溝幅は上幅で約2m、下幅で約1.5mを測り、断面はU字形を呈する。深さは0.2mと浅く、南側では黄褐色砂が堆積し、北側では黒紫色粘土が堆積する。遺物は前期新段階の土器片が若干出土する。

**A S D 205** (付図4) Aトレンチ南西部で検出した。南東方向から北西方向に延びるが、南東側は袋状に終る。埋土は暗黄灰色砂で、遺物は含まない。上幅0.35m、下幅0.2m、深さ0.15mを測り、Aトレンチ南端で消滅するが、A S D 207と接続する可能性がある。

**A S D 206** (付図4) 2 Aトレンチ南西側で検出した。溝の形状は一定しないが南東方向から北西方向に延び、端部はA S D 207によって切られている。埋土は、スミ状の炭化物を多く含む黒黄色砂混り黒灰色粘土で、わずかではあるが前期土器片が出土する。

**A S D 207** (付図4) 2 Aトレンチ中央部やや東側で検出した。A S D 206及びA S D 209を切って南東方向から北西方向に延びる溝で、もとはA S D 205と同一の溝でつながっていた可能性がある。南東部は袋状に終り、北側へ枝別れする。上幅0.7m、下幅0.5m、深さ0.2mを測り、植物性の腐植土を多く含んだ黒灰色粘土が堆積する。弥生時代前期の土器片が少量出土した。

**A S D 208** (第16図) 2 Aトレンチ中央部で検出した。南東方向から北西方向に延び、南東側はA S D 206に切られ、北東側はA S D 211・213と接続しているものと思われる。上幅0.35m、下幅0.07m、深さ0.3m、断面V字形を呈する。埋土は黒灰色粘質土と淡黒色粘土の2層に大別でき、遺物は出土しない。



第16図 A S D 208・213、A S K 207土層断面図（実測地点は付図4参照）

**A S D209** (付図4) 2 Aトレンチ中央部やや西側で検出した。南北方向に延びるが、一部をA S D207・208によって切られている。上幅0.6m、下幅0.3m、深さ0.2mを測るが、概して幅は南側が広く、北側が狭い。埋土は黒灰色粘土のみで遺物は出土しない。

**A S D210** (付図4) 2 Aトレンチ中央部南よりで検出した。南北方向に延びる溝で北端部は袋状に終る。幅0.35m、深さ0.1mの浅い溝で黒灰色粘土が堆積する。遺物は出土しない。

**A S D211** (付図4) 2 Aトレンチ中央部やや西側で検出した。南北方向に延び、北側で若干東側にカーブしてA S D208に接続する。上幅0.9m、下幅0.6m、深さ0.2mの断面逆台形を呈した溝で暗灰色粘土が堆積する。遺物は出土しない。

**A S D212** (付図4) 2 Aトレンチ西側で検出した。南北方向に延びる溝であるが、一度L字形に屈曲する。幅は一律ではないが、広いところで1.2m、狭いところで0.5m、深さ0.2mを測る。埋土はスミ混りの暗灰色粘土で、弥生時代前期土器片が少量ではあるが出土した。

**A S D213** (第16図) 2 Aトレンチ西側で検出した。南北方向に蛇行して延び、北端はA S D208に接続する。上層0.4m、下幅0.15m、深さ0.23mを測り、断面V字形を呈する。埋土は、上・下2層に分層でき、上層に0.06mの厚さで黒色スミ混り粘土、下層に0.17mの厚さで黒灰色粘土が堆積する。遺物は出土しない。(岡本)

## B 土坑

溝同様A地区中央部より南側でしか検出できなかった。しかも土坑というよりも落込み状の遺構もあるが、ここでは土坑として一括に説明することにする。

**A S K202** (付図4) Aトレンチ中央部西側で検出した。土坑というよりも浅い落込み状の遺構で、長軸幅4.5m、短軸幅2.4m、深さ0.1mを測り、黄褐色砂が堆積する。遺物は出土しない。

**A S K203** (付図4) Aトレンチ南東側で検出した。長軸幅2.2m、短軸幅1.1m、深さ0.25mを測り、2層に分層できる。上層は約0.1mの厚さで黒灰色粘土、下層は約0.15mの厚さで黒色粘土が堆積する。遺物は全く出土しなかった。

**A S K204** (付図4) 2 Aトレンチ北側で検出したが、北端は調査の対象外であるため形態は不明である。深さは0.3mを測り、黒色粘土が堆積する。遺物は出土しない。

**A S K205** (付図4) 2 Aトレンチ中央部やや南側で検出した。長径1.2m、短径0.9m、深さ0.25mの梢円形を呈する。埋土は暗灰色粘土（一部に暗黄色粘質土が混じる）で、遺物は出土しない。

**A S K206** (付図4) 2 Aトレンチ北西側で検出した。土坑というよりも落込み状の遺構でA S D208及び小溝によってA S K 207と接続する。深さは0.2m前後と浅く暗灰色粘土が堆積し、遺物は弥生時代前期の土器片が出土した。集水施設的な性格が考えられるが、不明である。

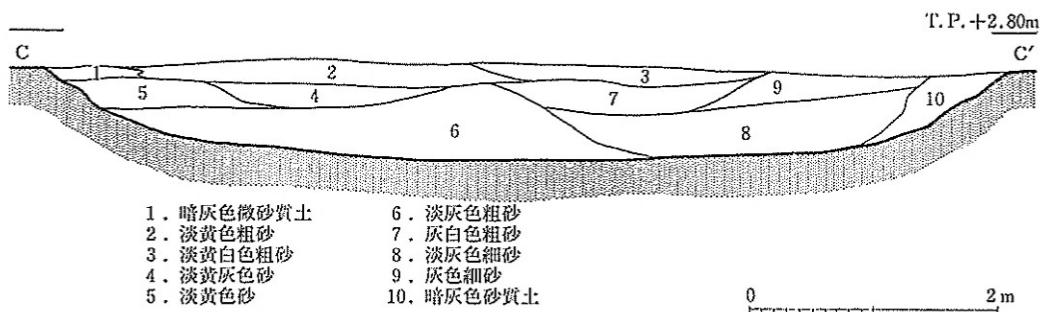
**A S K207** (第16図) 2 Aトレンチ南西側で検出したが、西側半分は調査対象外である。深さは南側が深く、0.35mを測り、5層に分層できた。埋土の状態より2時期の掘削が考えられる。最初は0.2m前後の浅いもので、一度埋った後南側に再度掘り直された可能性がある。遺物は弥

生時代前期の遺物が各層から出土するが、第3層の黒色粘土からの出土が最も多く、いわゆる直線刃半月形態の石庖丁等も出土している。なお、充分検討は行なっていないが、出土遺物からの時期差は認められない。(岡本)

### C その他の遺構

溝、土坑以外に自然河川と水田遺構がある。

**ANR201** (第17図) 1 Aトレンチ西側からAトレンチ北側にかけて検出し、さらに2 Aトレンチ北東側でその一部を検出した。南東から北西方向に凹弧を描きながら流れる。上幅7~8m、下幅4~5m、深さ0.8mを測り、断面観察を行なった地点で10層に分層でき、全層が砂もしくは砂質土であった。本河川の北側では水田遺構以外の遺構は検出されず、それに反して南側では集落に関係する遺構が多数検出された。そのことから本河川が水田と集落を区画する働きを成し、それとともに集落廃絶の第1の要因とも考えられる。しかも、集落廃絶後もある程度の期間存続して流れていた可能性があり、河川の肩部は当地区弥生時代前期遺構面より0.1m高い所より掘り込まれている。遺物は弥生時代前期の土器片と流木がかなり出土した。



第17図 ANR201土層断面図 (実測地点は付図4参照)

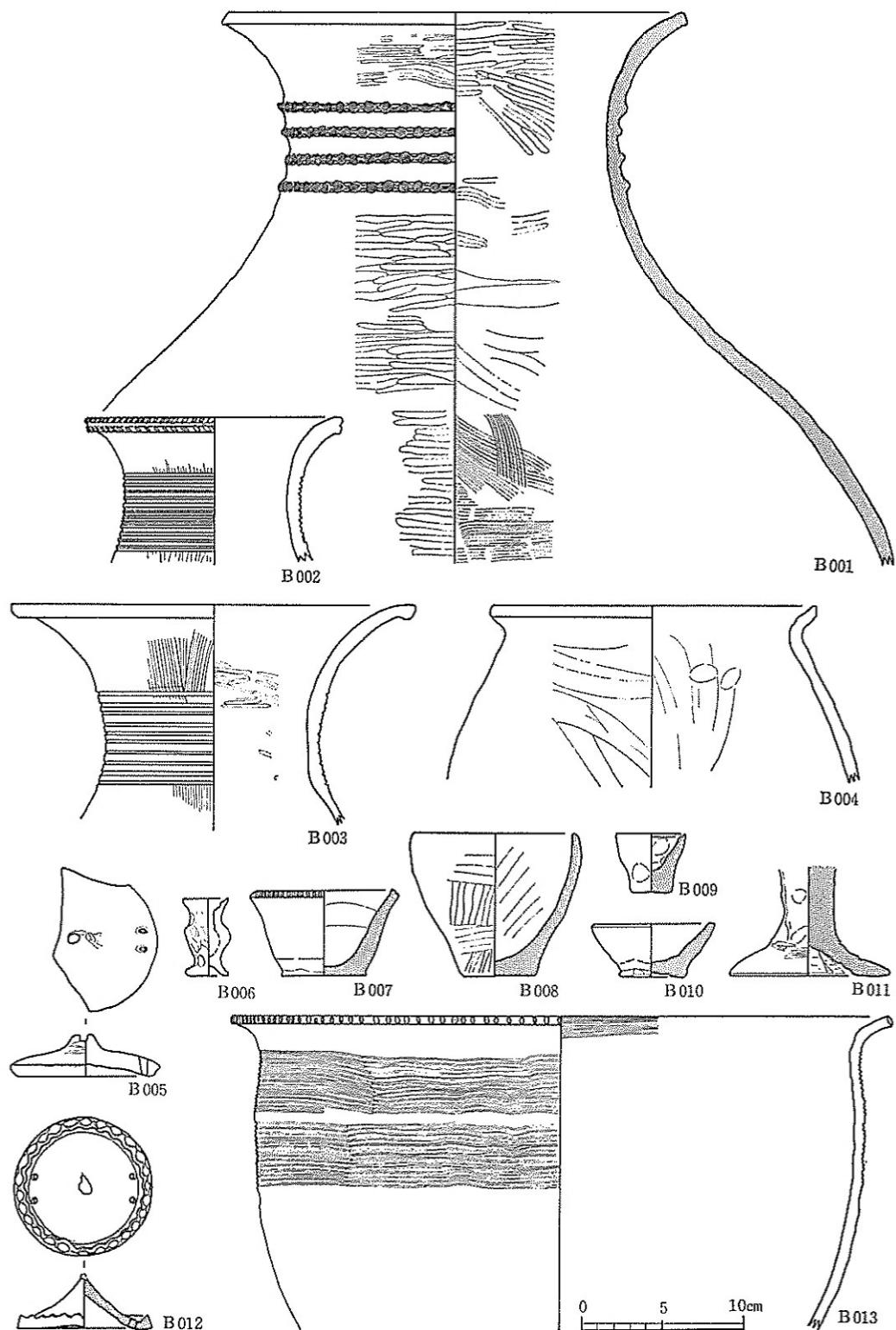
**水田** (付図4) 2 Aトレンチ東側で検出した。弥生時代前期I遺構面で検出した水田面の直上ではほぼ同一場所にあり、同様に北側に広がっているものと思われる。耕作面は紫褐色粘質土で多数の足跡が検出されたが畦畔は認められなかった。耕作面直下は前期I遺構面水田耕作土の暗緑褐色粘質土で、水持ちは前期I水田よりかなりよかつたものと思われる。(岡本)

註(1) 龜島重則編『友井東』(その1) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。

(2) 友井東遺跡で検出した同時期の南北溝などはその可能性がある。〔大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター「友井東」(その2) P16~P17、1983年。〕

### (2) B地区

ここで説明する弥生時代前期遺構面とは厳密には、縄文時代晩期の長原式土器や櫛描き直線文を施した中期初頭の土器が出土する遺構も含まれている。なぜならば当遺構面では前期土器が最も多く出土し、かつ多くの前期土器に混じって少量の縄文時代晩期や弥生時代中期の土器が出土することから、ここではあえて弥生時代前期に入れることにした。しかも、これら検出された遺構は一部を除いて同一平面で検出された遺構で層位的発掘は不可能であったためである。しか



第18図 B地区弥生時代前期包含層出土土器

し、正確には弥生時代前期から中期初頭の遺構面であることを了承しておいて頂きたい。

### 包含層

B 地区のこの時期の遺物包含層は全城に認められ、第Ⅷ章・第1節・第2項・(2)で説明した第Ⅸ層、第Ⅹa層がそれに当る。遺物は中央部が最も多く出土し、かつ包含層の厚さも0.4m前後となり、最も厚くなる。北側と南側にも包含層は認められるが、中央部よりも薄く、遺物の量も少なくなる。これは後述、B 地区弥生時代中期の項で説明するが、下層の遺構の状態からすると、もとは全城に中央部と同じぐらいの厚さで包含層が堆積していたものと思われる節があり、弥生時代中期初頭の畦畔状遺構や島状遺構を造成するにあたって、これらの包含層を削り取り、盛り上げたために包含層が薄くなったものと考えられる。

これら包含層からは土器、石器、木器が大量に出土したが、その中でも土器が最も多く出土した。以下、現在遺物は整理中であるが、その内の一部を紹介する。(岡本)

#### 出土遺物

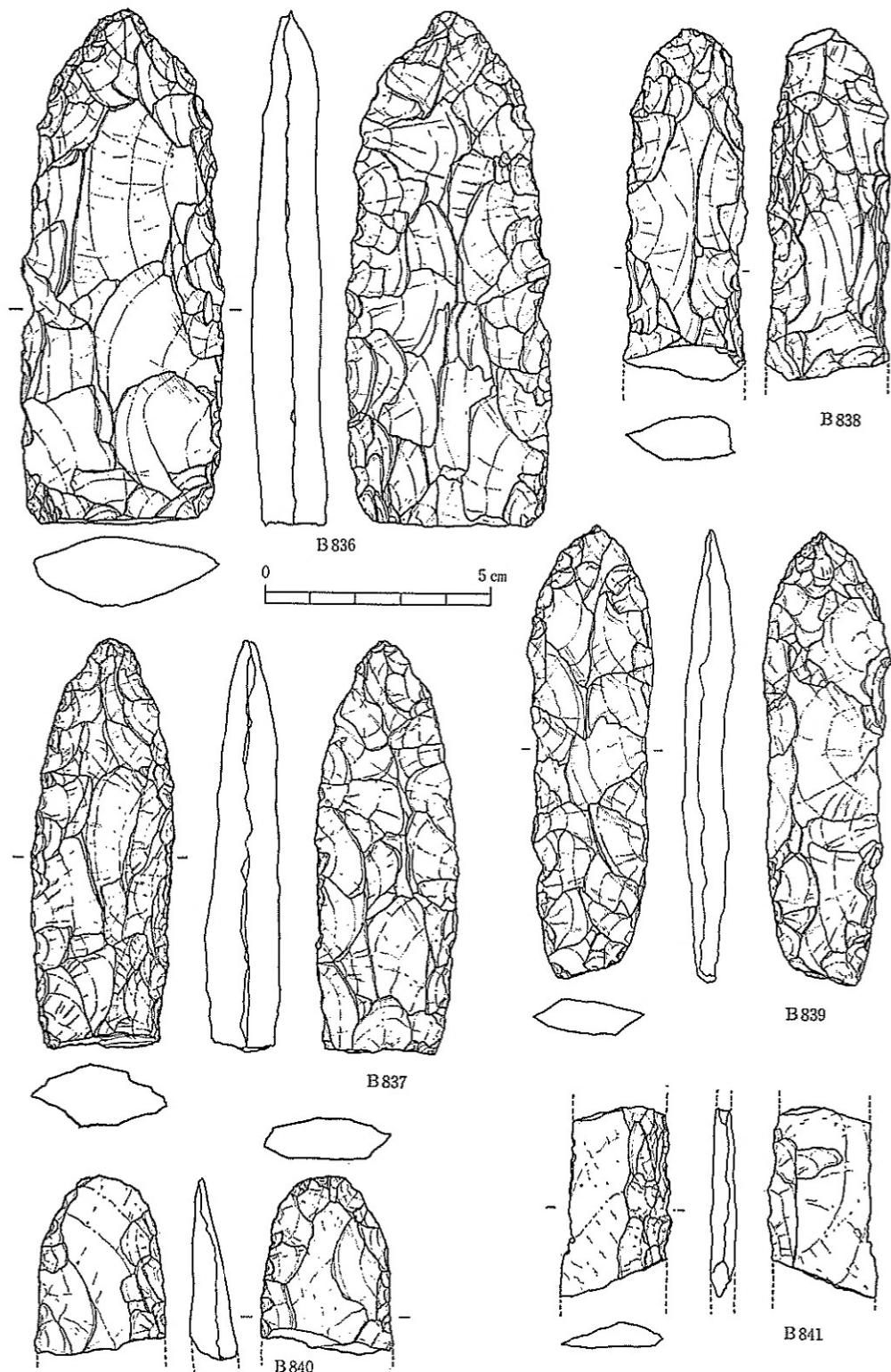
##### 〔土器〕(第18図)

包含層出土品は多数あるが、大半は第Ⅰ様式に属する土器である。第Ⅱ様式土器の代表としてB 013の甕1点のみを抽出する。この甕は、口縁部に篦描きの刻目、頸部には各櫛歯が太く、板で押し描いたような特徴的な幅広の櫛描直線文を2条、付している。第Ⅱ様式でも前半のものである。(井藤)

##### 〔石器〕(第19~25図)

包含層出土石器には石槍、石鎌などの武器類、大型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、石錐、石匙、不定形刃器、石槌、敲石、砥石などの工具類、石庖丁、大型石庖丁などの収穫具類などがあり、他に使用痕のある用途不明の石製品、製作中に生じたと考えられるサヌカイトの石核や剝片などがかなりの量ある。なお、石鎌の分類や製作技法については佐原真氏の用法を参考にしている。<sup>(1)</sup>

石槍 (B 836~B 841・B 850~B 852・B 1117~B 1119) 中期のような大型のものはない。B 836・B 837・B 839がほぼ完形に近いもので、他はすべて破片である。B 836は長さ11.6cm、幅は他のものより広く4.2cm、厚さ1.5cmを測り、A面には大剝離面が認められ、フリー・フレイキングとステップ・フレイキングによる調整が施されている。側縁には刃済痕がある。B 837は長さ9.2cm、幅3.2cm、厚さ1.4cmを測り、フリー・フレンキングとステップ・フレイキングを併用して整形を加え、側縁には刃済痕が認められる。B 839は長さ20.1cm、幅2.5cm、厚さ0.8cmを測るが、幅は基部側より先端側の方で広くなる。他と同様フリー・フレイキングとステップ・フレイキングを施す。B 838は基部を欠き、しかも細かい調整が施されていないことから未製品と考えられる。B 850も未製品で、長さが短いことから大型石鎌の可能性もある。B 840・851・852は先端部のみで他の部分を欠くが、B 840は先端部が丸いことから基部の可能性も考えられる。B 841・1117は両端部を欠くが、B 841は両面に大剝離面が認められ、さらに原石から横剥ぎをするときに加えられた打撃のバルブが残る。B 1117は比較的丁寧なフリー・フレイキングが施されている。



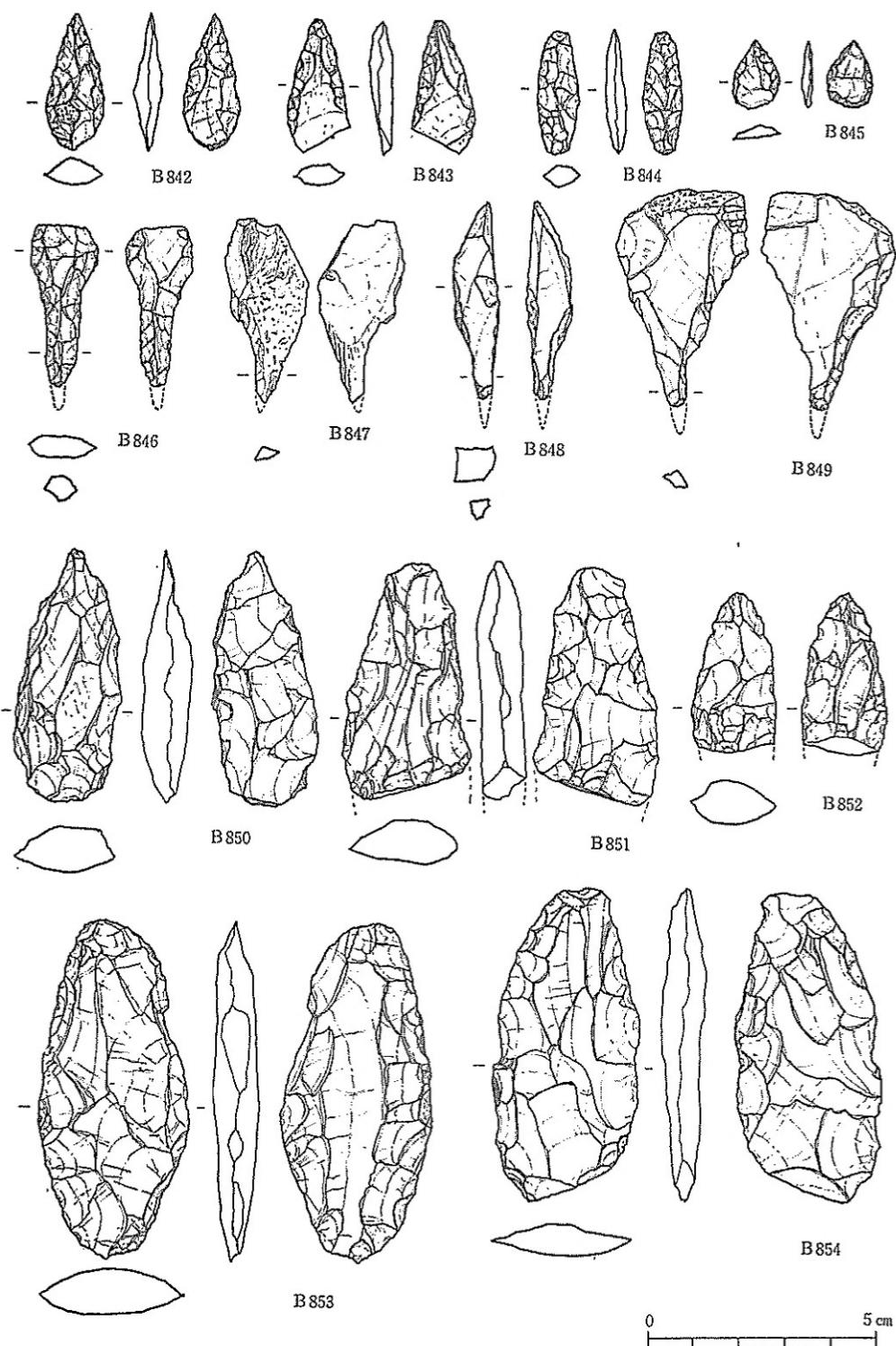
第19図 B地区弥生時代前期包含層出土石器 (1)

B1118は両面に磨製石剣のような研磨面が認められるため、磨製石剣を再加工、もしくは磨製石剣製作途中で打製に変えた可能性がある。なお、石槍の材質はすべてサヌカイトである。

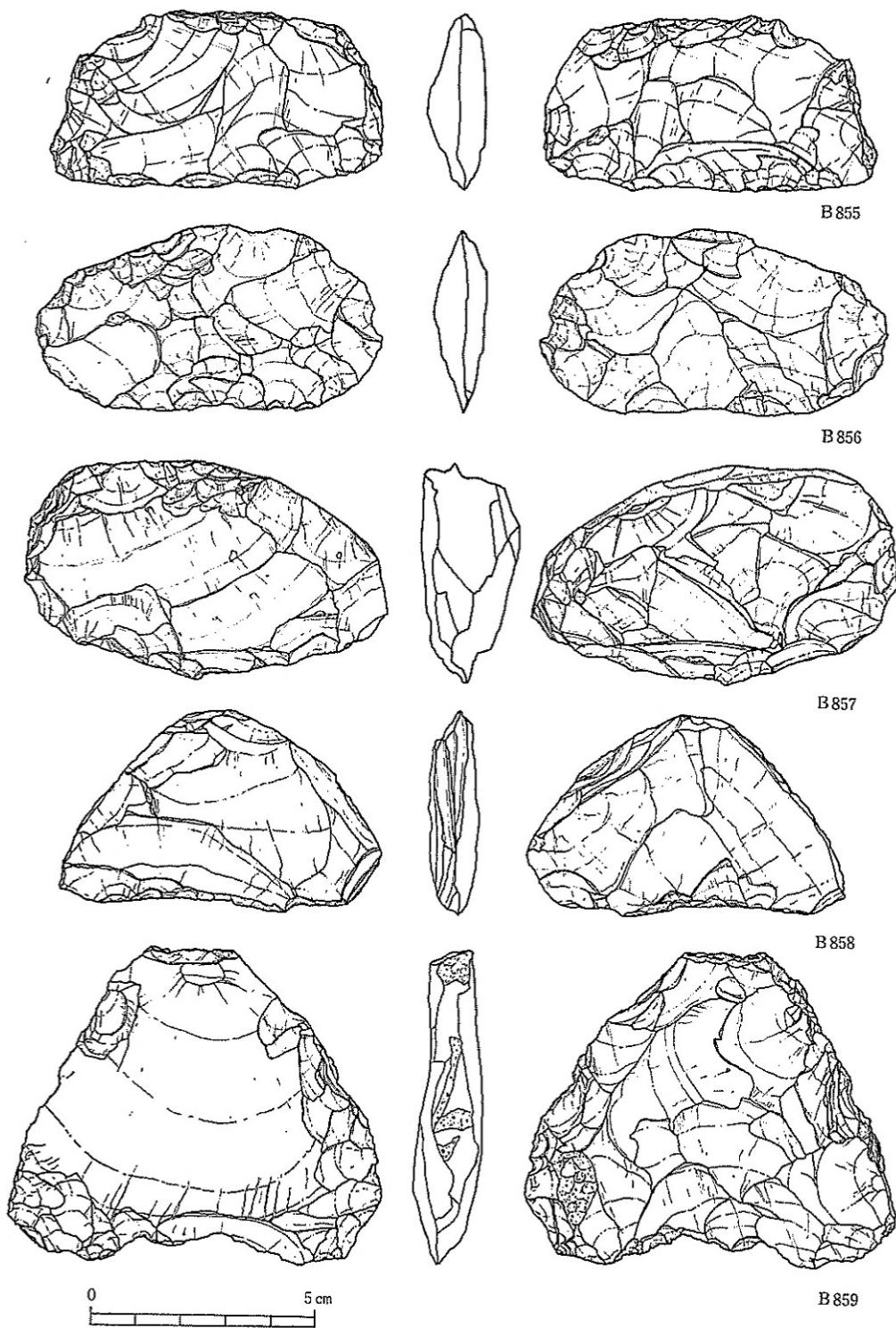
**石鎌（B842～B845・B1123）** 包含層出土石鎌は大部分が円基無茎式に属するものであるが、B844は凸基有茎式に属するものである。しかし、これもどちらかというと棒状に近い形態を示す。また大きさも小型のものばかりであり、B845はそのなかでも特に小さい。材質はすべてサヌカイトである。B842は完形で長さ3.0cm、幅1.2cm、厚さ0.6cmを測る。A面の一部には自然面が残り、B面には剝離面が認められ、しかも全体的に雑な作りである。B843は茎部を欠く。現長3.1cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを測り、両面に大剝離面があり、側縁にはトリミングを施すが、あまり丁寧でない。B844は長さ2.8cm、幅0.8cm、厚さ0.5cmを測り、トリミングを施す。なお、形態より石錐の可能性もあるが、断面の形より石鎌としたものである。B845は長さ1.5cm、幅1.1cm、厚さ0.2cmを測り、両面に大剝離面が残り、側面にトリミングを施す。B1123は長さ2.9cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmを測り、断面菱形を呈し、フリー・フレイキングとステップ・フレイキングによって仕上げられている。

**石錐（B846～B849）** 錐部と頭部（つまみ）とがはっきり区別できるものが大半である。B846は頭部より錐部が棒状に突出するものであるが、錐端部を欠く。現長3.5cm、頭部幅1.4cm、錐部幅0.4cm、錐部厚さ0.5cmを測り、錐部断面は菱形に近い。錐部はトリミングを施し加工するが、頭部B面には大剝離面が認められる。B847は不定形の頭部にわずかに屈曲した錐部がつくるものである。A面は自然面そのままであり、B面もバルブを伴った大剝離面で、調整加工はほとんど認められない。錐端部を欠くが、現長4.1cm、錐部幅0.5cm、錐部厚さ0.3cmを測り、錐部断面は三角形を呈する。B848は縦長で頭部と錐部の区別はしにくいが一応認められる。全面大剝離面のままであるが、一部にトリミングが施されている。錐端部を欠くが、現長4.5cm、錐部幅及び厚さは共に0.4cmで錐部断面は四角形を呈する。B849は頭部から錐部にかけて徐々に尖るもので、錐端部を欠く。錐部はある程度の調整加工が施されるが、大部分が大剝離面を残し、頭端部は自然面のままである。現長4.8cm、錐部幅0.6cm、錐部厚さ0.4cmを測り、断面菱形を呈する。材質はすべてサヌカイトである。

**不定形刃器（B853～B859・B1122）** 包含層出土石器の中で最も多く出土した石器で、B858が粘板岩以外はすべてサヌカイト製である。B853は長さ7.5cm、幅3.2cm、厚さ1.0cmを測り、断面はレンズ状を呈する。実測図の外側が刃部となる。両面に大剝離面が残り、ステップ・フレイキングとトリミングを加えて刃部を作る。刃部には使用痕が認められる。B854は長さ6.6cm、幅3.1cm、厚さ0.7cmを測り、両側縁が刃部となり刃溝痕が認められる。フリー・フレイキングとステップ・フレイキングが施されており、その形態から石槍の未製品であった可能性がある。B855は台形の形態をしたもので底辺部が刃部となる。刃部はステップ・フレイキングによって作られている。長さ7.2cm、幅4.0cm、厚さ1.2cmを測る。B856は梢円形を呈し、周縁全体が刃部であったと考えられる。両面にバルブをもった大剝離面を残し、刃部はステップ・フレイキングによっ



第20図 B地区弥生時代前期包含層出土石器 (2)



第21図 B地区弥生時代前期包含層出土石器 (3)

て調整する。長さ7.7cm、幅4.0cm、厚さ1.2cmを測る。B857も梢円形を呈し、大剣離面にはバルブが認められる。刃部は一方向のみでステップ・フレイキングによって加工されている。長さ8.2cm、幅4.9cm、厚さ2.2cmを測る。B858は三角形を呈し、その底辺が刃部となるが、刃潰れが著しい。長さ7.2cm、幅4.2cm、厚さ1.1cmを測る。B859は他のものよりやや大きく三角形を呈し、その内2辺が刃部であったと考えられる。刃部はトリミングによるが刃潰れが著しい。両面にバルブが認められる大剣離面が残り、さらに自然面のままのところもある。長さ8.2cm、幅6.5cm、厚さ1.5cmを測る。B1122は小型で石鎌の未製品の可能性も考えられる。両側縁が刃部となる。長さ4.5cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmを測る。

石庖丁 (B860～B862・B864～B871) 完形品はない。B860～B862・B864・B867～B871は直線刃半月形態<sup>(2)</sup>で最も多く出土した形態である。B860は現長7.3cm、幅4.1cm、厚さ0.6cmを測り、全体によく研磨されている。両刃である。刃潰れ及び背部と端部の一部に2次的な敲打痕、さらにB面の紐孔には紐擦れによる磨滅痕が認められる。B861は直線刃半月形態であるが、梢円形に近い。現長8.0cm、幅3.9cm、厚さ0.9cmを測り、全体に2次的な敲打痕が認められる。刃部は両刃であるが刃潰れが著しい。B862は直線刃半月形態の範疇にはいるものであるが、どちらかというと台形に近い。現長7.7cm、幅4.3cm、厚さ0.8cmを測り、全体に研磨痕が顕著である。刃部は両刃であるがあまり鋭くなく、刃潰れも著しい。全体に2次的な敲打痕が認められる。石材は黒色安山岩である。B864は全体の1/3を欠く。現長11.2cm、幅4.2cm、厚さ0.7cmを測り、紐孔はやや左に位置する。両刃氣味であるが、刃部稜線はA面でしか観察されない。刃潰れ及び2次的な敲打痕が全体に認められる。石材は結晶片岩である。B867は背部のみの破片で非常に薄いが、その形態より直線刃半月形態と考えられる。紐孔は他のものがすべて両面よりあけられているのに対して一方向のみからしかあけられていない。石材は粘板岩もしくは泥質岩と考えられる。B868は中央部のみの破片で両端部を欠くが直線刃半月形態と考えられる。刃部は両刃であるが、A面のみがよく研磨された稜が明瞭に残る。背部には2次的な敲打痕が認められる。石材は流紋岩である。B869は比較的大形のものの破片と思われ、残存部には紐孔は認められない。現長6.5cm、幅5.3cm、厚さ0.6cmを測り、全体に研磨された跡が著しい。2次的な敲打痕が多く認められるが、一部にはその部分を再研磨した痕跡があり、また刃部も同様に何度も研磨されていることから、長期間使用されたものと考えられる。B870は全体の1/3及び端部を欠く。現長6.3cm、幅4.8cm、厚さ0.7cmを測り、刃部は両刃で鋭いが、刃潰れが認められる。B871は全体の1/3弱を欠くが大形品である。現長9.1cm、幅5.5cm、厚さ1.3cmを測る。紐孔周縁には紐擦れの跡が観察される。刃部は片刃で、端部より刃潰れが認められる。A面の紐孔下位及び背部と端部には2次的な敲打痕が残り、全体に火を受けた痕跡がある。材質は砂岩もしくはアブライトと考えられる。

B865・B866は長方形態をした石庖丁である。B865は現長5.5cm、幅4.2cm、厚さ0.6cmを測り、刃部はゆるやかに外彎する。刃部は両刃で、刃潰れがわずかに認められる。A面及び端部には2次的な敲打痕がある。材質は粘板岩である。B866は現長4.8cm、幅4.6cm、厚さ0.8cmを測

り、刃部及び背部はともに外縁する。刃部は両刃で比較的鋭い。端部には2次的な敲打痕と刃部にはわずかな刃潰れが認められる。材質は粘板岩である。

**大型石庖丁（B863・B1120）** ともに全体の約1/3を欠いた破片である。B863は外縁刃半月形態をしたもので、現長9.3cm、幅6.6cm、厚さ0.7cmを測る。刃部は両刃で刃潰れが認められる。材質は結晶片岩である。B1120は直線刃半月形態を示すが刃部は若干内縁するもので、現長10.2cm、幅7.3cm、厚さ0.6cmを測る。紐孔はやや斜めにずれた形で上下に付く。A面下方紐孔に接して未通の穿孔痕が認められる。刃部は両刃で磨滅が著しい。材質は結晶片岩である。

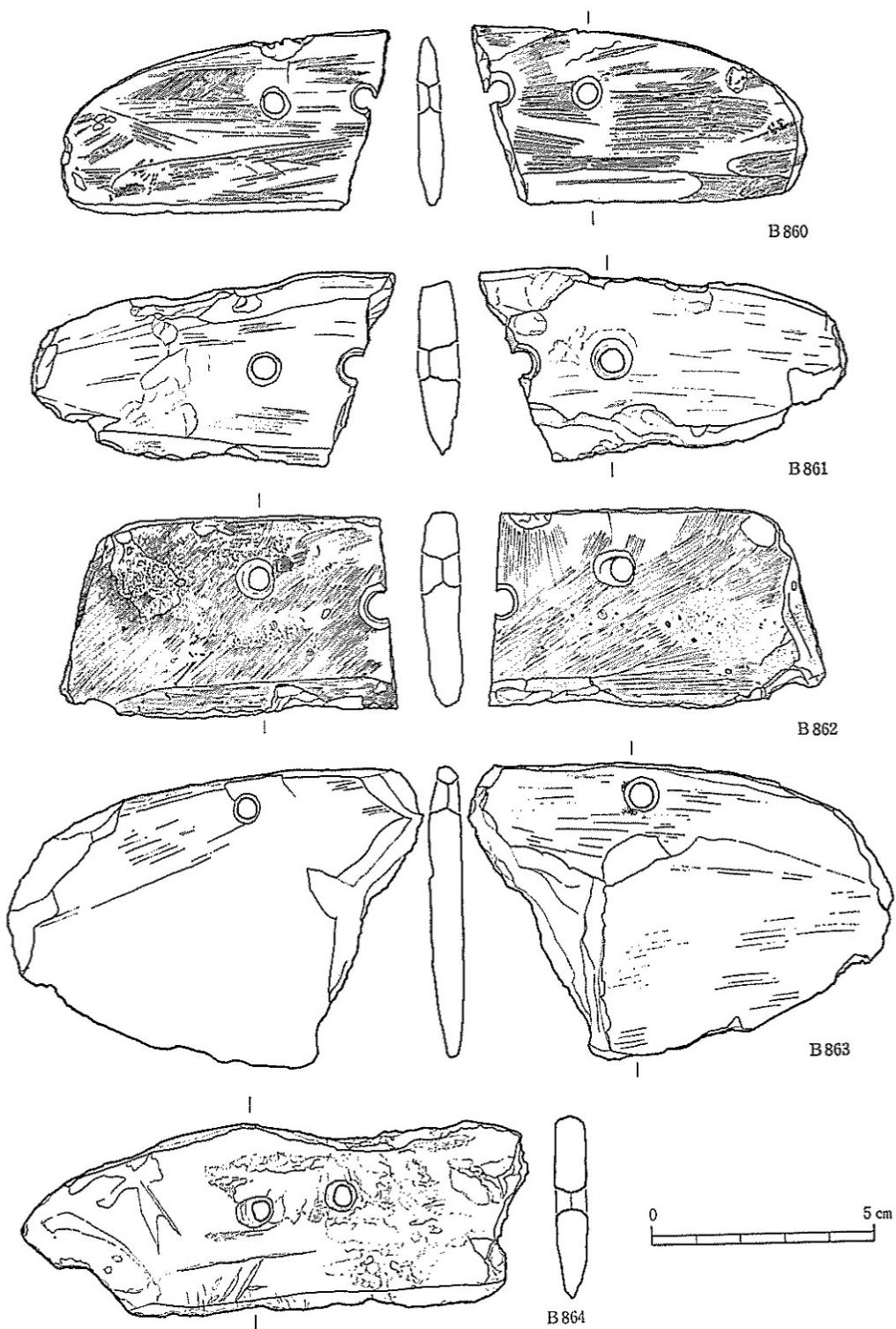
**大型蛤刃石斧（B874～B876）** B874は基部のみで刃部を欠く。現長10.4cm、幅7.0cm、厚さ4.5cmを測り、断面は楕円形を呈する。全体には敲打痕が認められるが、これは2次的と考えるよりも1次的と考えた方が妥当と思われる。材質はグレーワック（硬質砂岩）である。B875はほぼ完形である。現長8.7cm、幅5.5cm、厚さ3.8cmを測り、断面楕円形をした比較的小型のものである。刃部はあまり鋭くなく、しかも基部との境も明確ではない。刃部には刃潰れが認められる。体部の敲打痕は1次的なものと思われる。材質はグレーワックである。B876は基部のみで刃部を欠く。現長6.5cm、幅4.3cm、厚さ3.7cmを測り、断面楕円形を呈する。1次的敲打痕が認められる。材質は他のものと同じくグレーワックである。

**扁平片刃石斧（B878）** ほぼ完形品である。平面形は長方形を呈するが、基部は若干丸味をおびる。刃部も基部側よりもわずかであるが幅広くなる。長さ11.6cm、幅5.2cm、厚さ1.6cmを測り、断面は両刃がわずかにカーブを呈した長方形であり、非常に丁寧に研がれて製作されている。A面中央部には柄に着装したときに紐かなにかを結んだ痕跡が認められる。またB面中央部には、使用時に柄からはずれた折に起きたと考えられる破損部分（キズ）が観察される。さらに基部には2次的な敲打痕と刃部には刃潰れが認められる。材質は斜長流紋岩である。

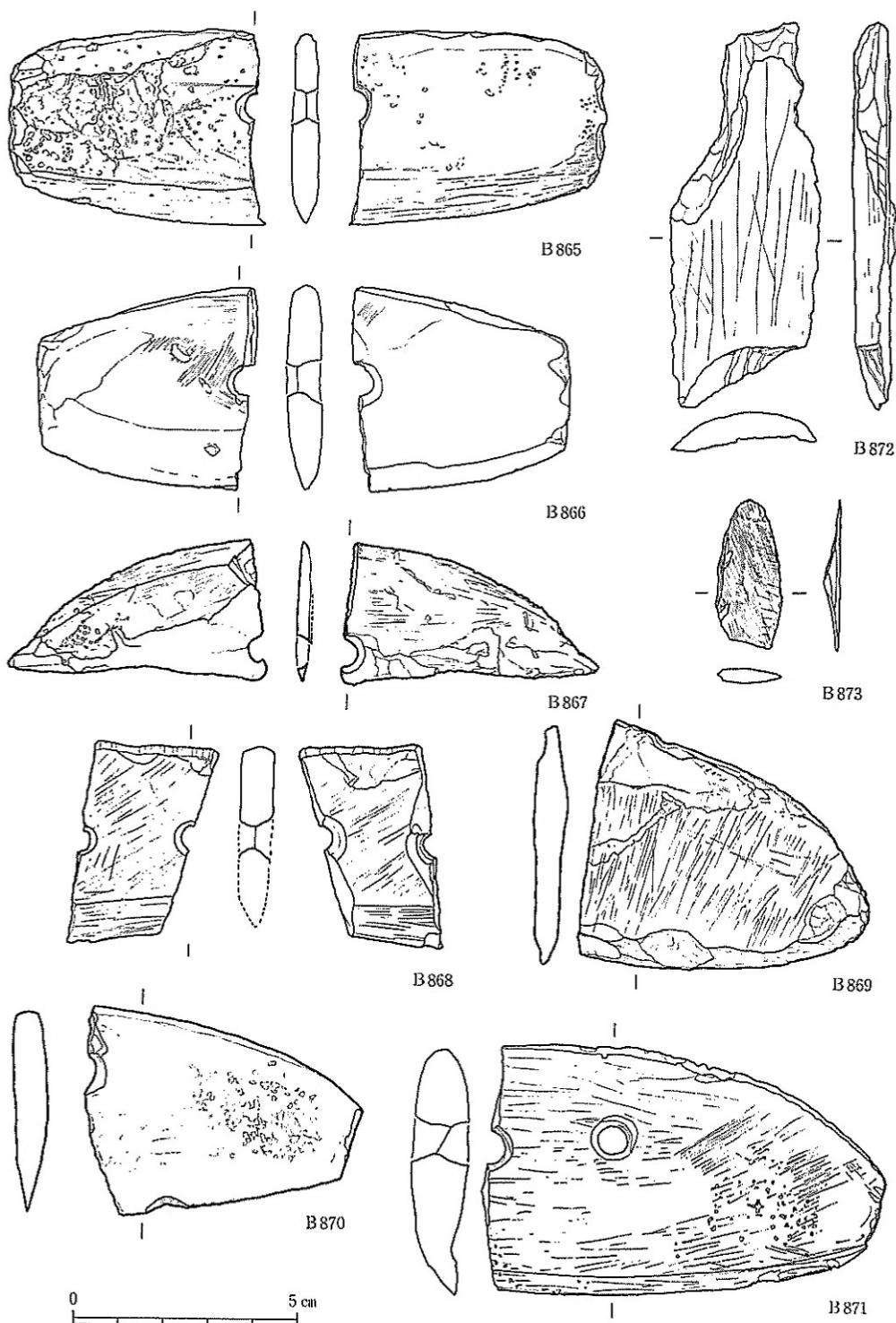
**砥石（B879）** 小型の砥石で一方の端部を欠く。現長6.0cm、幅3.6cm、厚さ1.0cmを測り、材質は砂岩である。使用面は両平面のみで側面は使用されていない。両平面には強い擦痕が残り、両面とも凹面を呈する。A面上側には2次的敲打痕が、B面全体には火を受けたと考えられる煤状のものが付着する。

**敲石（B877）** 楕円形を呈するものと考えられるが、約1/3を欠く。周縁の一端及び平面の一方にそれぞれ敲打痕を残す。現長3.9cm、幅4.1cm、厚さ2.6cmを測る。

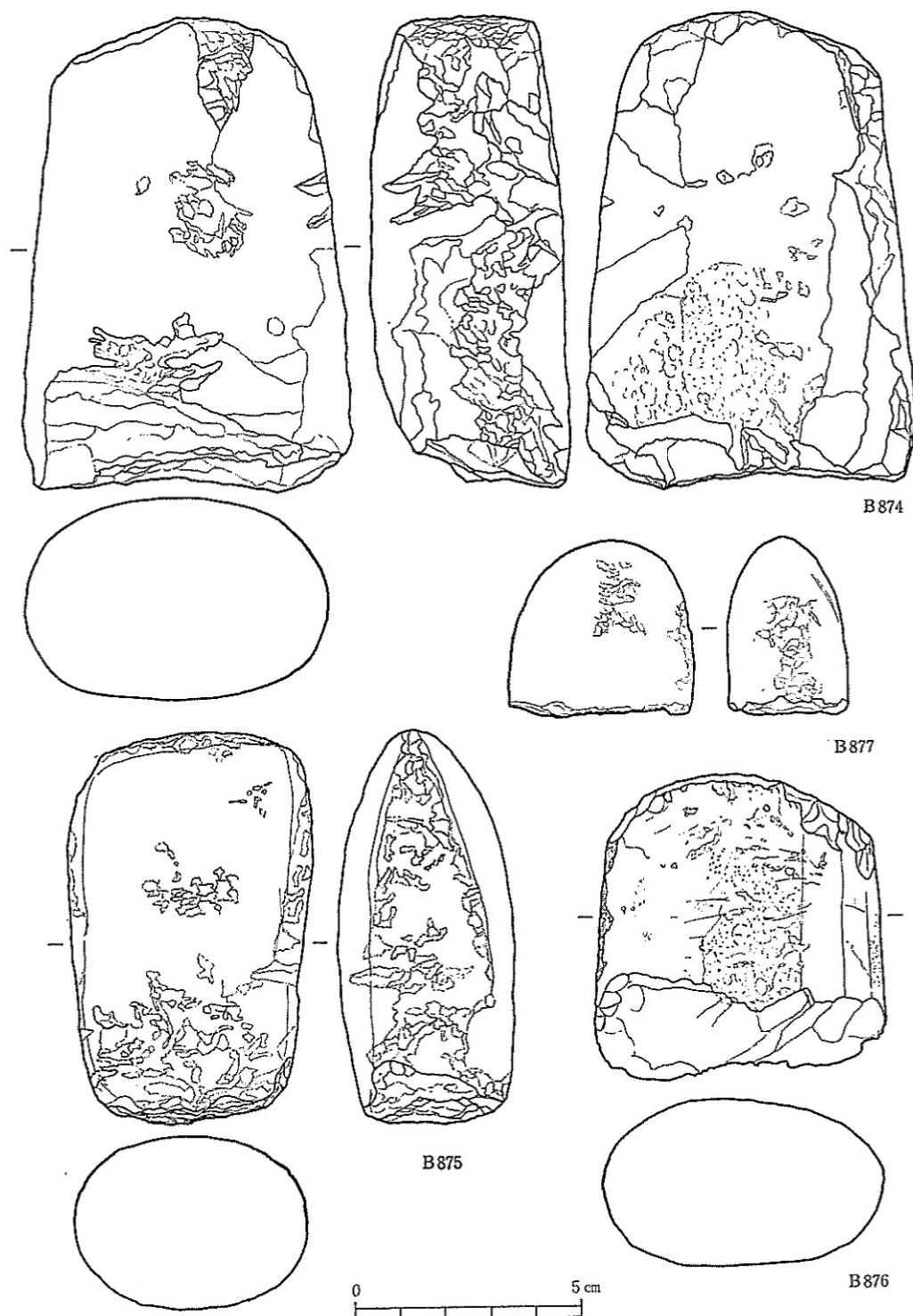
**その他の石器（B872・B873・B880）** B872は石棒状のものが剥離したものと考えられる。表面は丸味をもって研磨されており、用途は不明である。石材は結晶片岩である。B873は磨製石剣の表面の一部が剥離した部分と思われるが、細片のため不明である。表面は丁寧に研磨されている。B880も破片であるため原形は不明であるが、唯一原形を保っている一面は内縁し、丁寧に研磨されている。その他調整石器とでも呼ぶべき使用痕のある河原石が多数出土している。



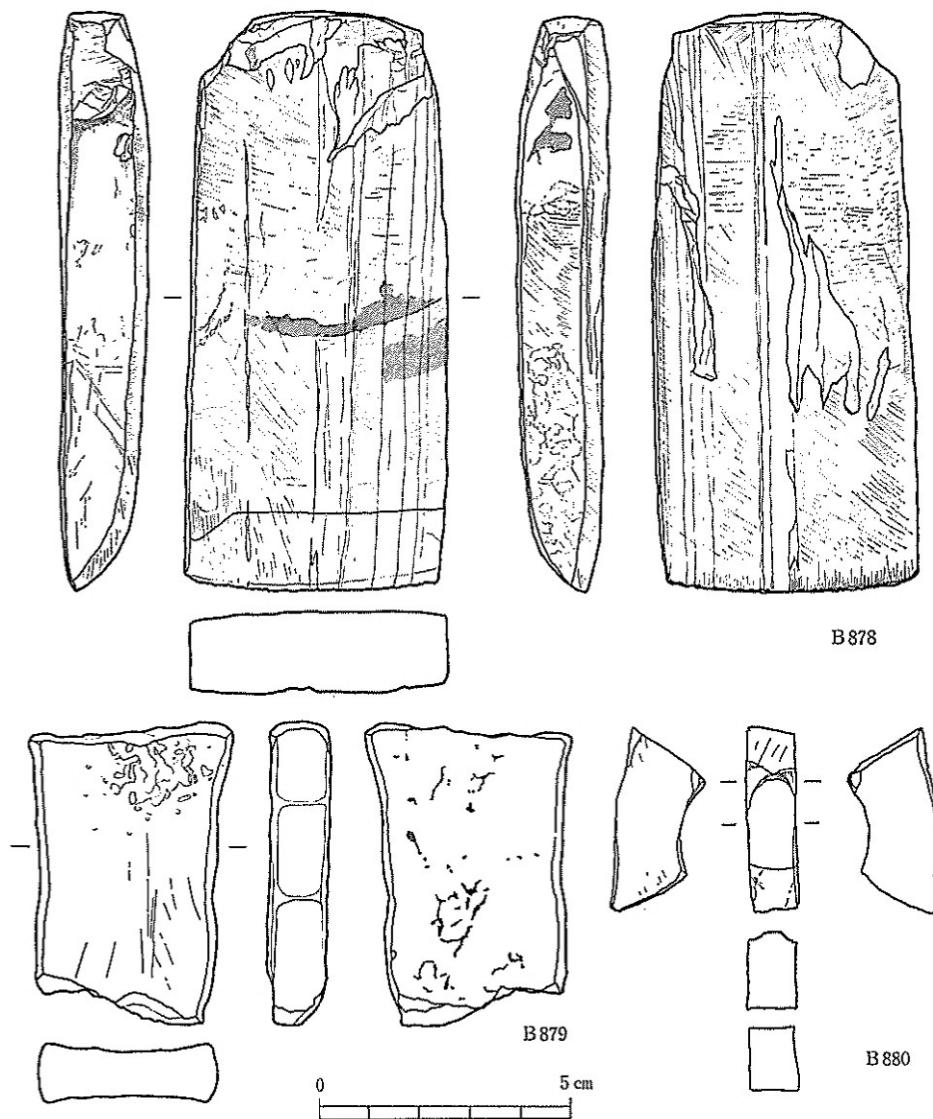
第22図 B地区弥生時代前期包含層出土石器 (4)



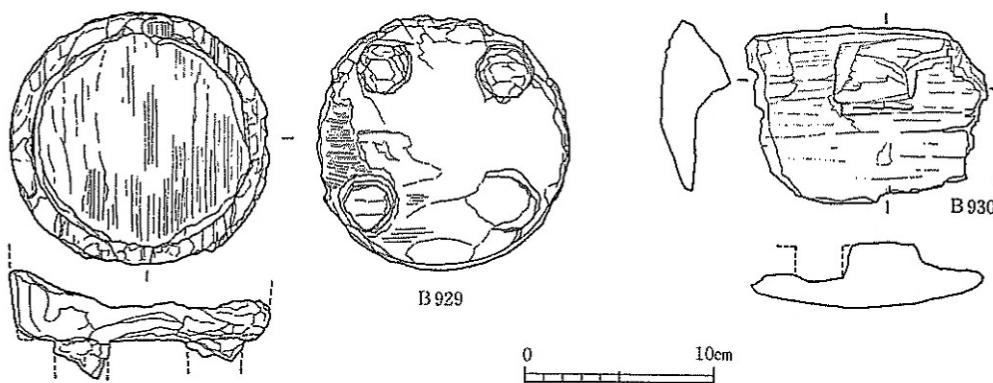
第23図 B地区弥生時代前期包含層出土石器 (5)



第24図 B地区弥生時代前期包含層出土石器 (6)



第25図 弥生時代前期包含層出土石器 (7)



第26図 B地区弥生時代前期包含層出土木器

## 〔木器〕(第26図)

包含層出土の木製品は少ない。B929は四脚容器であるが、底部のみで上部を欠く。平面は円形を呈し、側面は残存部からほぼ垂直に立ちあがるものと思われる。底面には4ヶ所に円柱状の短い脚を作り出しているが、その内1ヶ所は欠落して痕跡のみを残す。容器内部は削きで、その後丁寧に削られている。大きさは、直径13.5cm、現高5.6cm、幅は側面で1.2cm、底部で1.5cmを測る。材質はヤマグワである。B930は、ほとんどが欠損して原形をとどめないが、ほぞ穴の痕跡が認められるものである。(岡本)

## 遺構

弥生時代前期の遺構はB地区では他の地区とは異なり、全面にわたって密に検出された。検出された遺構は竪穴住居、掘立柱建物、墓、溝、土坑等で、ほぼ当時の集落跡を南北に貫いて調査した形となった。その結果、多くのことが判明し、当時の集落の在り方の一端を知ることができた。それについては後章でふれることにする。

遺構はT.P.+2.3m前後のところで検出された。これらの遺構は第Ⅳ章、第1節、第2項(2)で説明した第Ⅳ層の黄色砂をベースにしている。この砂は、おそらく縄文時代晩期の河川跡で水流によって運ばれ、堆積したものであろう。この堆積層はまわりの地形よりわずかに高く、微高地形を形成しており、遺構の大半は、この上に位置する。しかし、B地区の北端ではA地区と同様、粘土もしくはシルト上に遺構があり、両端では第Ⅹ層の第2黑色粘土及び、その上に薄く堆積する粘土上に遺構が認められる。

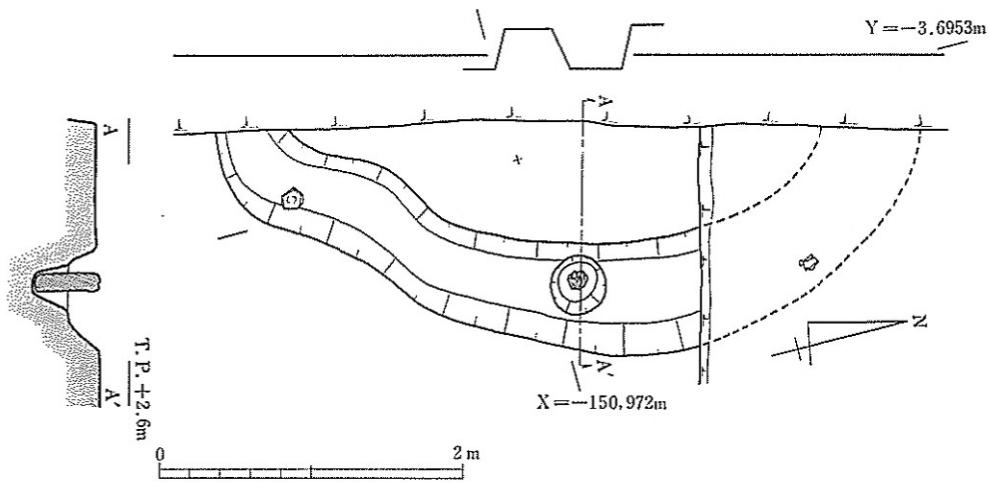
遺構は、その重複関係より3もしくは4時期に分かれると考えられるが、遺構面は連續して営まれており、あまり時期差はないものと思われる。まして、重複遺構出土遺物については、ある程度の時期差は認められるものの、土器などは長い間使用できるということからかもしれないが、切られている遺構よりも切っている遺構の方が古い土器を出土するという場合も多々あり、そのようなことからも多くの重複関係はあるものの、あまり時間的空間はないものと考えられる。なお、一部分に上下2遺構面を検出した地点があるが、わずかな場所であるため、あえて分けずにまとめて説明することにする。以下、遺構ごとに概観していくことにする。(岡本)

## A 竪穴住居

竪穴住居は14棟検出した。この時期の竪穴住居は全国的にも検出例が少なく、しかも14棟もまとまって検出した例は極めて少ない。特に畿内では池上遺跡や四ツ池遺跡等でこの時期の竪穴住居が単発的には発見されているもののその実体は明らかでない。今回検出した竪穴住居は今後畿内におけるこの時期の竪穴住居を知る上での一資料となるべきものである。

14棟の竪穴住居は、次の3群に大別できる。A群、B S I 201～B S I 203を中心とした北側の群、B群、B S I 204・205を中心とした中央部や南側の群、C群、B S I 206～B S I 214を中心とした南側の群である。また、平面プランは円形のものと方形のものがあり、方形のものが概して古いようである。A・C群は円形プランを主とした群、B群は方形プランを主とした群である。

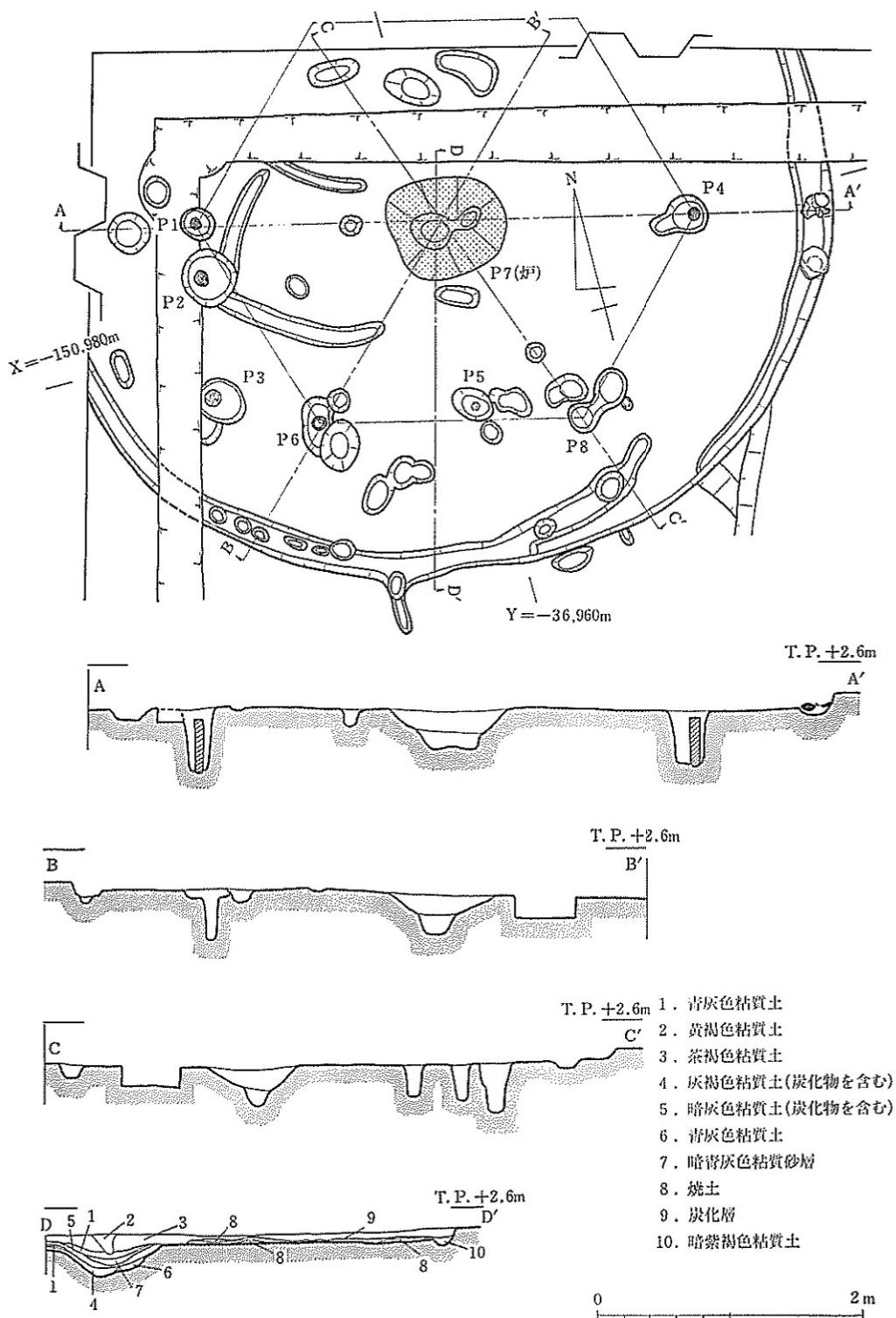
**B S I 201** (第27図) Bトレント北西側で検出した。平面プランは梢円形と考えられるが、大半が調査の対象外であり、検出したのは東側の一部のみであった。壁は削平されているためか認められず、周溝のみを検出した。推定規模は長径4.7m、短径4.2mを測り、主軸の方向はN-14°-Eである。周溝は上幅0.5~0.75m、下幅0.28~0.4m、深さ0.2mを測るが、堅穴住居の周溝としてはやや幅広いようである。周溝は一度南側で屈曲し、埋土は黒色粘土である。溝内には柱根が遺存していた。この柱根は防護施設に関係するものか、もしくは周壁板を固定するための杭とも考えられるが明確でない。住居床面及び周溝内より弥生時代前期の土器片が若干出土した。



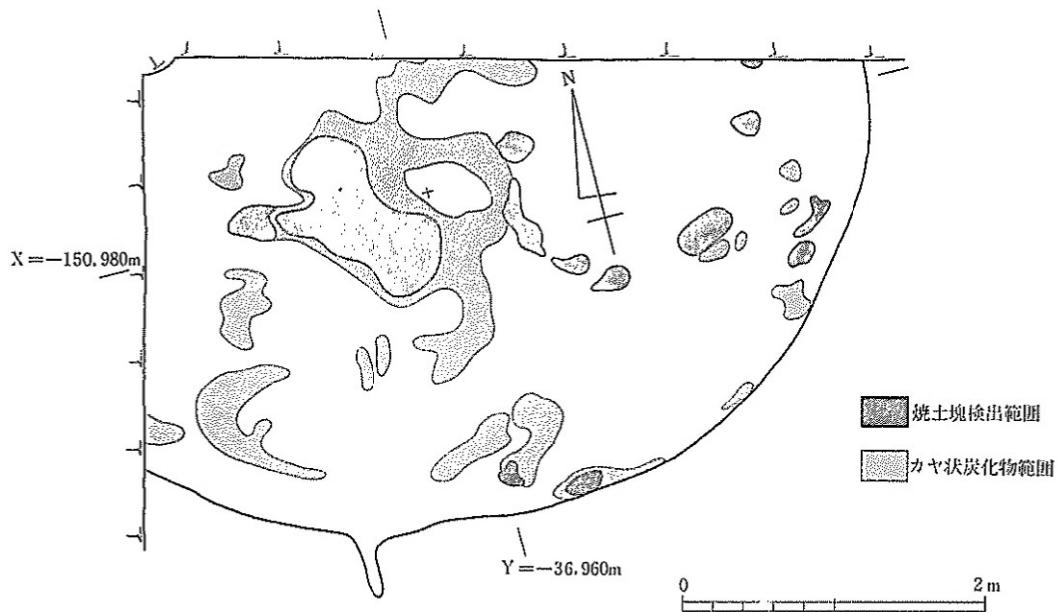
第27図 B S I 201実測図

**B S I 202** (第28図) 2Bトレント北側で検出した。全体の約1/3は調査区外であったが、長径6.0m、短径5.2mの梢円形の平面プランをした堅穴住居であり、短軸方向はN-15°-Eである。床面はほぼ水平で、床面積は推定で22.9m<sup>2</sup>を測る。壁高は0.1~0.15mを測り、壁直下には周溝（壁溝）が巡る。周溝は上幅0.2m、下幅0.1m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。周溝は全周せず南東側で切れ、一方は内側に入る。また、南側には0.3mほど突出する部分がある。周溝内南西側で径0.1m前後の小規模なピットの並列している部分が検出された。これはおそらく壁面崩壊防護用の周壁板を固定する杭痕と考えられる。主柱は柱穴の状態から6本柱と考えられる。すなわち、P-1、P-6、P-8、P-4と調査区外のP-6とP-8の対角線上に推定されるものである。しかし、柱穴はこれら以外にも多数検出されていること、前述の周溝の状態などからこの住居は一度建替え、もしくは拡張されているものと思われる。柱穴は径0.2m前後のものが主でその深さより2グループに大別できる。1つは深さ0.4~0.5mのもので主柱と考えられる柱穴が多い。もう1つは0.2~0.3mのもので主柱以外の柱穴に多い。これらは主柱以外の支柱や建替え前の柱穴と考えられる。P-1~P-5の柱穴には径0.15~0.2m前後、長さ0.2~0.4m前後の柱根が遺存していた。

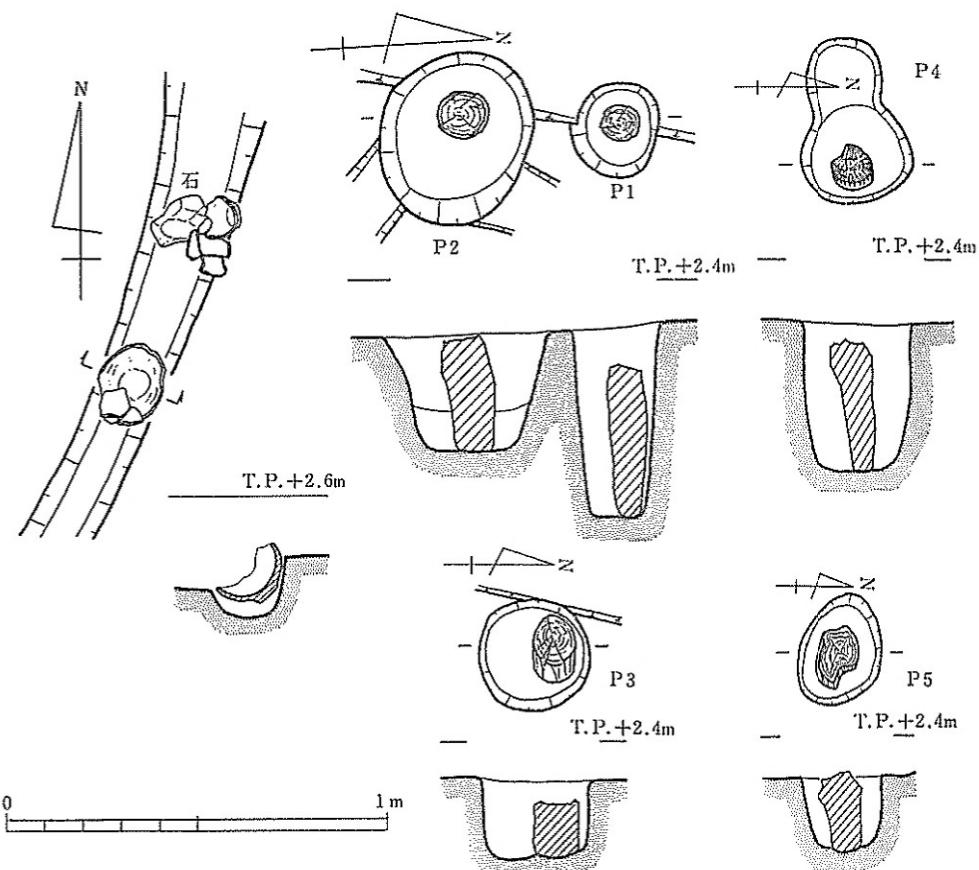
P-7は住居のほぼ中央に位置し、スミや炭化物、灰を多く含み、内面の周囲が焼けていることから炉跡と考えられる。大きさは長径0.85m、短径0.75m、深さ0.23mを測り、2段に掘られ



第28図 B-S I 202実測図

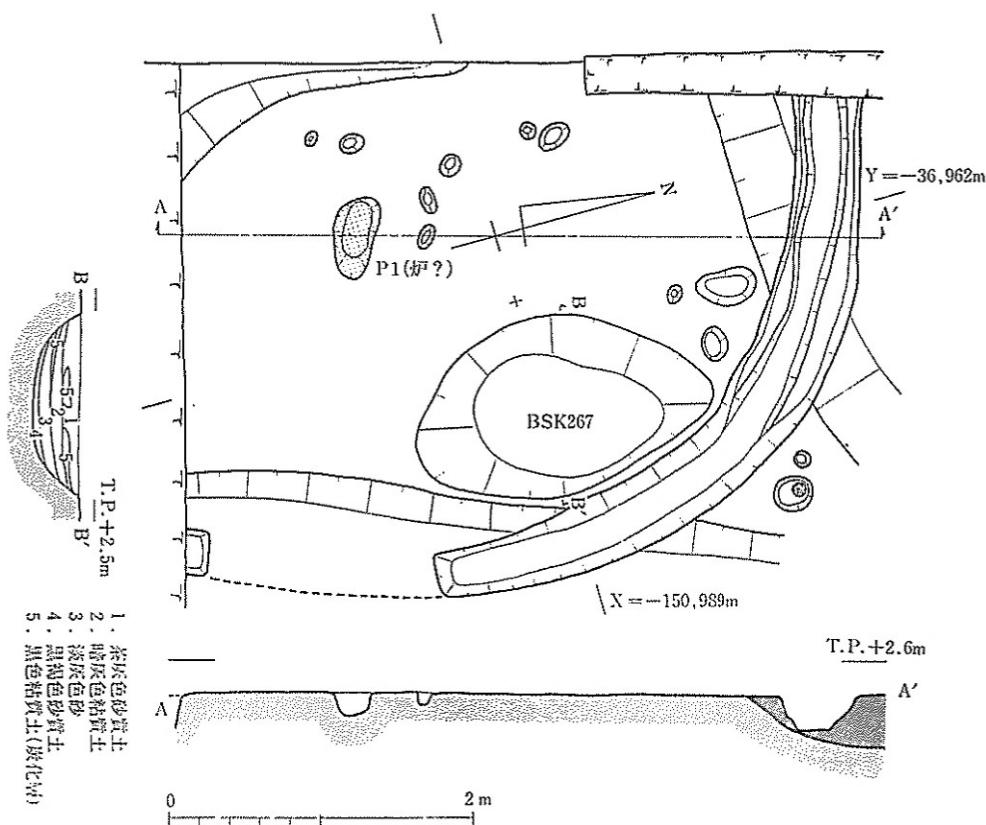


第29図 BS I 202上層焼土検出状態図



第30図 BS I 202壁溝内遺物出土状態及び柱根出土状態図

ている。覆土の状況は、包含層をはずすと住居部分全面に茶褐色粘質土が充填している。それをはずすと焼土塊の固まりや炭化層が認められる。これは、この住居が焼失した可能性を示唆するものであるが、炭化材は小規模のものを1、2点除いて全く出土しなかった。焼失後取り除かれた可能性がある。炭化層の大部分は芽状のものが炭化したもので、これらは屋根に葺かれていたと考えられる。さらに住居の中心部には焼土塊が芽状の炭化物の上に重なって出土していたことから、屋根の上に泥もしくは土を乗せていました（塗っていた）可能性が想定されるが、現状だけでは断定しがたい。これら焼土塊や炭化層をはずして、初めて床面が表われる。周溝内には暗紫褐色粘質土が堆積している。床面西側には幅0.15m、深さ0.1mの弧状の溝が検出されたが、用途は不明である。遺物は覆土内及び周溝内、柱穴内から前期の土器片が出土した。特に東側周溝内からは堆積時に流れ込んだと考えられる無頸壺が出土した。この壺の内面には赤色顔料がわずかに付着しているのが認められる。他にP-4からも土器片が比較的多く出土した。

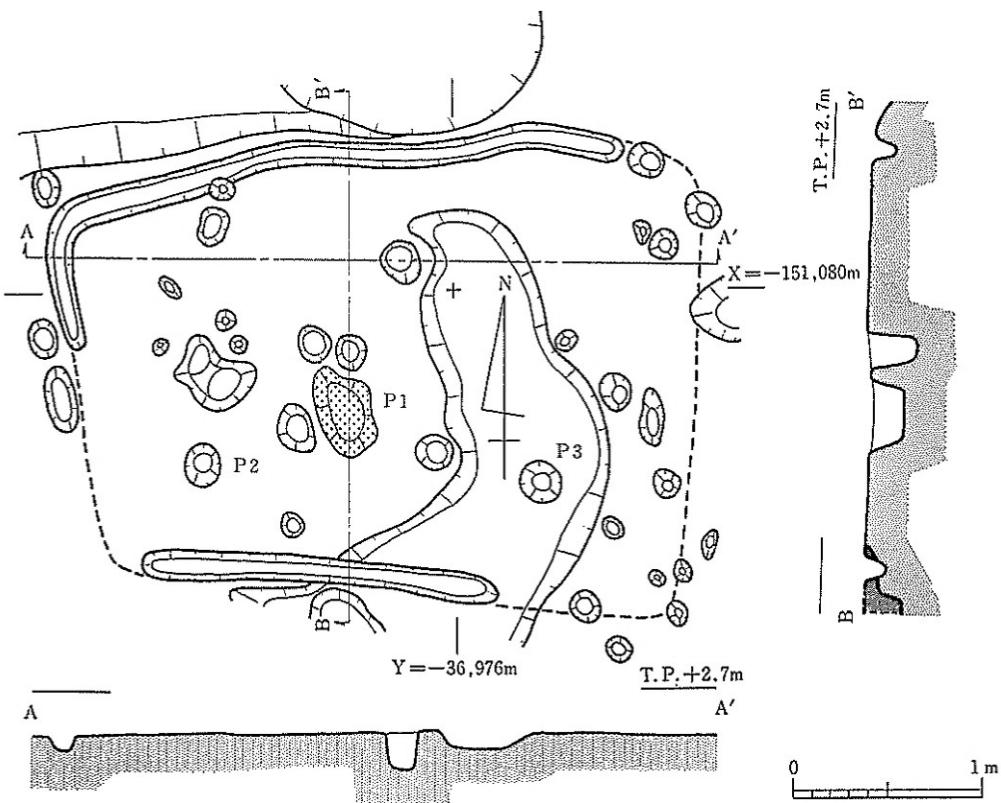


第31図 B S I 203実測図

**B S I 203 (第31図)** 2Bトレーナー南西側で検出した。平面プランは梢円形と考られるが、全体の1/4強は調査区外である。推定規模は長径6.0m、短径5.3mと考えられ、長軸方向はN-16°-Eである。床面積は22m<sup>2</sup>前後と推定される。壁は削平のためか全く認められなかった。周溝は上幅0.3~0.5m、下幅0.2m、深さ0.25mを測り、断面は逆台形を呈するが、北側の部分は2段に掘

り込まれている。周溝内の埋土は東側の一部に茶褐色砂質土が堆積するが、大半は暗灰色粘質土が堆積する。周溝の東側は意図的に切られ、1.5mの幅があけられている。おそらくこの部分が入口であった可能性が考えられる。柱穴は床面で柱穴状のピットをいくつか検出したが、どれも小規模で、しかも浅いことから明確な柱穴は検出できなかった。床面は前期遺構面のベースである黄色砂をそのまま床面として利用しているようであるが、B S D 208、B S K 206を切って造られていることから、旧遺構と重なるところは当然整地されているものと思われる。炉跡は断定できるものはない。ただP-1は $0.55m \times 0.3m$ 、深さ0.1mを測る規模のピットで、ピット内全体には黒色の炭が堆積していることから炉であった可能性が強い。周溝北東内側に沿って土坑B S K 267が検出されたが、この土坑が住居に伴うかどうかは不明である。しかし、周溝とは重複せず、しかも周溝に沿っていることから、この住居に伴う土坑の可能性が強い。もしこの土坑が住居に伴うものであれば貯蔵穴であったと考えられる。詳細については土坑のところで述べるが、土坑底より前期の甕が1個体分出土した。また、周溝内からも前期の土器片が少量出土した。

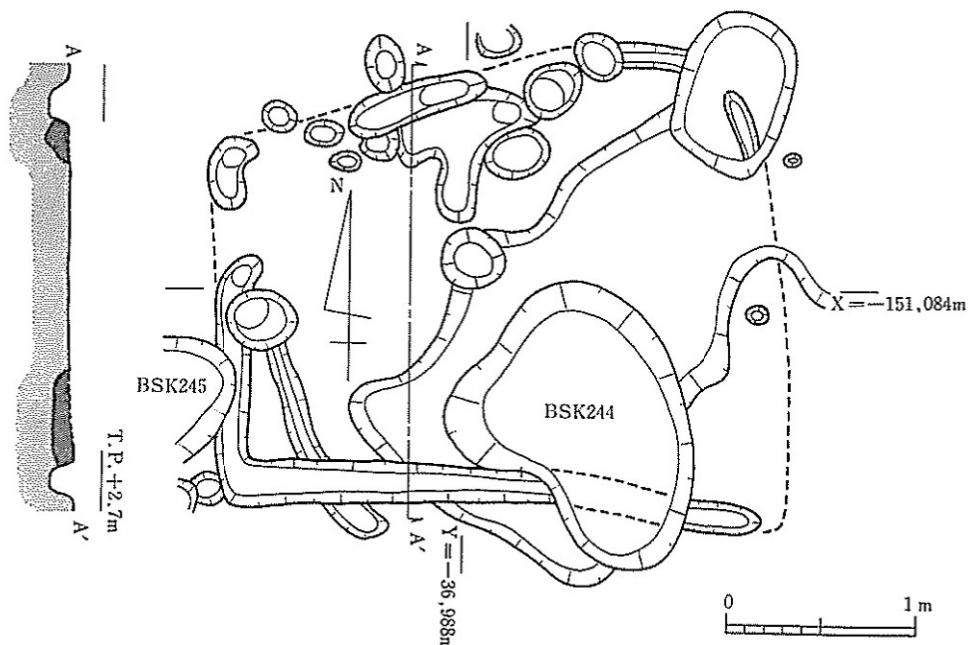
**B S I 204** (第32図) Bトレーニ中央部やや南側で検出した。平面プランは不定形であるが長方形を呈する。壁は調査の段階では認められず、周溝の北側と南側の一部を検出した。推定規模は長辺北側で3.4m、南側で3.0m、短辺西側で1.9m、東側で2.3mを測り、主軸はほぼ南北方向



第32図 B S I 204実測図

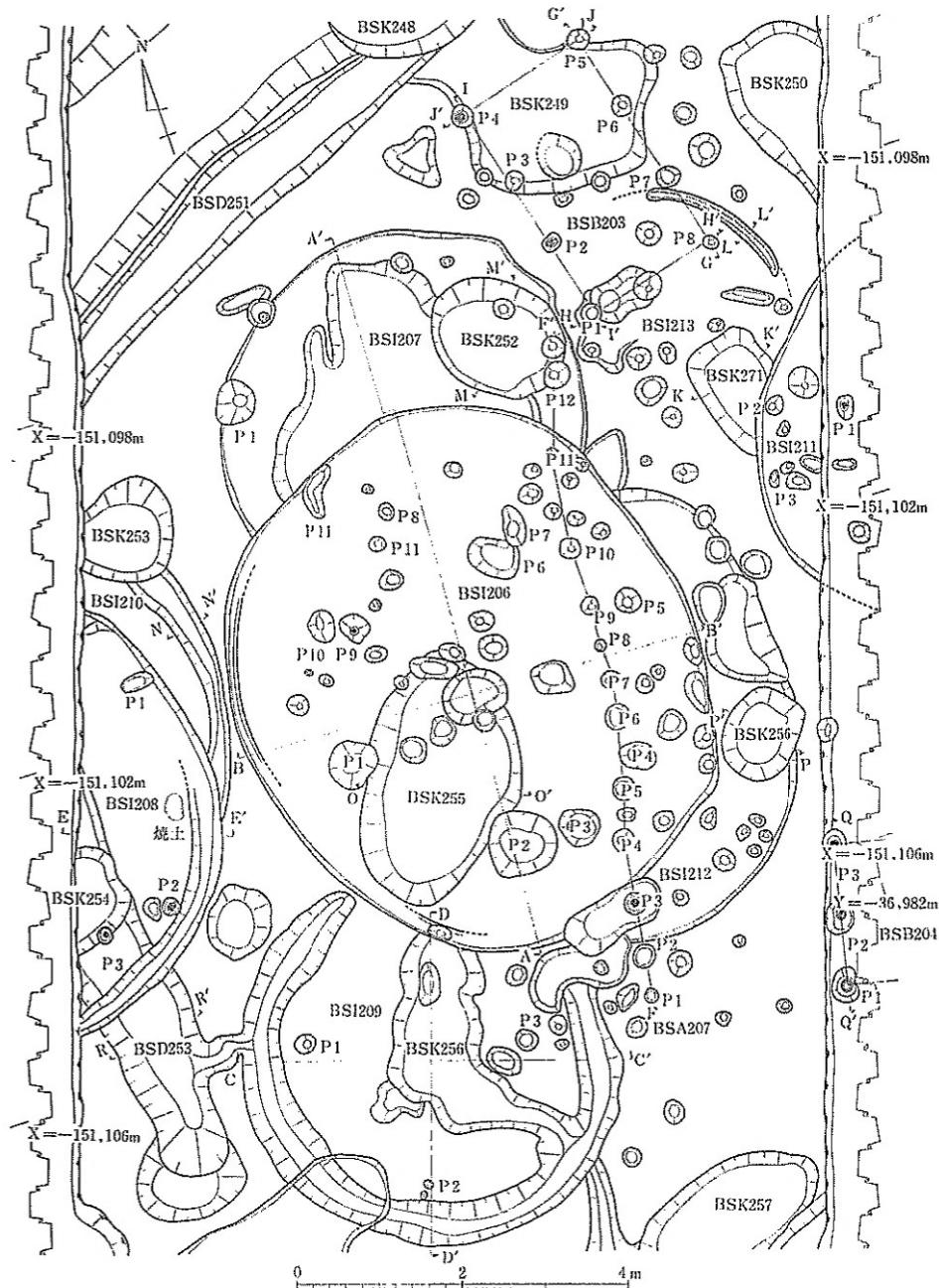
である。床面積は $6.5\text{m}^2$ 前後と推定され小規模の住居である。弥生時代前期の竪穴住居は円形プランのものが主で方形のものは数少ない。今回検出したものに比較的近い形態をしているものに、規模は異なるが、愛知県西志賀遺跡の竪穴住居がある。<sup>(5)</sup>周溝は上幅 $0.15\text{m}$ 、下幅 $0.1\text{m}$ 、深さ $0.1\text{m}$ を測り、断面V字形を呈する。埋土は黒灰色粘質土で周溝は、もとはほぼ全周に巡らされていたと考えられる。柱穴は床面で多数のピットが検出されているので、どれがBSI204に伴うものかは断定しがたい。ただ平面プランから考えて4本柱と考えられているのでP-2、P-3などは主柱の柱穴になるものかもしれない。炉跡はP-1に炭が堆積していたことから、その可能性が考えられる。大きさは $0.3\text{m} \times 0.4\text{m}$ 、深さ $0.15\text{m}$ を測る。床面は前期遺構面のベース層である黄色砂層上に貼床を行なったと考えられ、推定床面のみによく引締った灰色粘質土が認められた。

**BSI205**（第33図） 8Bトレンチ東側で検出した。平面プランはBSI204と同様の不定形な長方形を呈するが、周溝の一部を検出したのみである。規模は長辺北側で $2.8\text{m}$ 、南側で $3.0\text{m}$ 、短辺東側で $2.5\text{m}$ 、西側で $2.0\text{m}$ を測り、主軸はほぼ南北方向である。推定床面積は $6.5\text{m}^2$ 前後で、BSI204とほぼ同じである。周溝は上幅 $0.2\sim 0.25\text{m}$ 、下幅 $0.1\sim 0.15\text{m}$ を測り、断面U字形を呈し、黒灰色粘質土が堆積する。もとは全周に巡っていた可能性がある。住居に伴う柱穴については不明である。また床面については、溝状の遺構を切って造られていることから、かなりの整地が行なわれたことが想定される。規模や周溝の埋土の状況からBSI204とほぼ同時期と考えられる。



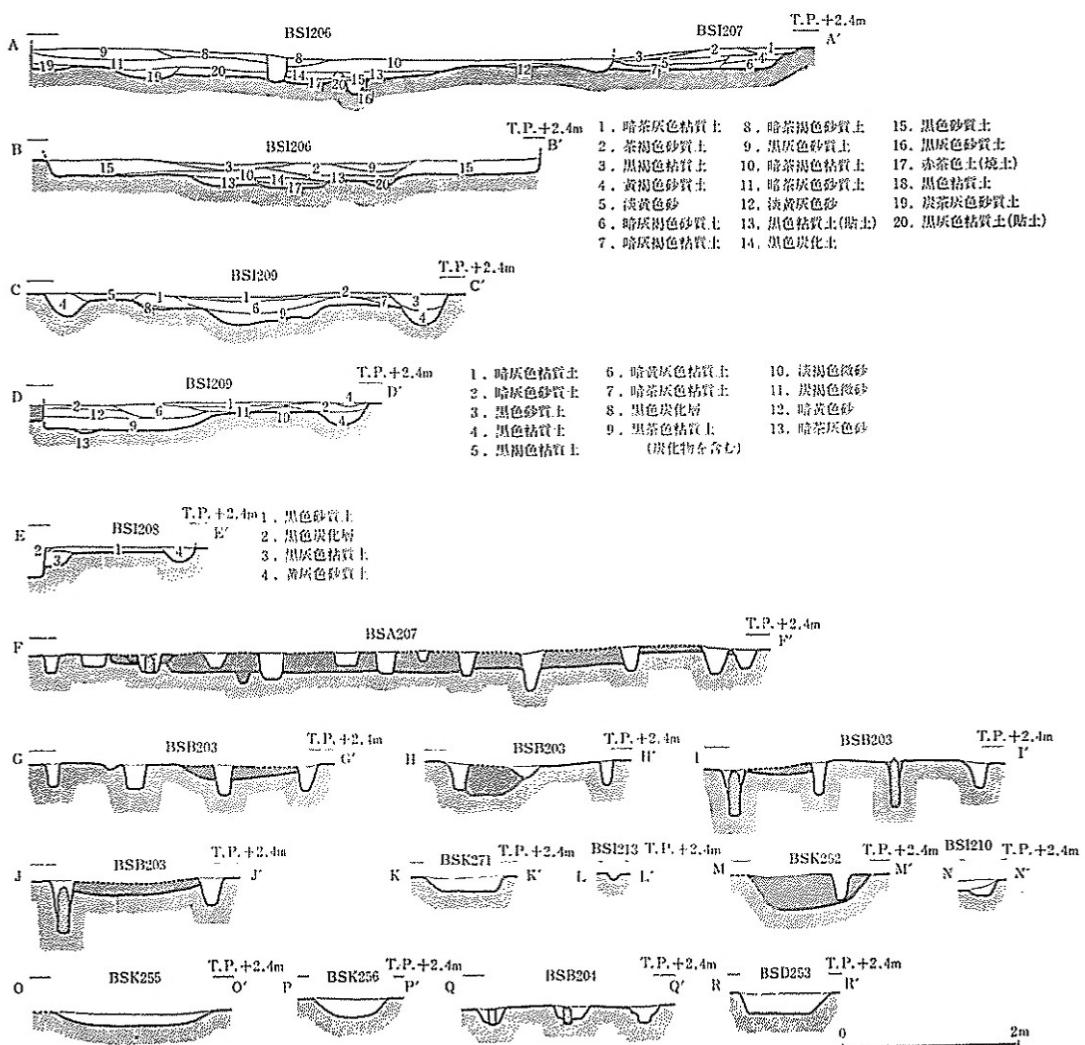
第33図 BSI205実測図

**BSI206**（第34図・35図） Bトレンチ南側で検出した。平面プランは長径 $6.3\text{m}$ 、短径 $5.5\text{m}$ の楕円形で、長軸方向N-10°-Wである。床面積は $27\text{m}^2$ 前後と考えられる。壁はベースの黄色砂



第34図 B S I 206周辺住居跡群実測図

を掘り込んで造られているため残りは悪く、壁高の最も高いところで0.1mを測るのみである。周溝は元来はほぼ全周に巡っていたものと思われるが、北西側と南西側でその一部を検出したのみである。周溝幅は0.15m、深さ0.05mを測る。柱穴は多数検出されているために断定しにくい。しかし、住居の平面形と柱穴の位置から、P-1、P-2、P-4、P-5、P-7、P-8、P-10の7本柱であった可能性が考えられる。なお、P-9、P-11には柱根が遺存していた。覆土の



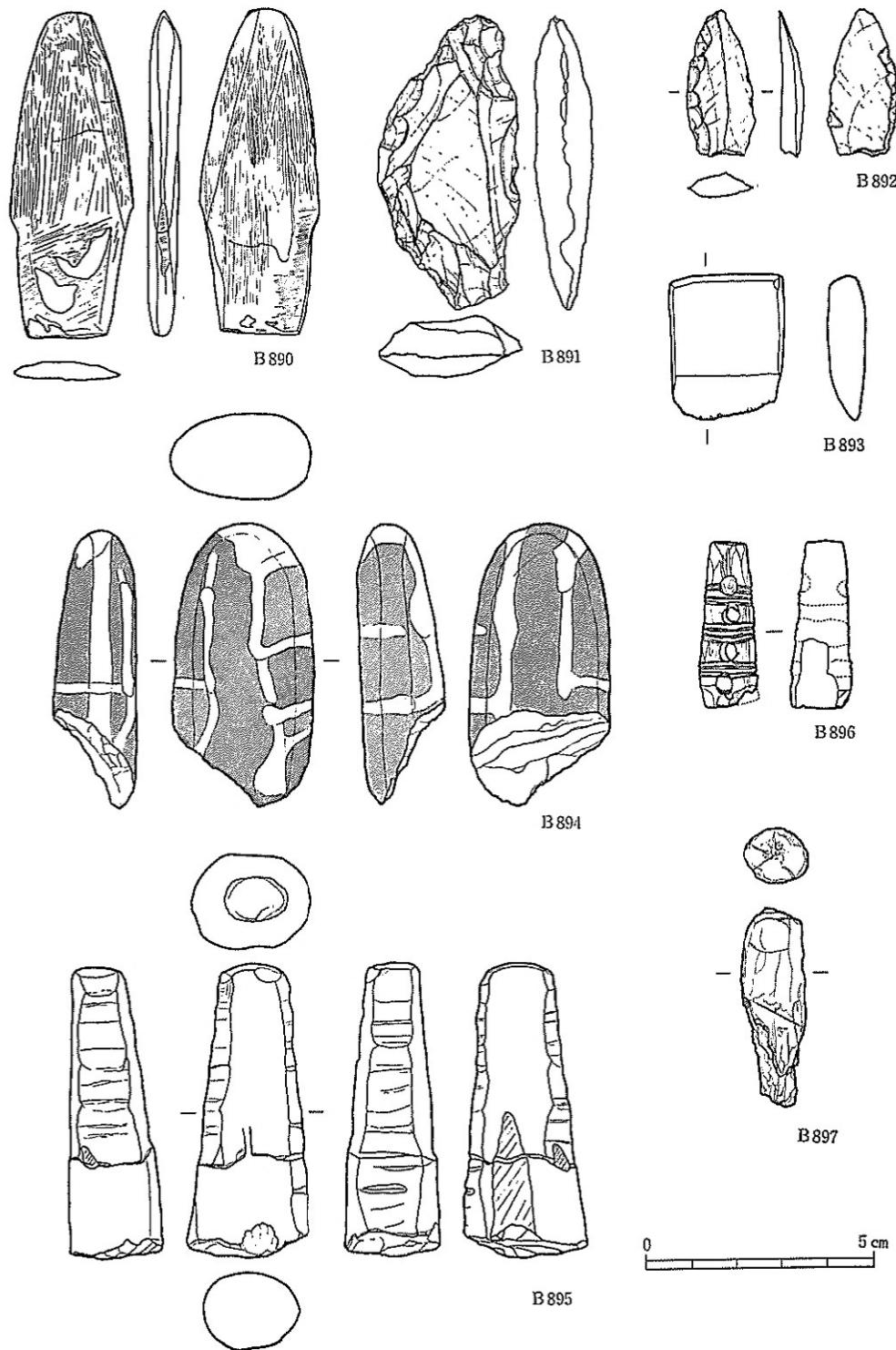
第35図 B S I 206周辺遺構土層断面図（実測地点は第34図参照）

状況は、実測地点で20層もの堆積が認められた。その内、第13層（黒色粘質土）と第20層（黒灰色粘質土）は貼土と考えられる。床面は、ベース層の黄色砂をそのまま床としているが、かなりの起伏が認められることから貼床を行ないほぼ水平にしたものと思われる。また、南西側周溝内及び南東壁際で小ピットが並列しているのが検出された。壁面防護用の周壁板を固定する杭痕であろう。P-12は住居のはば中央に位置することと埋土の状況（黒色炭化土と赤茶色焼土）から炉跡と考えられ、その規模は $0.6 \times 0.8$ mの梢円形である。出土遺物の大半は覆土内からであり、前期の土器片及び石器、木器が出土した。

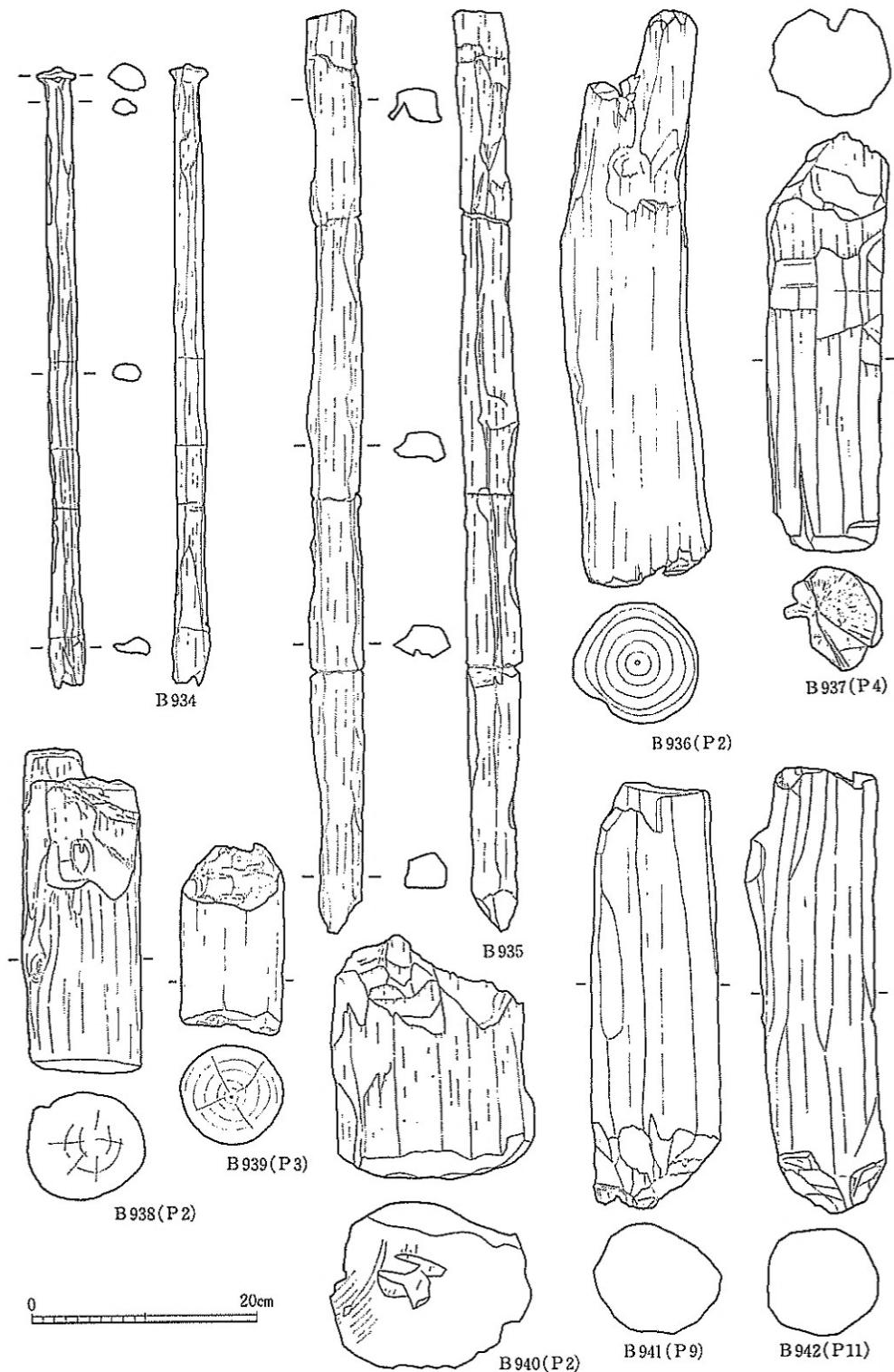
#### 出土遺物

##### 〔石器〕（第36図 B 890～B 892・B 894・B 895）

B 890は小型の鉄剣形磨製石劍である。住居内北側のP-11より出土した。両面丁寧に研磨されているが、大きさや形態から、一度折れたものを再加工した可能性が考えられる。長さ7.2cm、



第36図 BS I 206(B890・B891・B892・B894・B895)・208(B893・B896・B897)出土石器・骨角器



第37図 B S I 206 (B934・B935・B941・B942)・B S I 208 (B940)、  
B S B 203 (B936・B937)・B S B 204 (B938・B939) 出土木器

幅2.7cm、厚さ0.4cmを測り、材質はホルンフェルスである。

B891は不定形刃器である。覆土内より出土した。両面に大剝離面が残り、ステップ・フレイキングとフリー・フレイキングが施され、刃部には若干のトリミングが認められる。長さ6.3cm、幅3.0cm、厚さ1.2cmを測り、材質はサヌカイトである。

B892は石鎌の未製品と考えられる。両面に大剝離面が残り、側縁の一部にトリミングが施されている。長さ3.1cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmを測る。材質はサヌカイトである。

B894は用途不明の石製品で一部が欠損している。使用痕は全く認められないが、表面に漆状のものが塗られている。現長6.2cm、幅3.1cm、厚さ1.9cmを測る。材質は砂岩である。

B895は棒状石製品の端部と考えられるが用途は不明である。端部に行くほど細くなり、削り出し状の段が意識的に設けられている。側縁には2次的と考えられる敲打痕が認められる。現長6.5cm、幅2.5cm、厚さ1.7cmを測る。材質は砂岩である。

#### 〔木器〕(第37図、B934・935・941・942)

B934は棒状の木製品である。BS I 207に跨る覆土中より出土した。両端部を欠くが、一方には削り出しによる鰐状の頭をつける。頭部の先にはもと長さ1cmほどの突起物が付いていたが、腐蝕が著しかったため、洗浄中に消滅してしまった。断面は梢円形を呈し、中央部は比較的丁寧に加工されている。現長54.0cm、幅2.4cm、厚さ1.4cmを測る。材質はサカキである。

B935も棒状木製品で、B934と並んで出土した。両端部を欠き作りは非常に雑である。現長80.4cm、幅5.0cm、厚さ2.0cmを測る。B941・942は柱根である。

**BS I 207**(第34・35図) BS I 207はBトレンチ南側で検出した。平面プランは円形と思われるが、BS I 206と重複関係にあり、BS I 206によって南側の約1/4は切られている。規模は直径4.5m前後、床面積15.9m<sup>2</sup>前後であったと推定され、主軸の方向はN-10°-WでBS I 206と同じである。壁高は0.1mが残り、周溝は調査した段階では認められなかった。柱穴はいくつかを検出したが、この住居に伴うかどうかは不明である。床面は南側に若干傾斜し、第4～7層は貼土と思われる。炉跡は調査した範囲では検出されなかった。出土遺物は覆土内及びP-1より土器片が出土した。しかしP-1自体は上層の遺構と思われる。

**BS I 208**(第34・35図) BS I 206の西側で検出した。平面プランは円形であるが西側1/4弱は調査区外である。規模は直径5.5m、床面積18m<sup>2</sup>前後と推定される。壁高は最もよく残っているところで0.1mを測る。周溝は調査した南側では認められたが、北側では検出できなかった。周溝幅0.3～0.4m、深さ0.1mを測り、茶灰色砂質土が堆積する。また、柱穴はいくつか検出されたが、主柱に伴うものは確認できなかった。P-1、P-2などは周壁板を固定する杭痕と考えられる。なお、P-2、P-3には柱根が遺残していた。床面はBS D253やBS K254を切って造成されているためかなりの整地が行なわれたものと推定できる。炉跡は調査した範囲では検出されなかったが、東側周溝横で0.20×0.35mの範囲で焼土を検出した。これが炉跡であったかどうかは不明である。遺物は覆土中より前期の土器片及び石器、骨角器が出土した。なお、この住居

はB S I 210の建替と思われる。

#### 出土遺物

##### 〔石器〕(第36図B 893)

B 893は小型の扁平片刃石斧である。平面形は長方形を呈するが刃部は基部側よりも若干幅が狭くなる。長さ3.1cm、幅2.5cm、厚さ0.8cmを測り、ほぼ完形品である。刃部には刃潰れが著しく認められる。材質は粘板岩である。

##### 〔木器〕(第37図B 940)

B 940はP-2より出土した柱根である。現長21.7cm、径16cm前後を測り、底部はほぼ水平に整形され、先端はローソク状に腐蝕している。材質はヒノキである。

##### 〔骨角器〕(第36図B 896・B 897)

B 896は弓管状鹿角製品である。覆土上面より出土した。長さ3.6cm、直徑1.3cmを測り、鉛筆のキャップ状を呈し、端部は面をもつ。基礎部の一部を欠く。側面には本体に対して直角に貫通する3つの穿孔があり、さらにその上に貫通しない1対の孔がある。従来発見されているものはこれらの孔に栓状のものが挿入されているのが普通であるが、今回発見されたものは認められなかった。また基部にも盲孔が穿たれている。表面には4本1組の沈線が3段に施されており、形態からして瓜生堂遺跡出土のものに最もよく似ている。<sup>(6)</sup>なお、材質は鹿角ではなく鹿骨である可能性もある。<sup>(7)</sup>

B 897は骨角器の破片もしくは未製品と考えられる。現長4.3cm、直徑1.2cmを測り、先端部に火を受けた跡が認められる。

**B S I 209 (第34・35図)** Bトレンチ南側で検出した。北側はB S I 206によって切られている。平面プランは円形で、規模は直徑4.5m、床面積は10.2m<sup>2</sup>前後であったと推測される。壁高は0.1~0.15mを測り、壁に沿って内側に周溝(壁溝)が巡る。周溝は上幅0.5~0.6m、下幅0.15~0.2m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。周溝は全周せず北側で袋状に切れる。おそらくこの部分が入口であった可能性が強い。また周溝西側では小溝によって、B S D 253と接続していることと、周溝の規模が他の住居よりも大きいことから、周壁板を固定するだけではなく、排水溝も兼ていた可能性がある。柱穴はP-1、P-2、P-3と北側に推定される柱穴とを合せて4本柱の住居であったと考えられる。炉跡は床面のほぼ中央部にあったものと想定されるが、この住居が埋没する段階で掘り込まれたと考えられるB S K 256によって検出することはできなかった。出土遺物は覆土内より前期及び中期初頭(畿内第Ⅱ様式)の土器片が出土している。

**B S I 210 (第34・35図)** Bトレンチの南側、B S I 206の西側で検出したが大半がB I S 208によって切られている。B S I 208建替前の住居と考えられる。平面プランは円形と考えられるが規模は明確にしがたい。しかし、推定で直徑5.5m前後ではなかったかと思われる。壁高は0.1mを測り、壁直下には周溝(壁溝)が巡る。周溝は上幅0.25~0.5m、下幅0.15~0.3m、深さ0.1mを測り、断面逆台形を呈する。柱穴及び炉跡は調査した範囲では検出されなかった。出土遺物

は覆土中より前期の土器片が出土している。

**B S I 211** (第34図) Bトレンチの南側、B S I 213の東側で検出した。全体の多くは調査区外であり、検出したのは西側の一部分のみである。しかし、その形態から平面プランは円形と思われる。推定規模は直径 5.0m 前後、床面積 19.6m<sup>2</sup> 前後と考えられる。壁高は 0.1~0.15m を測るが、周溝は検出されなかった。柱穴の内、P-2、P-3 は周壁板固定用の杭痕と思われる。また P-1 には柱根が遺存していた。炉跡は調査した範囲内では認められなかった。出土遺物は覆土中より前期の土器片が出土した。

**B S I 212** (第34・35図) Bトレンチ南側、B S I 206の東側で検出したが、大半がB S I 206に切られている。B S I 206 建替前の住居と考えられる。平面プランは長径 5.5m、短径 4.5m 前後の楕円形と考えられる。壁高は最も残りのよいところで 0.1m を測る。周溝は認められなかつたが、周壁板を固定する杭痕と考えられるピットが壁に沿つていくつか検出された。主柱の柱穴と炉跡は不明である。覆土中より前期の土器片が出土している。(岡本)

#### 出土遺物

##### 〔土器〕(第122図)(P.138)

総点数50点強の土器片が出土した。第I様式土器が出土する。甕1点のみ抽出した。如意形口縁をもつ倒鐘形の体部をもつものである(B137)。頸部に3条の箒描沈線文がある。器内外面ともにナデ調整である。(井藤)

**B S I 213** (第34・35図) Bトレンチ南側で検出したが、北東側の周溝の一部を検出したのみである。周溝のカーブの形態より、直径 4.0m 前後の平面プラン円形の住居であったと考えられる。周溝幅は上幅 0.15m、下幅 0.05m、深さ 0.1m を測り、断面はV字形を呈する。周溝内の埋土は暗灰色粘質土である。他の住居との重複関係よりC住居跡群中最も古い住居の一つと考えられる。

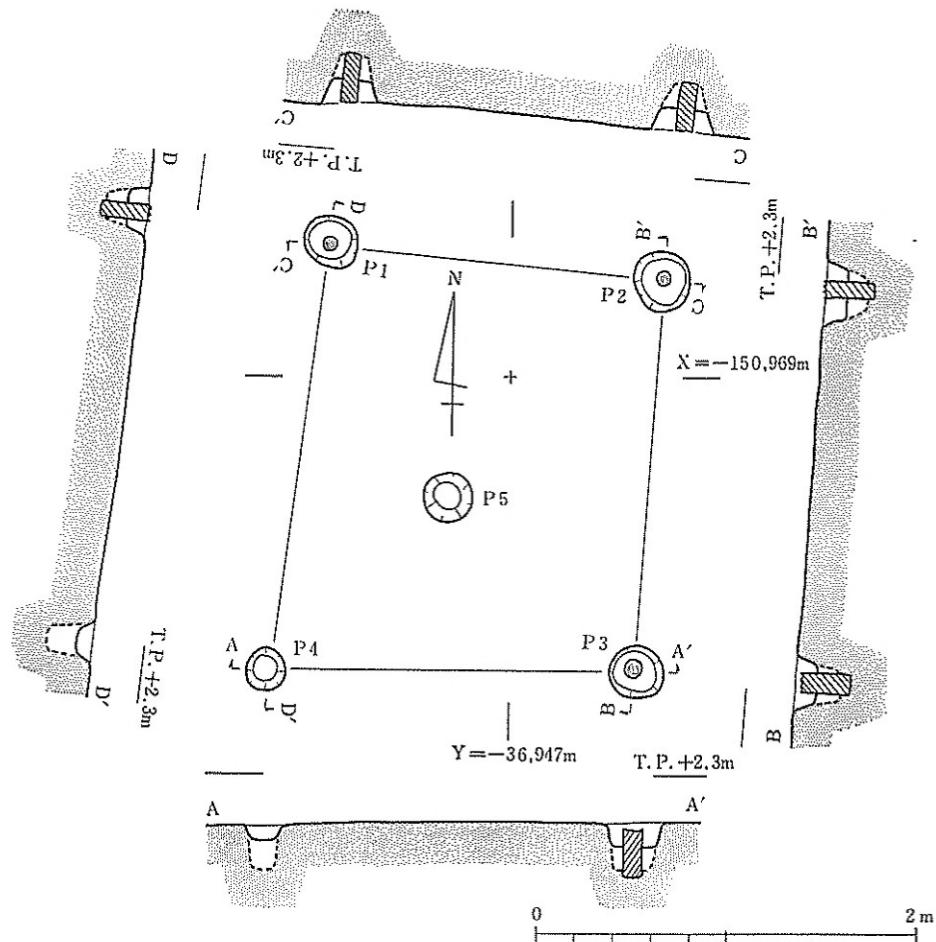
第1表 B地区弥生時代前期窪穴住居一覧表 ※規模・床面積等については平均値であり推定を含む

住居番号	平面形	規模(m)	壁高(m)	面積(m <sup>2</sup> )	炉	周溝	主軸方向	群	重複関係
B S I 201	楕円形	4.7×4.2	—	14.5	—	有	N-14°-E	A	—
B S I 202	楕円形	6.0×5.2	0.1~0.15	22.9	有	有	N-15°-E	A	—
B S I 203	楕円形	6.0×5.3	—	22.0	有	有	N-16°-E	A	—
B S I 204	長方形	3.2×2.1	—	6.5	有	有	N	B	—
B S I 205	長方形	2.9×2.6	—	6.5	—	有	N	B	—
B S I 206	楕円形	6.5×5.5	0.1	27.0	有	有	N-10°-W	C	B S I 207・209・212・213 より新しい
B S I 207	円形	4.5×4.5	0.1	15.9	—	無	—	C	B S I 206より古く、 B S I 213より新しい
B S I 208	円形	5.5×5.5	0.1	18.0	燒土面 有り	有	—	C	B S I 210より新しい
B S I 209	円形	4.5×4.5	0.1~0.15	10.2	—	有	—	C	B S I 206より古い
B S I 210	円形	5.5×5.5	0.1	19.5	—	有	—	C	B S I 208より古い
B S I 211	円形	5.0×5.0	0.1~0.15	19.6	—	無	—	C	B S I 213より新しい
B S I 212	楕円形	5.5×4.5	0.1	19.6	—	無	N-12°-E	C	B S I 216より古く、 B S I 213より新しい
B S I 213	円形	4.0×4.0	—	10.2	—	有	—	C	B S I 206・207・211・212
B S I 214	楕円形	5.5×4.0	—	17.5	—	有	N-10°-E	C	より古い

**B S I 214** (付図13) Bトレント南側、C住居跡群中最も南で検出した。全体の弱は調査区外で西側の周溝の一部のみを検出した。周溝の形態より長径5.5m、短径4.0m前後の平面プラン楕円形の住居であったと推定される。長軸方向はN-10°Eである。周溝幅は上幅0.2m、下幅0.1m、深さ0.1mで断面逆台形を呈する。住穴は西側でピットが認められたが、これが住居に伴うかどうかは不明である。遺物は出土していない。(岡本)

### B 挖立柱建物

掘立柱建物は4棟検出した。しかし調査区全体には柱穴と考えられるピットが無数にあり、本来はもっと多数の掘立柱建物が営まれていたものと思われる。この時期の掘立柱建物は堅穴住居とともに全国的にも極めて少なく、岡山県の津島遺跡や大阪府山賀遺跡などが知られているにすぎず、貴重な資料といえよう。山賀遺跡は友井東遺跡を挟んで今回調査した美園遺跡の北側に位置する（距離にして1km弱）遺跡であるが、そこで検出された掘立柱建物はその規模から住居と考えられている。今回美園遺跡で検出された掘立柱建物は、山賀遺跡に比べて規模が小さく、しかも住居としての堅穴住居が共存していることから高床式の倉庫であった可能性が強い。また、



第38図 B S B 201実測図

堅穴住居は3群に大別できたが、掘立柱建物もこれら同一の3群に別けることができる。すなわちA群はBトレンチの北側、B群はBトレンチの中央部、C群はBトレンチの南側である。

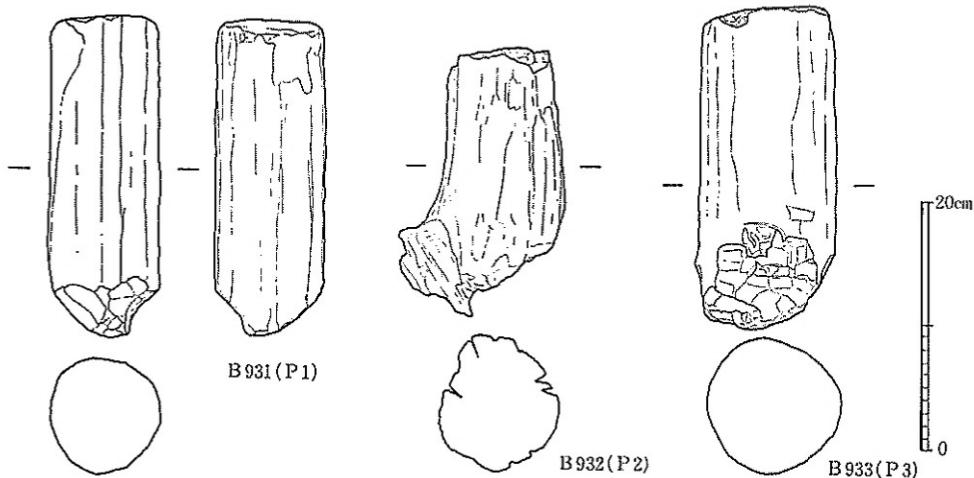
**B S B201** (第38図) Bトレンチ北側で検出した。1間四方の建物であるが南北方向が若干長くなり、柱間も一定しない。柱間は北辺で1.75m、南辺で1.95m、東辺で2.05m、西辺で2.25mを測り、面積は4m<sup>2</sup>前後と考えられる。主軸の方向はN-6°-Eである。主柱は4本であるが中央にも柱があったと思われる柱穴が検出されており、静岡県登呂遺跡の第2倉庫跡に類似している<sup>(9)</sup>。規模についても登呂遺跡の第1、第2倉庫跡とほぼ同一である。柱の掘形は直径0.25~0.3m前後の円形で、深さも0.3m前後を測る。P1~P3には柱根が残っていた。

#### 出土遺物

##### 〔木器〕(第39図)

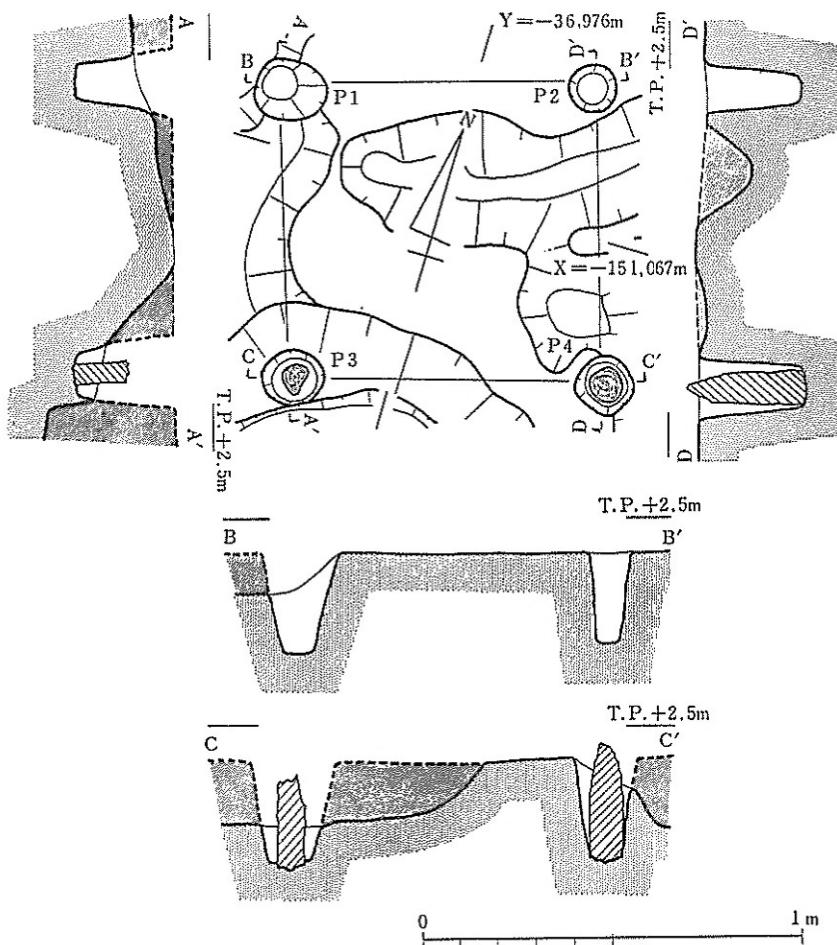
土器等の遺物は全く出土しなかったが前述のように柱根が遺存していた。B931はP-1から出土したものである。現長25.8m、直径9.0mを測り、底部はローソク状に尖りぎみに削られている。しかし、加工のしかたは粗いため、おそらく大型船刃石斧を使用したものであろう。それに反して上端は水平で、かつ丁寧に切り離されているため金属器使用の可能性が認められる。B932はP-2から出土した。現長18.2cm、直径10.5cmを測る。底部は全く加工されずに根株のままであるが、上端はB931と同じでほぼ水平に切られている。B933はP-3から出土した。現長25.4cm、直径11.0mを測り、底部と上端の状態はほぼB931と同じである。

B S B201に遺存していた3本の柱根は上端がすべて水平に意図的に切り離されていることから、建物が使用されなくなった段階で、柱等を他のものに再利用した可能性が考えられる。なお、B933の樹種はヤブツバキである。



第39図 B S B201出土柱根実測図

**B S B202** (第40図) Bトレンチのほぼ中央部で検出した。1辺1.6mの1間四方の建物である。平面は正方形を呈し、主軸の方向はN-17°-Wである。B S K226・229・230と重複関係にある。



第40図 BS B 202実測図

り、これらの遺構より新しい。掘形は円形で柱の幅に合せて掘られており、直径0.25~0.35m前後、深さは他の遺構が重複しているため明確にしがたいが、だいたい0.5m前後であったと思われる。P-3、P-4からは直径15~20cm、長さ50~65cmの柱根が検出された。この建物に関連しての遺物は出土していない。

**B S B 203（第34・35図）** Bトレーニチの南側で検出した1間×3間の南北棟の建物である。規模は桁行2.9m、梁間1.65mを測り、面積は4.8m<sup>2</sup>前後であったと考えられる。桁行の柱間は0.9~1.0mで、主軸の方向はN-13°-Eである。B S I 213と重複関係にあり、それより新しい。柱の掘形はほぼ柱の直径の大きさに合せて掘られているようで、深さは検出面から0.3~0.6mある。しかし、掘形底部のレベルは平均してT.P.+1.9m前後のものとT.P.+1.6m前後のものの2通りがあるようで、概してP-2、P-4のように柱根が残るもののはうが深いようである。

#### 出土遺物

〔木器〕（第37図・B 936・B 937）

土器等の出土遺物はなかったが前述のようにP-2、P-4より柱根が出土した。B 936はP-2

から出土したもので現長49.4cm、直径11.0cmを測り、端部はローソク状に尖りぎみに腐蝕している。全体的に雑な加工であり、おそらく自然木に少し手を加えた程度のものと思われる。B937は現長36.6cm、直径10.0cmでB936と同じように自然木に少し手を加えた程度の加工である。

**B S B204** (第34・35図) Bトレンチの南側、B S I 212の東側で検出したが、西側妻部のみを検出したにすぎず、大部分は調査区外である。梁間の規模は2間で1.7mを測るが、桁行については全く不明である。梁間における柱間は等間隔の0.85mを測り、主軸の方向はN-10°-Eである。P-2、P-3には柱根が残っており、またP-1においても柱の痕跡が認められた。それによるとP-1の柱の直径は0.1m前後で、P-2、P-3の柱根とほぼ同じであったと思われる。柱穴の形状は0.3~0.35mの円もしくは楕円形を呈し、深さは側(排水)溝内で検出したため0.05m前後と浅いが、もとは0.4~0.5mの深さはあったものと推定される。

#### 出土遺物

##### 〔木器〕(第37図・B938・B939)

P-2、P-3から柱根が出土した。B938は現長28.4cm、直径10.0cmを測り、底部はほぼ水平にそえられ、上端部は折れた痕跡が認められる。表面の加工はあまり丁寧でない。B939は現長16.0cm、直径9.0cmを測り、底部はB938と同様にほぼ水平にそえられているが、上端部はローソク状に尖りぎみに腐蝕している。(岡本)

第2表 B地区弥生時代前期掘立柱建物一覧表

建物番号	規 模		面積	柱 間 寸 法		主軸方位	群
	梁 行	桁 行		梁 行	桁 行		
B S B201	1間(1.85m)×1間(2.15m)		4.0m <sup>2</sup>	1.85m(平均値)	2.15m(平均値)	N-6°-E	A
B S B202	1間(1.60m)×1間(1.60m)		2.6m <sup>2</sup>	1.60m	1.60m	N-17°-W	B
B S B203	1間(1.65m)×3間(2.90m)		4.8m <sup>2</sup>	1.65m	0.90~1.00m	N-13°-E	C
B S B204	2間(1.70m)×?		?	0.85m	?	N-10°-E	C

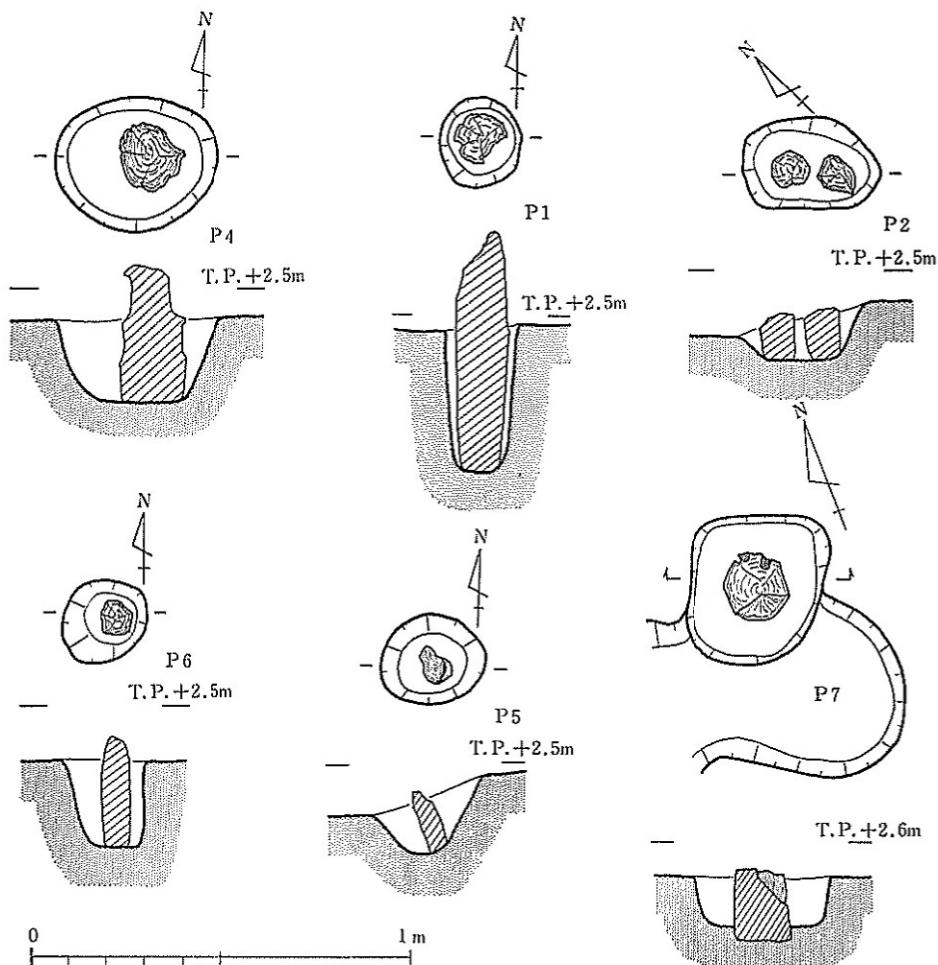
#### C 柵列・杭列

柵及び杭列は確実なもので9条検出した。これらは概して住居や溝に伴なうものが多いようである。

**B S A201** (付図9・第41図) 2 Bトレンチ中央部や南側で検出した、ほぼ東西方向の柵列である。延長は2.5mを検出したのみで、3個の掘形を検出した。掘形内には、どれも柱根が残っており、P-1の柱根などは現長で0.65mも遺存していた。またP-2内には同規模の柱根が2本並存していた。掘形と掘形の間隔は1.25mの等間隔である。なおこの柵列はB S D208と重複関係にあり、これより新しく、B S I 202に伴う可能性がある。

**B S A202** (付図9) 3 Bトレンチで検出した。B S D212に沿って傾斜する地点にあり、おそらくB S D212への土砂流出を防ぐための杭列と考えられるが、痕跡のみで杭そのものは認められなかった。延長は9m以上で南、北は調査区外に続く。杭と杭の間隔は0.8~1.5mを測り、さらにその間の支柱的な杭があったと思われる痕跡が認められる。

**B S A203** (付図9) 5 Bトレンチで検出した。B S D228の東側に沿って設けられた杭列で



第41図 B S A201柱根検出状態及びB地区北側柱根（P 5～P 7）出土ビット実測図

ある。しかし痕跡のみで杭自体は認められなかった。延長4.0m以上あり、北側は調査区外に延び、南側はBNR202によって切られているので断定はできないが、おそらく南側へも続いていたものと思われる。杭と杭の間隔は検出された範囲内では0.6～0.9mを測る。遺構面が黄色砂をベース層としているため、流出が著しかったと考えられ、BSD228を流出土から防護するための杭列であったと思われる。

**B S A204**（付図9） Bトレンチ中央部BSD224の東側肩部で検出した。延長3m以上の南北方向の杭列で、3個のピット（杭穴）を検出し、その内中央ピットには杭の一部が残っていた。枕と杭の間隔は1.5mと等間隔である。この杭列もおそらくBSD224に対して土砂の流入を防ぐためのものであろう。

**B S A205**（付図9） Bトレンチ中央部、BSD232の北側で検出した。ほぼ東西方向の杭列でBSD232に平行に走る。延長は3.2m以上で東側は調査区外に延びる。杭の遺存は認められなかったが、杭の痕跡を残すピットが6個検出された。杭と杭の間隔は0.6～0.7mを測る。この杭列の用途は不明であるが、BSD230・231と重複しており。これらより新しく、BSD232とほ

同時期であり、かつ平行に走るということから B S D232 と何らかの関係があるものと思われる。

**B S A206** (付図9) Bトレンチの南側、B S D242の北側で検出した。東西方向の柵列で、B S D242にはほぼ平行に走り、延長6.0mを検出した。西側は調査区外に延びる可能性が考えられるが、東側については不側である。ただ7B地区でそれの延長上と考えられるところで柱穴状のピットを検出した。柱間は1.2~2.0mを測り、東端の柱穴には直径0.15mの柱根が残っていた。方位はW-20°-Sである。この柵列はB S D244と重複しており、これより新しくB S D242とはほぼ同時期と推定される。おそらくB S D242と共にC住居跡群を画するための柵列であった可能性が強い。

**B S A207** (第34・35図) Bトレンチ南側で検出した南北方向の柵列である。延長は7.5mで、12の柱穴を検出した。P-3には長さ20cm、直径10cmの柱根が残っており、柱穴の深さは若干の浅い深いはあるが、底部はほぼT.P.+2.0m前後で一定している。柱間は0.7~0.9mを測る。この柵列はB S I 206・207・212と重複しており、これらの住居よりも新しくC住居跡群中最も新しい遺構の1つである。柵列の方向及びその位置からB S I 208、もしくはB S I 211に伴う可能性がある。P-1より前期及び中期初頭の土器片が出土した。(岡本)

#### 出土遺物

##### 〔土器〕(第122図)(P.138)

総点数3点の土器片が出土したにすぎない。第Ⅰ様式と第Ⅱ様式土器が混在する。抽出した壺蓋は第Ⅱ様式のものである(B136)。円盤形で、上面に櫛描きの斜線文がみられる。(井藤)

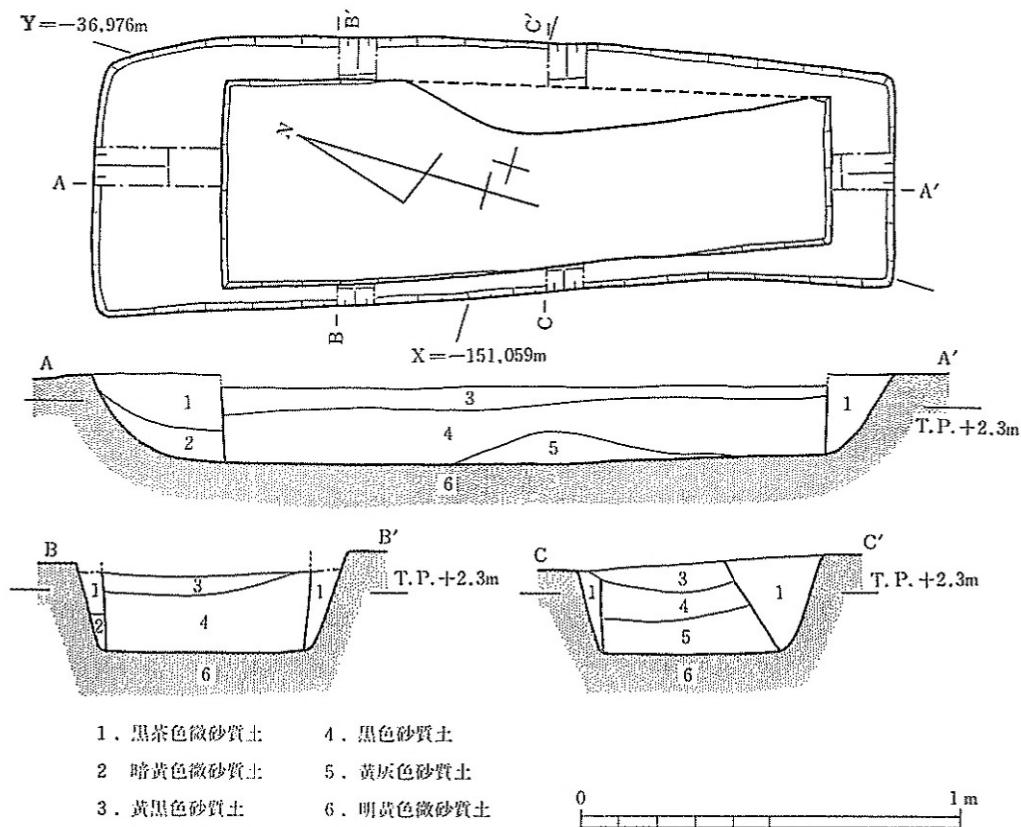
**B S A208** (付図9) Bトレンチの南側で検出した東西方向の杭列である。延長4.0mを検出し、西側はさらに調査区外に延びる可能性がある。杭は西から2本目が残っており、他は痕跡のみのピットである。杭と杭の間は一定していない。用途は不明である。

**B S A209** (付図9) Bトレンチの南側で検出した東西方向の杭列である。延長5mを検出したが、東西にはこれ以上延びないようである。杭は全く残っておらず、痕跡のピットを6個検出したのみである。杭と杭の間は一定しておらず、用途は不明である。(岡本)

#### D 墓

B地区で検出した墓には木棺墓1と土壙墓2がある。これらはBトレンチのほぼ中央部で検出され、向きも南北方向とほぼ同一方向を向いている。また、確実な方形周溝墓は検出されなかつたがB S D201がその可能性がある。しかし、断定資料が少ないため、ここではあえて墓とはせずにただの溝として説明することにする。

**B S X202** (第42図) Bトレンチ中央部北西よりで検出した木棺墓である。しかし木棺はすでに腐蝕しており、その痕跡のみを残す。木棺の規模は長さ1.6m、幅は北側木口で0.55m、南側木口で0.4mを測る。深さは検出面より0.23mを測るが、これは削平されているためで従来はもっと深かったと思われる。主軸方向はN-17°-Wである。棺底はT.P.+2.15mでは水平であり、木口の幅より北側が頭位であったと想定される。遺体はすでに腐蝕して消滅し、その痕跡さ



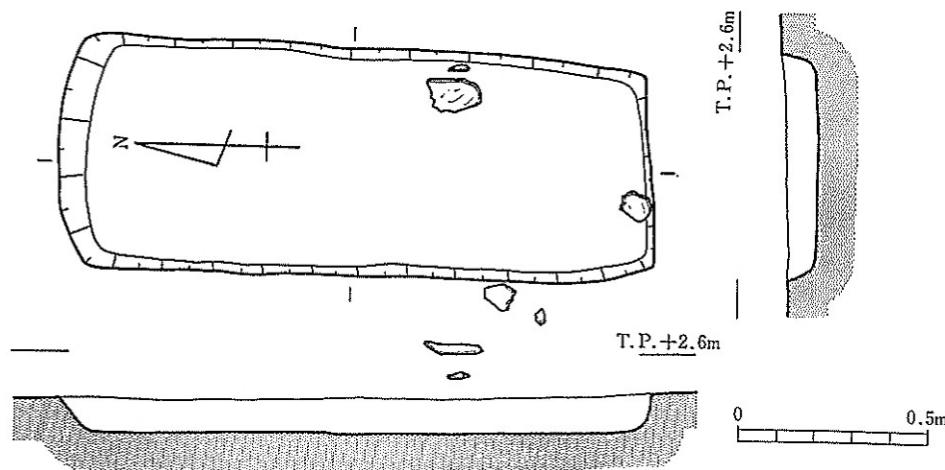
第42図 BS X202実測図

えも認められなかった。木口や側板の状態は不明であるが、おそらく組合式木棺であったと考えられる。東側側板は土圧のため内側に傾斜していたようである。

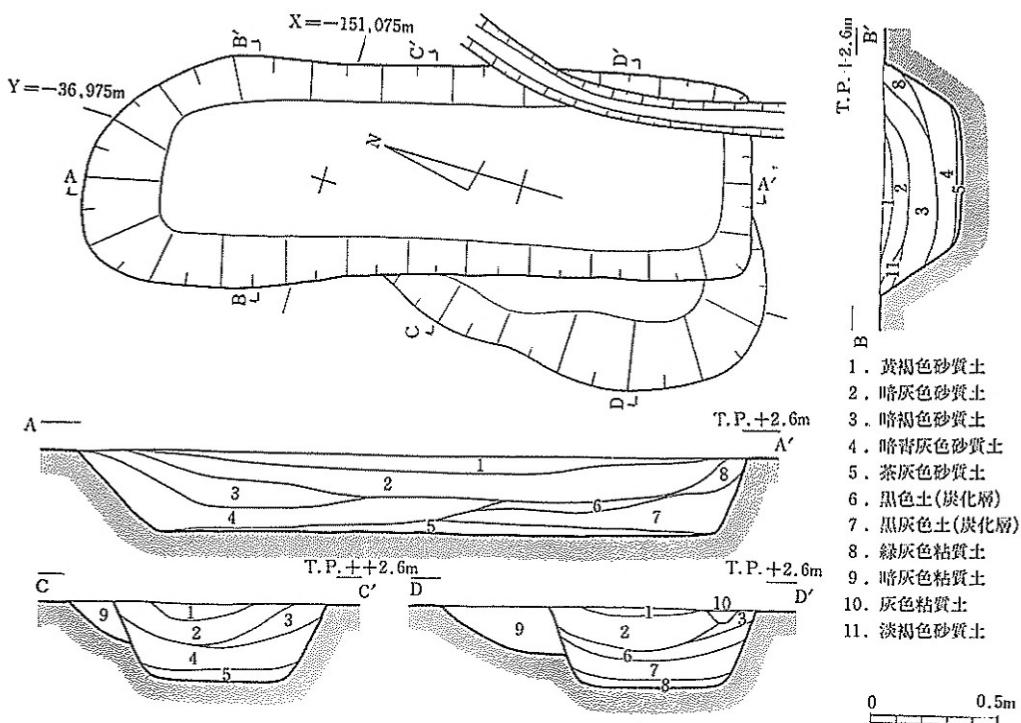
墓壙はあまり大きくなく木棺が丁度入る大きさに掘られている。規模は北側幅0.7m、南側幅0.55m、底部で長さ1.8m、幅0.5~0.55mを測る。平面形は南側の幅がやや狭くなる長方形を呈し、主軸方向は木棺とはほぼ同じである。副葬品や供獻土器は認められなかった。ただ木棺内堆積土中より前期の土器片が少量出土した。なお、この時期の木棺墓は全国でも極めて少なく、大阪府四ツ池遺跡と奈良県坪井遺跡等で知られているにすぎない。<sup>(10)</sup>

**BS X204** (第43図) Bトレンチ中央部北より、BS X202の南側で検出した土壙墓である。規模は長さ1.5m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。平面形はほぼ長方形を呈し、主軸の方向はほぼ南北方向である。底部はT.P.+2.4mではほぼ水平である。埋土は黒色粘質土であるが、上面はかなり削平されているようである。土壙内の出土遺物はないが、上面より前期の土器片が出土している。

**BS X206** (第44図) Bトレンチ中央部南東よりで検出した土壙墓である。規模は長さ2.63m、幅0.7~0.9m、深さ0.3mを測り、平面形は北側が丸味を呈しているが長方形に近い形態を示す。断面は逆台形であり、主軸の方向はN-16°-Wである。底部はT.P.+2.2mではほぼ水平で



第43図 BS X 204実測図



第44図 BS X 206実測図

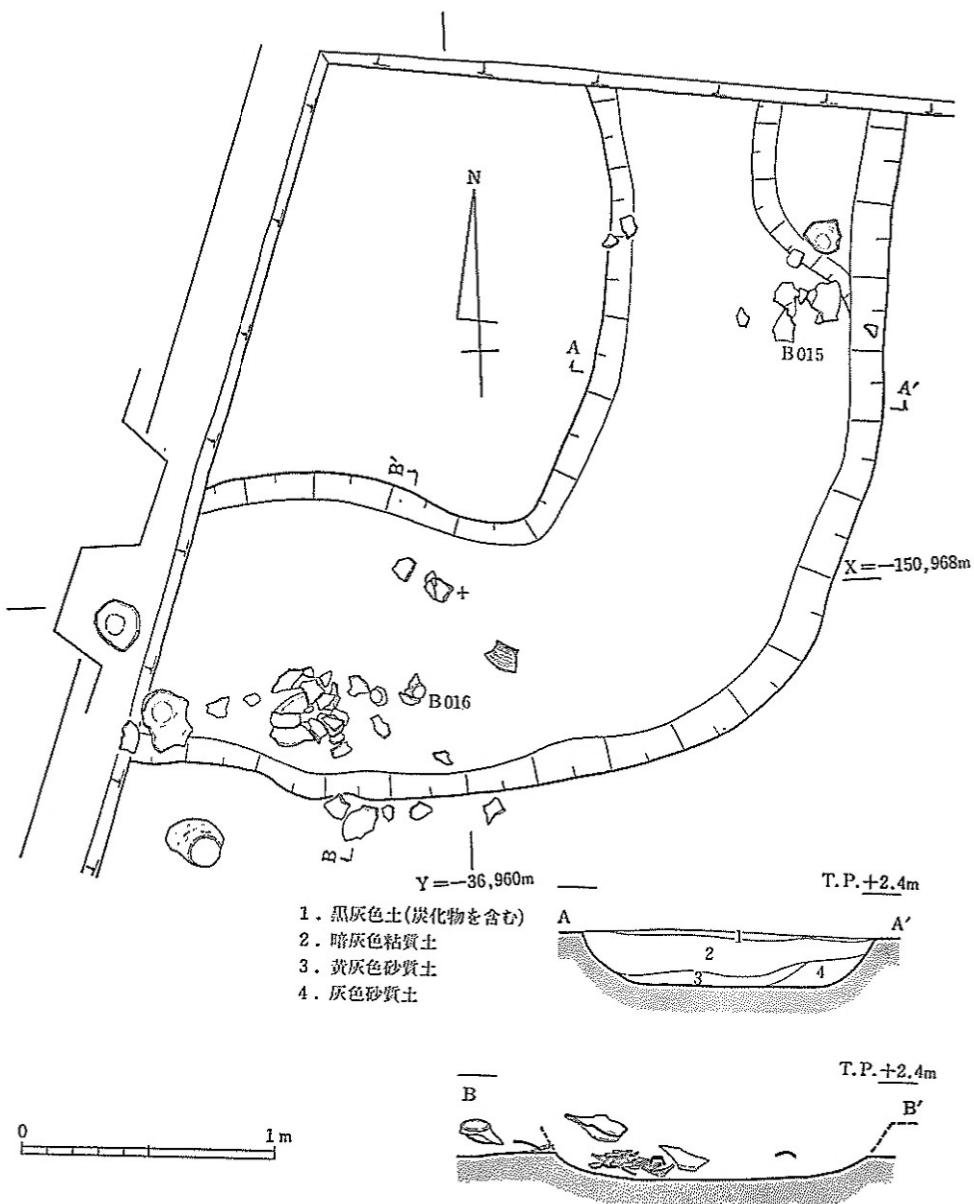
ある。埋土の状況は基本的には9層に分層が可能であった。出土遺物は埋土内より前期の土器片が出土した。(岡本)

第3表 B地区弥生時代前期墓一覧表

遺構番号	墓擴平面形	平面規模(m)	深さ(m)	主軸方向	備考
BS X 202	長方形	2.1 × 0.63	0.23	N-17°-W	木棺墓
BS X 204	長方形	1.5 × 0.6	0.1	N	土壙墓
BS X 206	長方形	2.63 × 0.8	0.3	N-16°-W	土壙墓

## E 溝

溝は全城にわたって多数検出した。これらの溝は南北方向もしくは東西方向に延びるものが比較的多く、遺物も多数出土している。



第45図 B SD 201遺物出土状態及び土層断面図

**B SD 201 (第45図)** Bトレンチ北西角で検出した。東西方向から南北方向に逆L字形に屈折して延びる溝で、西側及び北側は調査区外に延びる。しかし、北接する2Aトレンチでは同溝が検出されていないことから方形周溝墓の南東角の可能性が考えられるが、現段階では断定できない。上幅1.1~1.3m、下幅0.9~1.0m、深さ0.22mを測り、断面U字形を呈する。埋土は4層に

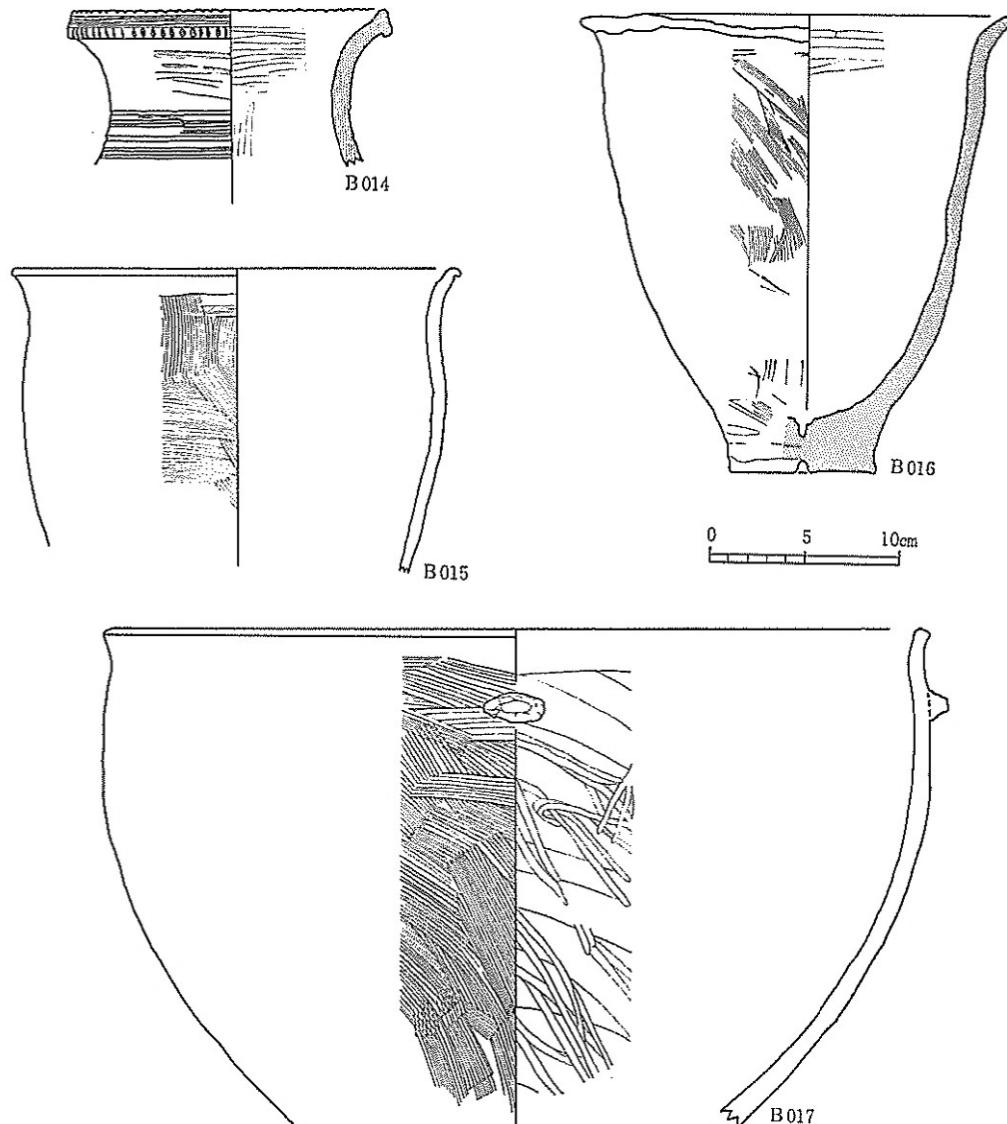
分層でき、概して上層は粘質土、下層は砂質土である。遺物は、前期～中期初頭の土器と石器が出土した。(岡本)

#### 出土遺物

##### 〔土器〕(第46図)

総点数 230 点を数える土器片が出土した。第Ⅰ様式と第Ⅱ様式土器が混在し、うち 7 点に櫛描文様がみられる。第Ⅰ様式鉢 1 点 (B 017)、第Ⅰ様式甕 2 点 (B 015・016)、第Ⅱ様式壺 1 点 (B 014) を抽出した。

第Ⅰ様式鉢は如意形口縁をもち、装飾をもたない大型品である。頸部に指掛けがつく。甕 2 点についても如意形口縁・倒錐形体部の装飾をもたないものである。内外面に範磨調整を加え、底



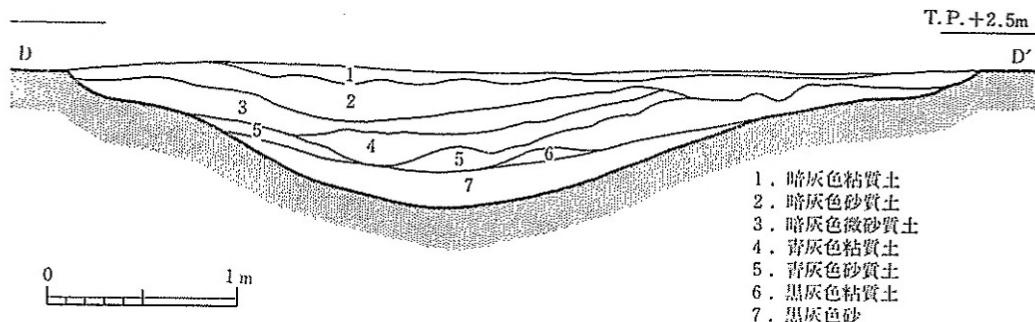
第46図 B S D 201出土土器

部に穿孔中の痕跡がみられるもの（B016）、頸部から口縁端部に至る曲線からみれば、むしろ第Ⅱ様式といつてよいようなもの（B015）がある。第Ⅱ様式壺は口縁部の開きが少なく、頸部も短い形態をもつものである。口縁端部に刻目、櫛描直線文、刻目、頸部には1本の籠描沈線文と1条の櫛描直線文を交互に配す。頸部文様は和泉地方の地域性を示す、いわゆる「籠櫛併用文様ⅡA（付加条をもつ櫛描文様）」である。ただし、生駒西麓産の胎土をもっている。（井藤）〔石器〕（第75図・B898）

石槍が1点出土した（B898）。ほぼ完形で長さ12.6cm、幅3.0cm、厚さ1.1cmを測る。A面先端部に大剣離面を残し、全体にフリー・フレイキングを施す。先端部両側縁はトリミングを施す。材質はサスカイトで刃潰れは認められない。

**B S D202（付図9）** Bトレンチ北側中央部で検出した。南北方向の溝であるが、全体的にカーブを呈し、北側はB SK202に切られ、南側は袋状に終る。幅は0.3~1.0m、深さ0.15mを測り、延長7.5mを検出した。埋土は暗灰色粘質土で、遺物は全く出土しなかった。

**B S D203（第47図）** Bトレンチから2Bトレンチにかけて検出した。南東方向から北西方向に延びる溝で南東側は非常に浅くなり最後は袋状に終る。北西側は調査区外に延びる。幅は一定していないが、最も広いところで5.5mを測る。深さはBトレンチの西側が最も深く、0.8mを測り、その部分の埋土は7層に分層できた。北西側はB S I 202、B S D208と重複しており、それよりも古い。遺物は前期の土器片と中期初頭の土器片が少量出土した。



第47図 B S D203土層断面図（実測地点は付図9参照）

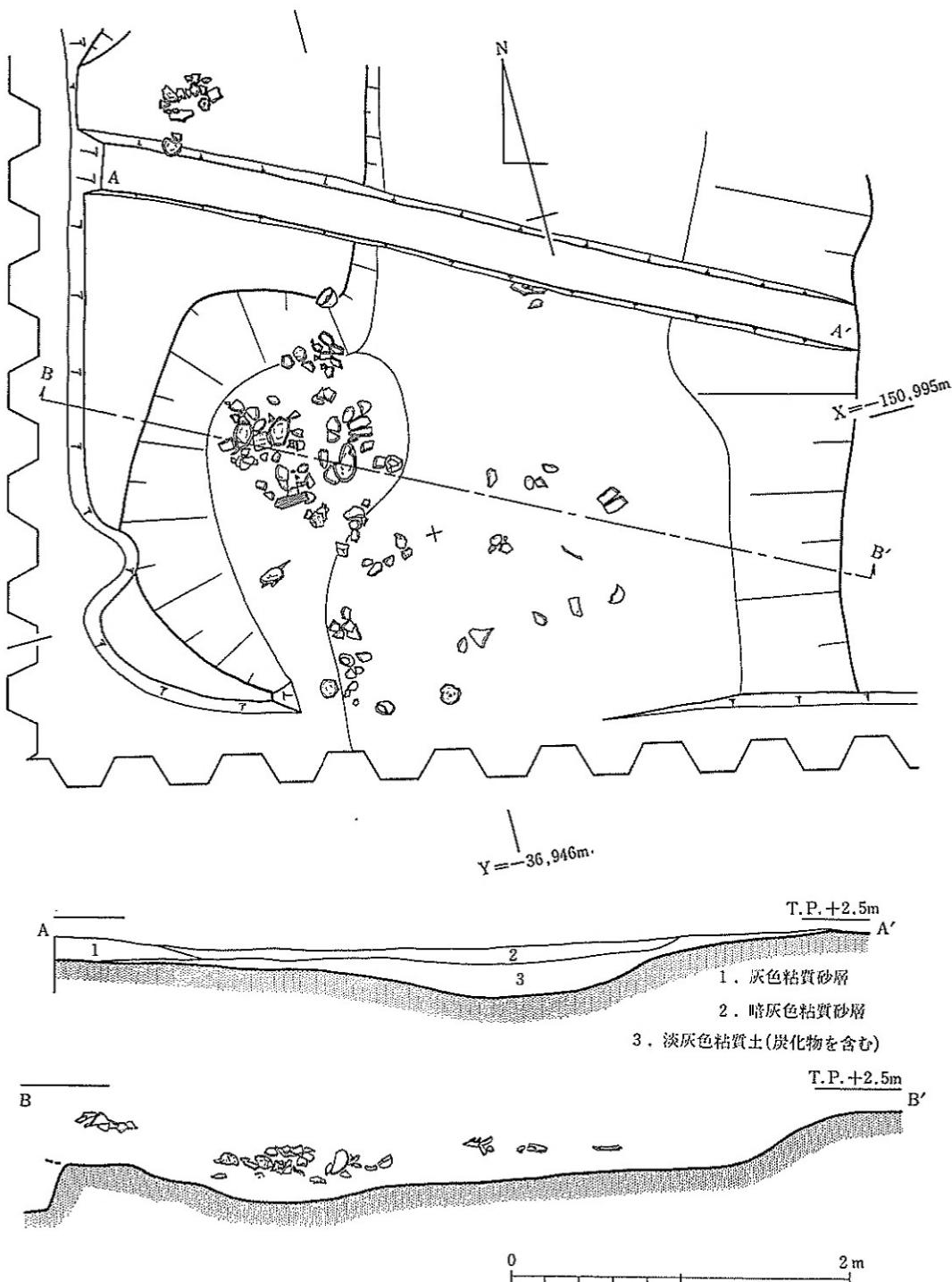
**B S D204（付図9）** 1Bトレンチ中央部で検出した東西方向の溝である。延長6.0mを測出し、東側は調査区外に延びるが西側は袋状に終る。しかし、その方向及び埋土の状況よりもとはB S D203と接続していた可能性がある。幅0.9~1.2m、深さ0.1mを測り、埋土は黒色炭化土の単純層である。遺物は前期の土器片及び石器が出土した。

#### 出土遺物

〔石器〕（第75図B903）

扁平片刃石斧が1点出土した（B903）。ほぼ完形で平面は基部が若干丸味を呈した長方形である。長さ7.5cm、幅3.2cm、厚さ0.8cmを測り、断面は中脇みの長方形を呈する。表面は丁寧に研

磨されているが、裏面に2次的敲打痕が認められ、その折の刃潰れが残るが、使用時と考えられる刃潰れは認められない。



第48図 B S D205遺物出土状態及び土層断面図

BS D205 (第48図) 1 Bトレンチ南側で検出した。南側はBS D212と接続し、一連の溝と

考えられるが、溝幅が広くなり落込み状を呈する。これはこの部分が集水施設的機能を有し、さらにそこから北側のB S D206に接続するためと思われる。幅は5.5m前後で、深さは0.3~0.5mを測り、埋土は3層に大別できる。遺物は前期の土器多数と木製品が出土したが、これらは、この溝が埋る段階で廃棄されたものと考えられる。なお、東側肩部に小ピットが並列しており、4 BトレンチのB S A202と一連の杭列であった可能性がある。

**B S D206**（第52図） 2 Bトレンチ北側で検出した南北方向の蛇行した溝である。南側はB S D205に接続し、北側は調査区外に延びる。幅は1.3m前後で、深さは0.2mを測り、埋土は2層に分れる。B S D204と重複しており、それより古い。遺物は前期の土器片が少量出土した。

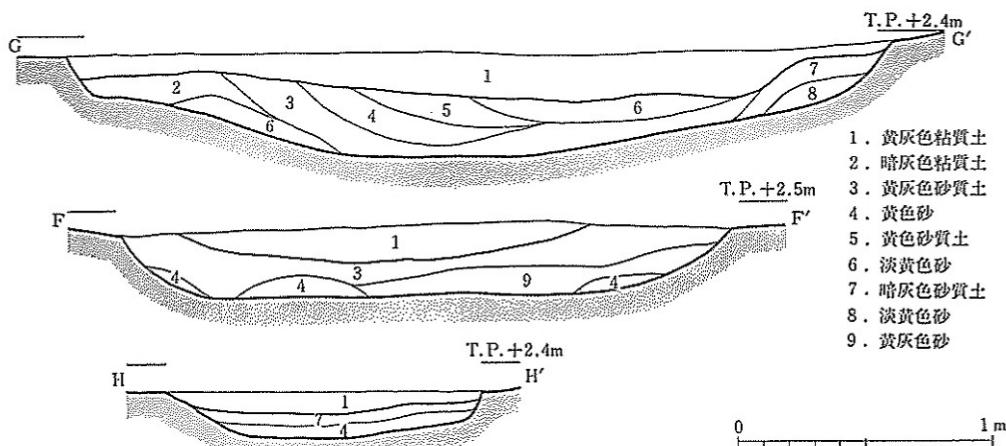
**B S D207**（付図9） 2 Bトレンチで検出した。南西方向から北東方向に延びる溝で、両端は調査区外に続くが、特に南西側は4 BトレンチのB S D215と接続する可能性がある。幅は北東側に行くほど狭くなるが平均して0.7m前後で、深さは0.2mを測る。埋土は暗紫褐色粘土の単純層である。南側でB S D209が枝状に分かれ、B S D203・B S I 202・203と重複しており、B S D203より新しく、B S I 202・203より古い。遺物は前期土器片と石器が1点出土した（B 904）。

#### 出土遺物

##### 〔石器〕（第75図B 904）

砥石が1点出土した（B 904）。片側面及び端部の一端を欠く。現長8.4cm、幅5.6cm、厚さ（最も厚いところ）3.5cmを測る。使用面は4面で、強い擦痕が残り凹面を呈するが、特に実測図平面側はそれが著しく、斜めに傾斜して、一方は非常に薄くなっている。

**B S D210**（第49図） Bトレンチの北側で検出した東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。幅は一律でなく中央部が最も広く4.2mを測り、東側に行くほど狭くなる。深さも同じで中央部が最も深く0.5mを測る。埋土は上下2層に大別でき、さらに下層はいくつかに分層できる。上層は粘質土、下層は砂質土である。東側でB S D212と重複しており、これより新しい。出土遺物は前期の土器と少量の中后期初頭の土器片が出土する。



第49図 B S D210土層断面図（実測地点は付図9参照）

B S D211 (付図9) Bトレンチの北側、B S D210の南側で検出した。東西方向から南北方

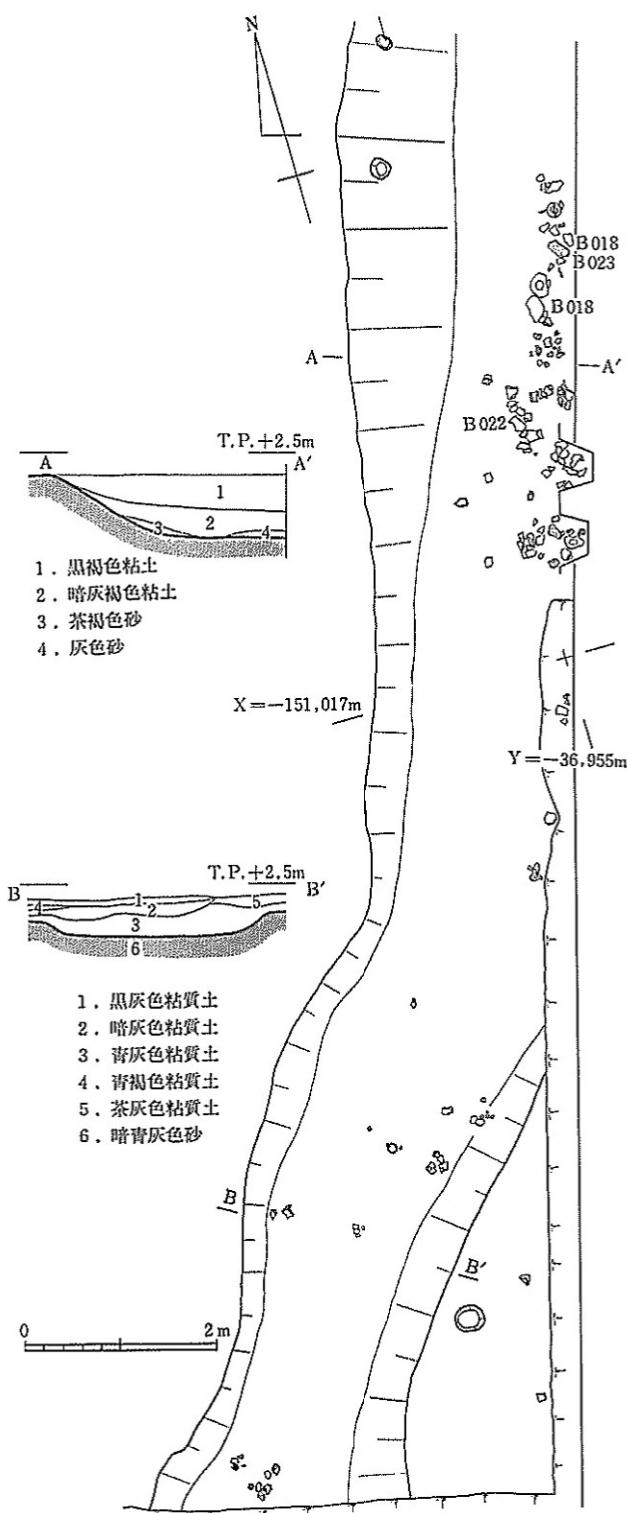
向に逆L字形に屈折した溝で、南端は袋状に終り、西側は調査区外に延びる。幅0.5m、深さ0.1mを測り、埋土は暗灰色微砂質土で、遺物は全く出土しなかった。

B S D212 (第50図) Bトレンチの中央部から北側にかけてトレンチの東側に沿って検出した。延長35mを測り、南側はB S D220に、北側はB S D205に接続する。幅は南側が狭く1.0~1.3m前後を測り、北側に行くほど広くなるが、北側の大半は東側肩部が調査区外であるために溝幅は明確でない。ただ3 Bトレンチ北西角で唯一東側肩部を検出し、その部分の溝幅は2.6mを測ったため、それより北側ではそれより若干広い程度と考えられる。深さも南側では浅く0.15m前後であるが、北側に行くと0.7m前後となりかなり深くなる。埋土の状態も南側と北側では異なり、南側は粘質土、北側では粘土である。出土遺物は前期の土器とそれに混って若干の中期初頭の土器及び木製品が出土した。(岡本)

#### 出土遺物

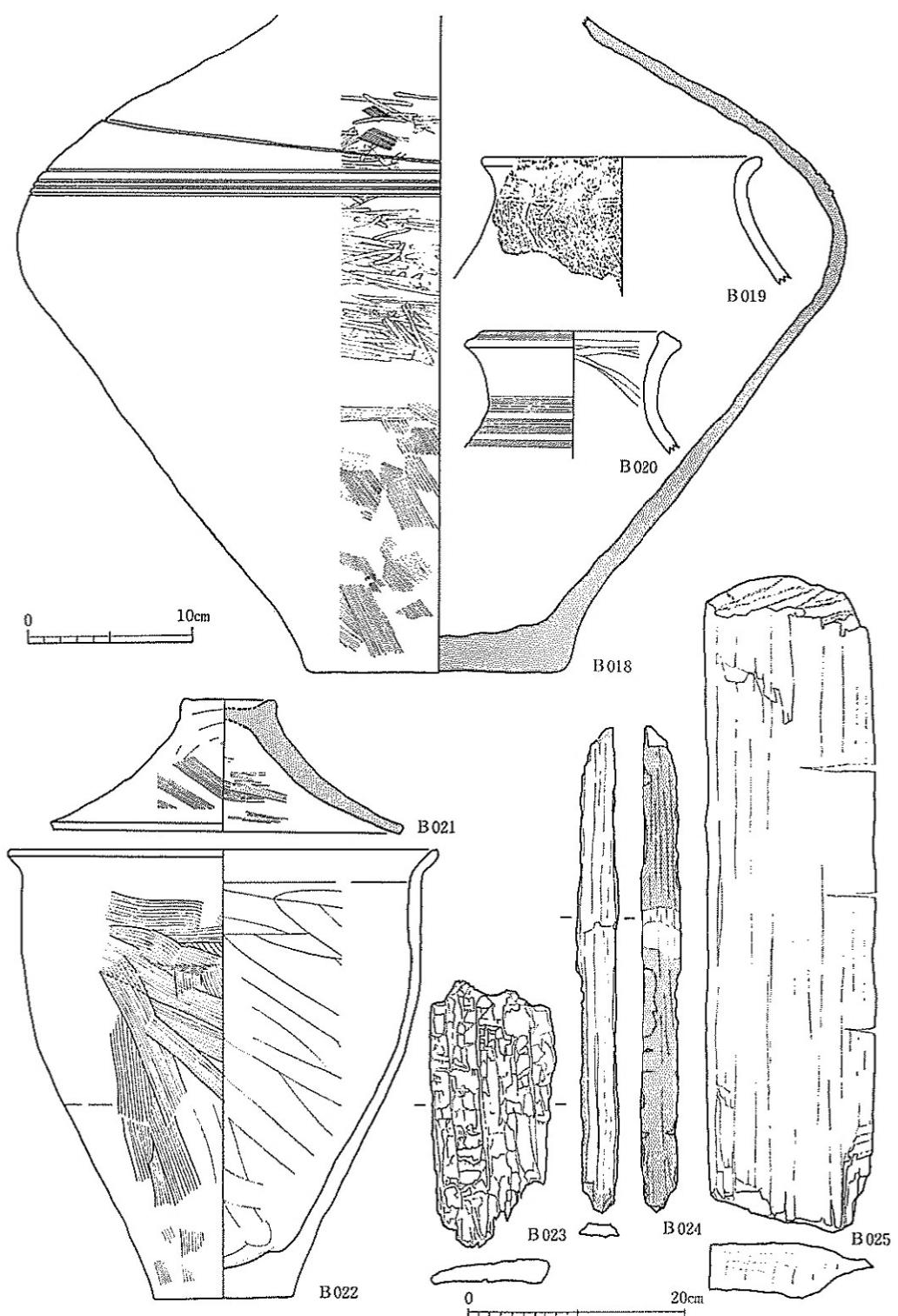
##### 〔土器〕(第51図)

総点数1700点余を数える土器片が出土した。第Ⅰ様式と第Ⅱ様式土器が混在し、うち50点余に櫛描文様がみられる。第Ⅰ様式壺2点(B018・019)、甕1点(B022)、甕蓋1点(B021)、第Ⅱ様式壺1点(B020)を抽



第50図 B S D212遺物出土状態及び土層断面図

出した。



第51図 B S D212出土遺物

第Ⅰ様式壺の1点は口縁部が欠失しているが、体部が大きく脹らみ、かつ丈高の大型品である（B018）。体部に施された沈線文5条のうち1条が逸脱して描かれることになってしまったのは珍しい。甕は装飾をもたないものである。外面頸部以下、横ないし右下り斜方向の刷毛目調整が施されるものは少數見受けられる。第Ⅱ様式壺は口縁上端部が斜方向に肥厚し、口縁部の開きも少なく、頸部も短いものである（B020）。美園遺跡出土第Ⅱ様式壺の中で特異な形状を示す1点である。口縁端部に1条の横描直線文、頸部にも横描直線文をつらねる。（井藤）

#### 〔木器〕（第51図）

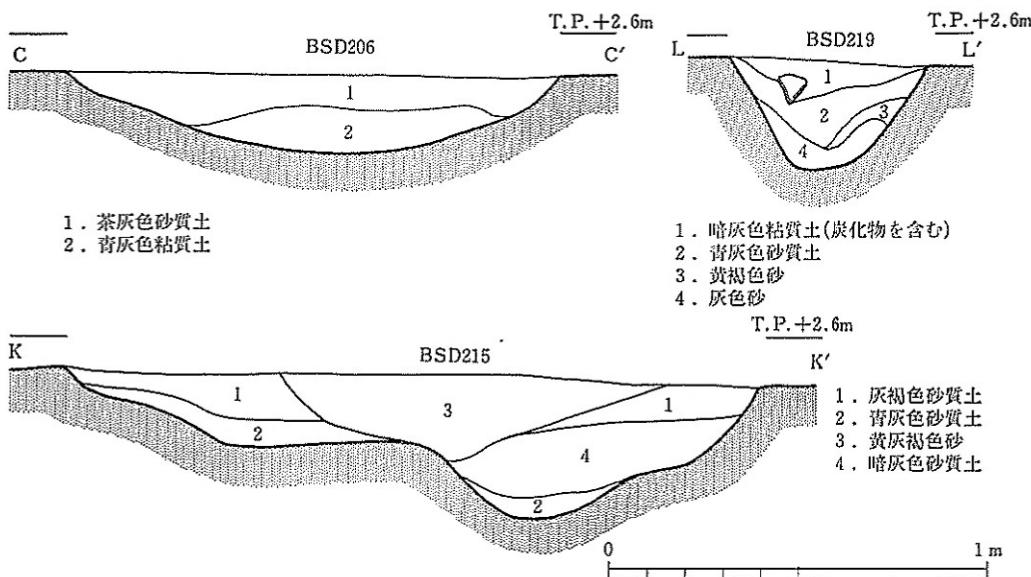
板状木製品が3点出土した。B023は片側面のみ現形をとどめているが他の部分は欠損している。現長24.4cm、幅11.2cm、厚さ1.8cmを測る。両面には粗雑であるが削った痕跡が認められる。B024は両側縁及び両端が欠損するが、現長44.6cm、幅3.6cm、厚さ1.0cmを測り、両面は柾目に沿って削られた痕跡が認められる。また表面は火を受けており炭化状を呈する。B025は長さ59.6cm、幅15.2cm、厚さ5.0cmを測るが、片側面を欠き柾目に対して垂直の亀裂が入っている。表面全体は比較的丁寧に削られている。

**B S D215（第52図）** 4Bトレンチ東側で検出した南北方向の溝である。B S D222と一連の溝で南側で接続するものと思われ、北側は調査区外に続く。幅は1.0～1.3mを測り、東側がテラス状になった2段掘りの溝である。最も深いところで0.4mを測る。北側にB S D214が接続する。埋土は砂もしくは砂質土で遺物は前期の土器と若干の木製品が出土した。

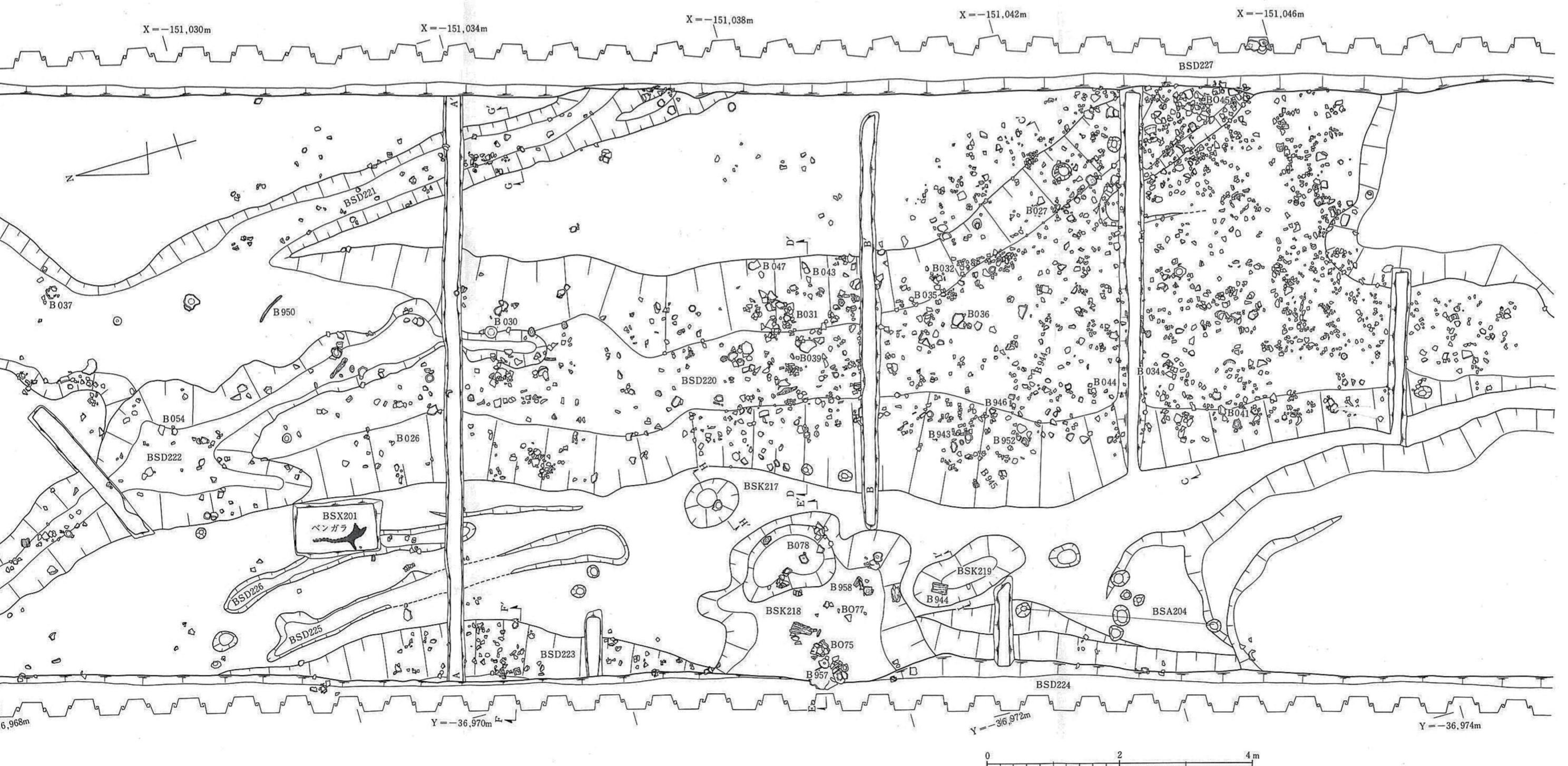
#### 出土遺物

#### 〔木器〕（第71図・B954）

木製容器が1点ある（B954）。上端を欠き底部のみであるが、ラッパ状に開く容器と考えられる。底部は尖底ぎみで、現高6.0cm、器厚は1.0cmを測り、内側は削られたものである。表面全体に火を受けた痕跡が認められる。材質はケヤキである。



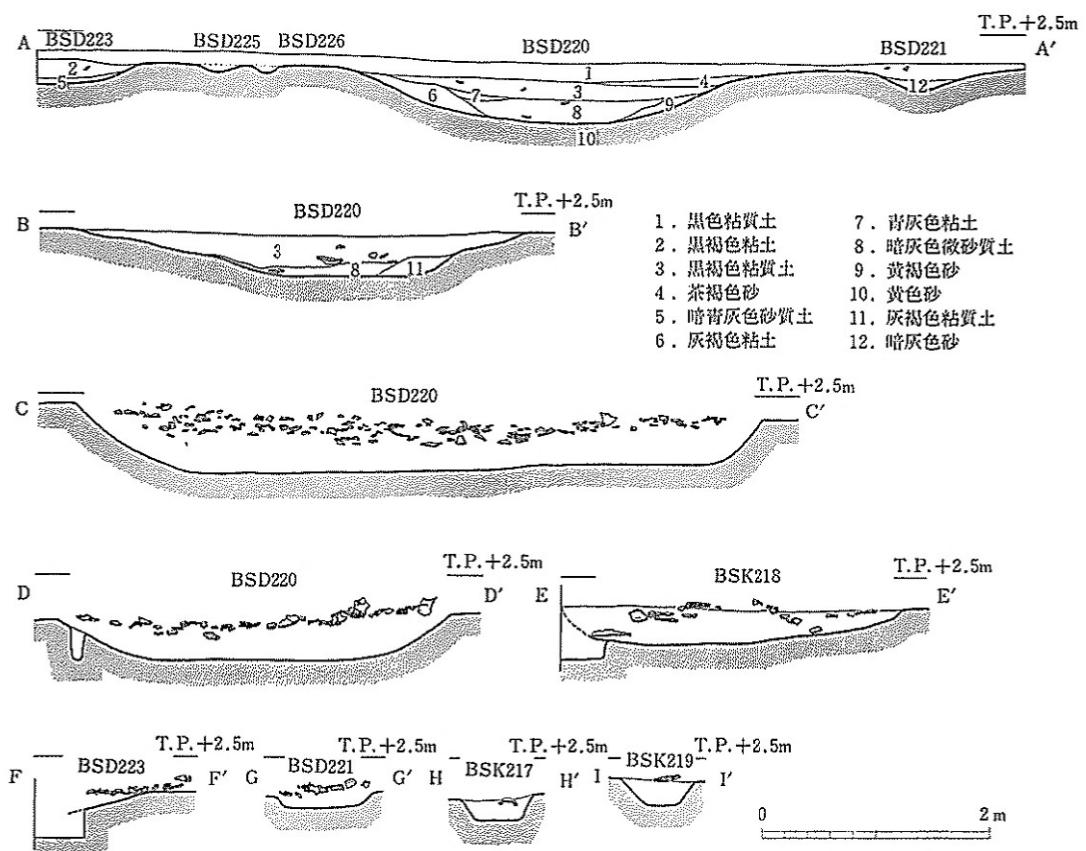
第52図 B S D206・215・219土層断面図（実測地点は付図9参照）



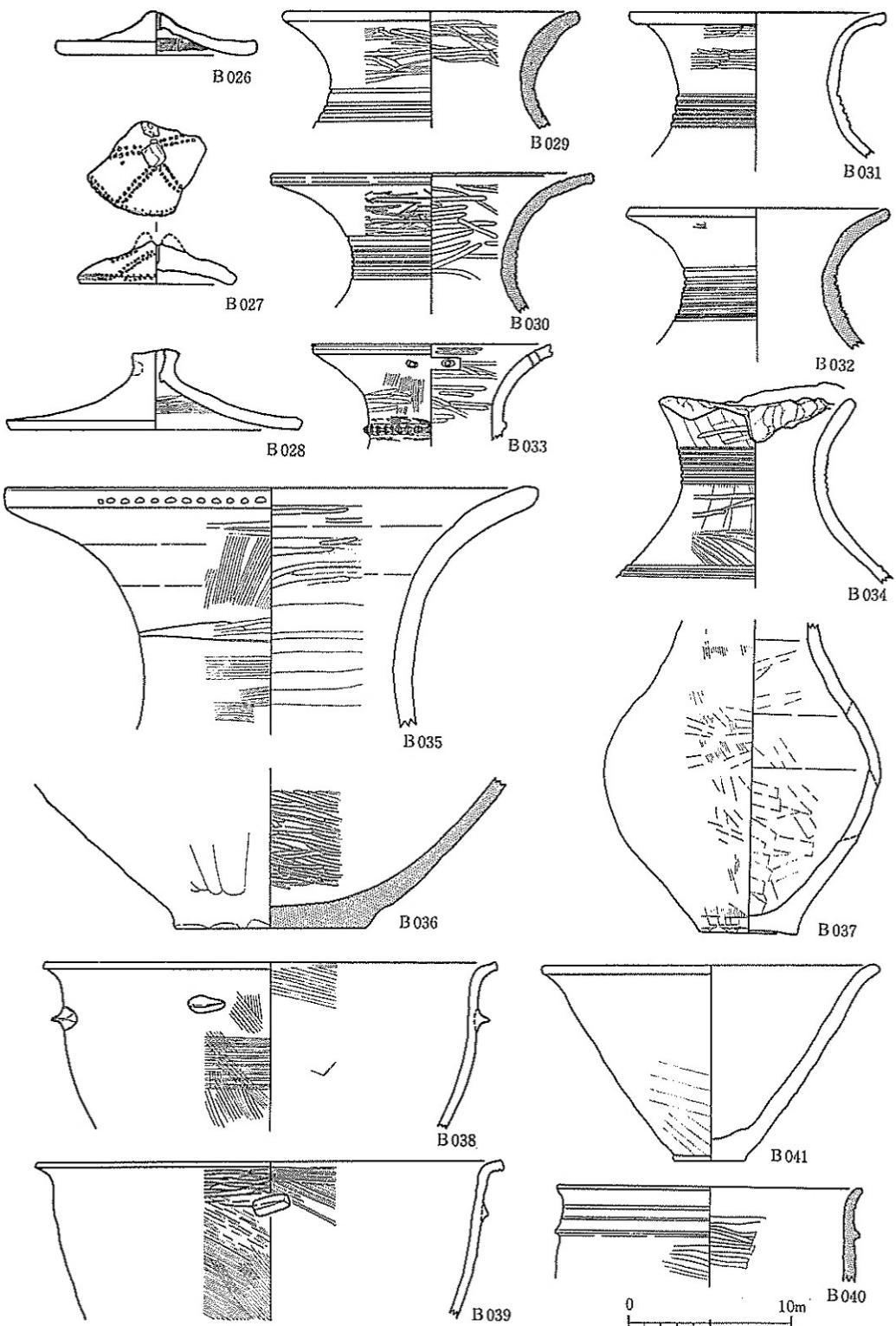
**B S D216～218（付図9）** 4 Bトレンチで検出した。3溝はつながっており、B S D216とB S D218は東西方向、B S D217は南北方向の溝である。深さはB S D216が最も深く0.35mを測り、断面V字形を呈する。他溝は0.1～0.2m前後の深さで、埋土は暗紫褐色粘質土である。遺物は前期の土器片が少量出土した。

**B S D219（第52図）** 4 Bトレンチ北西側で検出した東西方向の溝である。西側は調査区外に延び、東側は袋状に終る。幅は西側に行くほど狭くなるが、平均0.8m前後で、深さ0.3mを測る。埋土は上層が粘質土、下層が砂質土で、前期の土器が出土する。

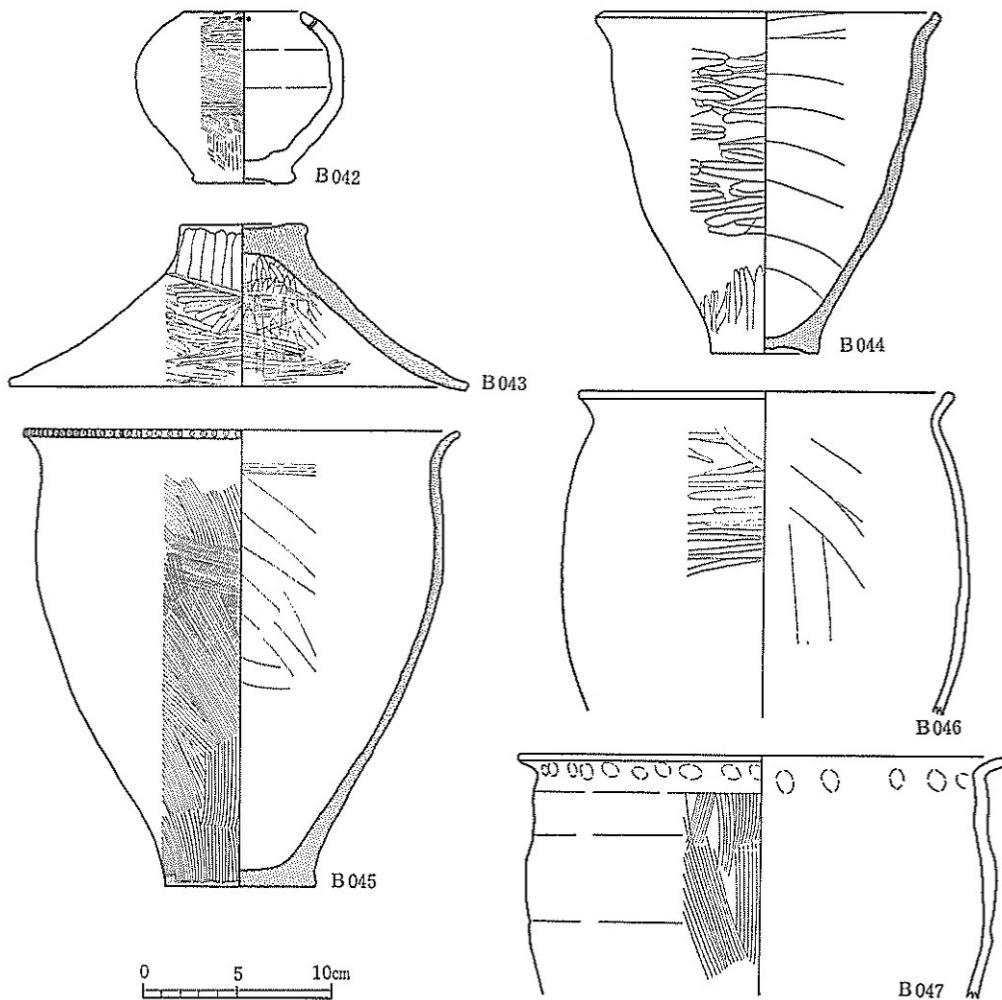
**B S D220（第53・54図）** Bトレンチ中央部やや北よりで検出した。ゆるやかなカーブを呈しながらトレンチ中央部を南北に走る溝である。延長23mを検出し、南側は上層のB N R202によって切られているが、B S D230がその延長と考えられる。北側はY字状にB S D212とB S D222とに分れる。またB S D221とB S D227が東側で合流する。上幅3.5m、下幅1.0～2.0m、深さは幅に比して浅く0.35mを測り、断面U字状を呈する。埋土は各地点によって異なるが、大きくは粘質土と微砂質土の上下2層に大別できる。西側肩部には杭がいくつか遺存し、さらに杭痕と思われるピットも存在することから溝内への流出土を防ぐための杭列的なものがあった可能性がある。出土遺物は大量の前期土器とそれに混在して少量の中後期初頭の土器及び石製品、木製品が



第54図 B S D220及び周辺遺構断面図（実測地点は第53図参照）



第55図 B S D 220出土土器 (1)



第56図 B S D 220出土土器 (2)

出土した。特に土器は最も多く出土し、B地区出土土器の半数はここから出土したものである。しかし、これらの土器には完形品は少なく、すべて破片ばかりであり、溝の上層から多く出土していることから、おそらく、この溝が埋没する段階で投棄されたものと考えられる。(岡本)

#### 出土遺物

##### 〔土器〕(第55・56図)

総点数 13000 点弱の土器片が出土した。第Ⅰ様式と第Ⅱ様式土器が混在し、うち60点弱に横描文様がみられる。第Ⅰ様式壺 8 点 (B029~035・037)、無頸壺 1 点 (B042)、鉢 3 点 (B038・039・041)、壺蓋 3 点 (B026~028)、甕蓋 1 点 (B043)、甕 5 点 (B040・045~047)、壺底 1 点 (B036) を抽出した。

第Ⅰ様式壺の頸部には削出突帯をもつもの (B031)、貼付突帯をもつもの (B033) がある。また、口縁部を意図的に欠き割ったもの (B034) もある。無頸壺は 2 孔一組の紐孔をもつ小型品である。鉢はいずれも如意形口縁をもつもので、2 点に指掛けがみられる (B038・039)。な

お、指掛けはB038が示すように等間隔に2個以上付くものが多い。甕は、頸部に2条の沈線文と1条の貼付突帯を巡らすものがある（B040）。口縁端部にのみ刻目をもつもの（B045）の他に、全体的にやはり装飾文様をもたない甕が主流を占めている。（井藤）

#### 〔石器〕（第57図）

石器には打製と磨製がある。打製石器には石鎌、石槍、不定形刃器があり、磨製には石庖丁、棒状石製品がある。

**石鎌（B881・882）** 円基無茎式である。B881はほぼ完形で長さ2.7cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmを測り、両面に大剝離面を残し、側縁にはトリミングを施す。B882は基部のみで端部を欠く。現長2.1cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmを測り、両面は大部分が大剝離面のままで、側縁の一部にトリミングを施す。材質はサヌカイトである。

**石槍（B884・885）** B884は石槍の未製品である。A面には自然面、B面には大剝離面を残し、フリー・フレイキングを施す。長さ9.1cm、幅3.4cm、厚さ1.4cmを測る。B885は先端部及び基部を欠く。現長5.6cm、幅2.9cm、厚さ1.2cmを測り、側縁は鋸状を呈する。フリー・フレイキングが主に施されているが、一部にステップ・フレイキングが認められる。材質は共にサヌカイトである。

**不定形刃器（B883・886）** B883は長さ3.6cm、幅3.0cm、厚さ0.4cmの小型品である。B面には大剝離面が残り、フリー・フレイキングとトリミングによって両側縁を刃部とする。刃部には使用痕が認められる。B886は長さ7.6cm、幅4.3cm、厚さ1.7cmを測り、フリー・フレイキングとステップ・フレイキングを加えることによって刃部を作る。刃部には使用痕が認められる。材質は共にサヌカイトである。

**石庖丁（B888・886）** B888は端部のみの破片であるが、直線刃半月形態である。刃部は両刃であり、刃潰れが著しい。B889は体部の一部である。

**棒状石製品（887）** 両端部を欠く。現長9.5cm、幅2.8cm、厚さ1.9cmを測り、断面は梢円形を呈する。表面は丁寧に研磨されているが、使用痕が認められる。ハンマー・ストーン的なものと考えられる。材質は結晶片岩である。（岡本）

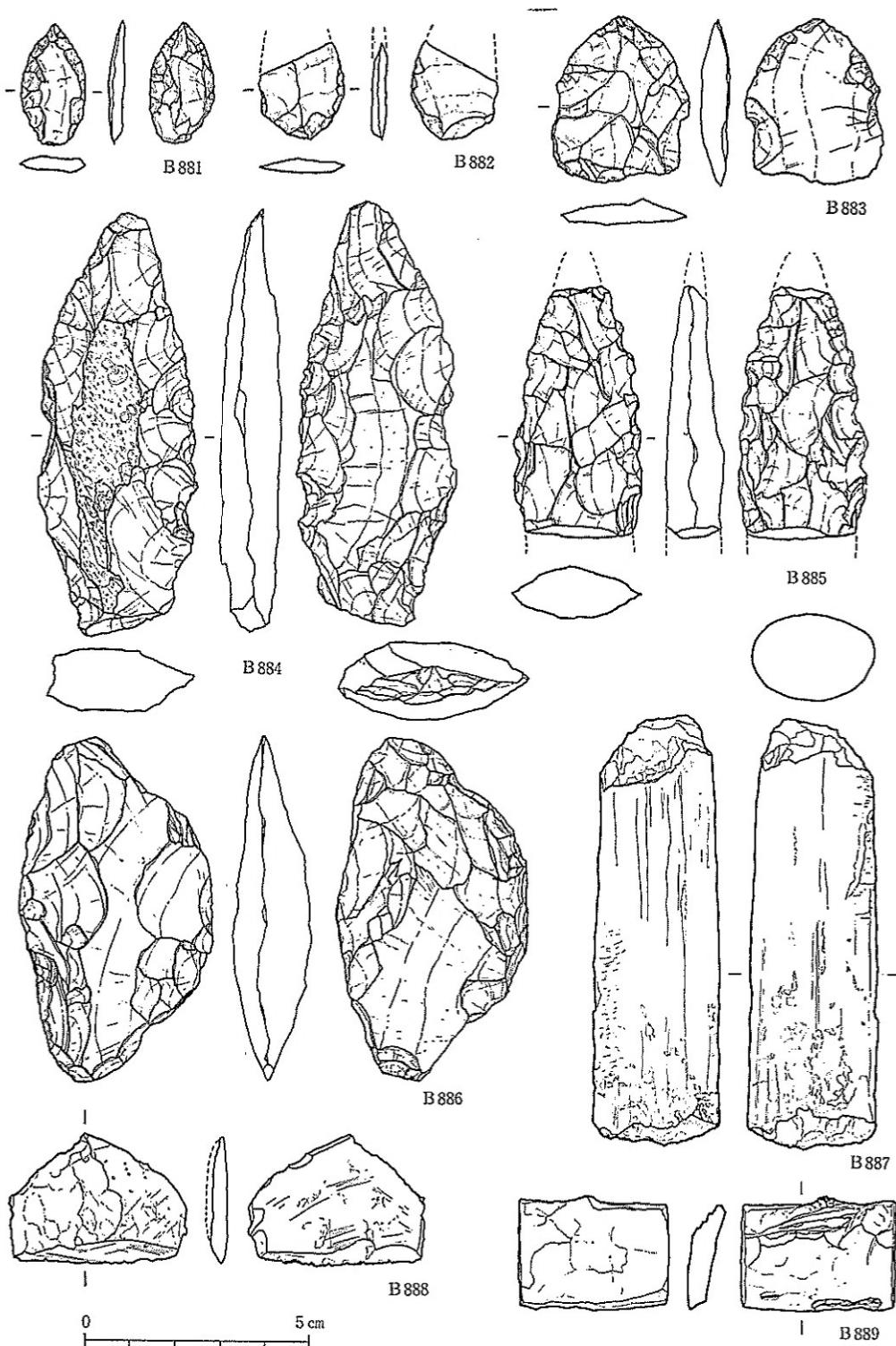
#### 〔木器〕（第58図）

木器には鍬、容器、弓、板状木製品、柱根状木製品等がある。

**鍬（B947・948）** B947は縦に刃を欠く狭鍬である。現長16.3cm、幅3.5cm、厚さは最も厚いところで1.8cmを測る。全体に磨滅が著しく、刃部上面に紐等を縛りつけた痕跡が認められる。B948は柄を挿入する舟状隆起の一部分である。材質はカシである。

**容器（B949）** 盆状の浅い容器で約1/3を欠く。長径13.0cm、短径11.0cmの梢円形を呈し、底部は平底である。材質はヤマグワである。

**弓（B950）** 一端を欠くが、現長44.0cmの短弓である。断面は径1.6cmの円形に近い多角形を呈する。表面全体は鋭利な工具によって丁寧に削られ整形されている。また2次的ではあるが、

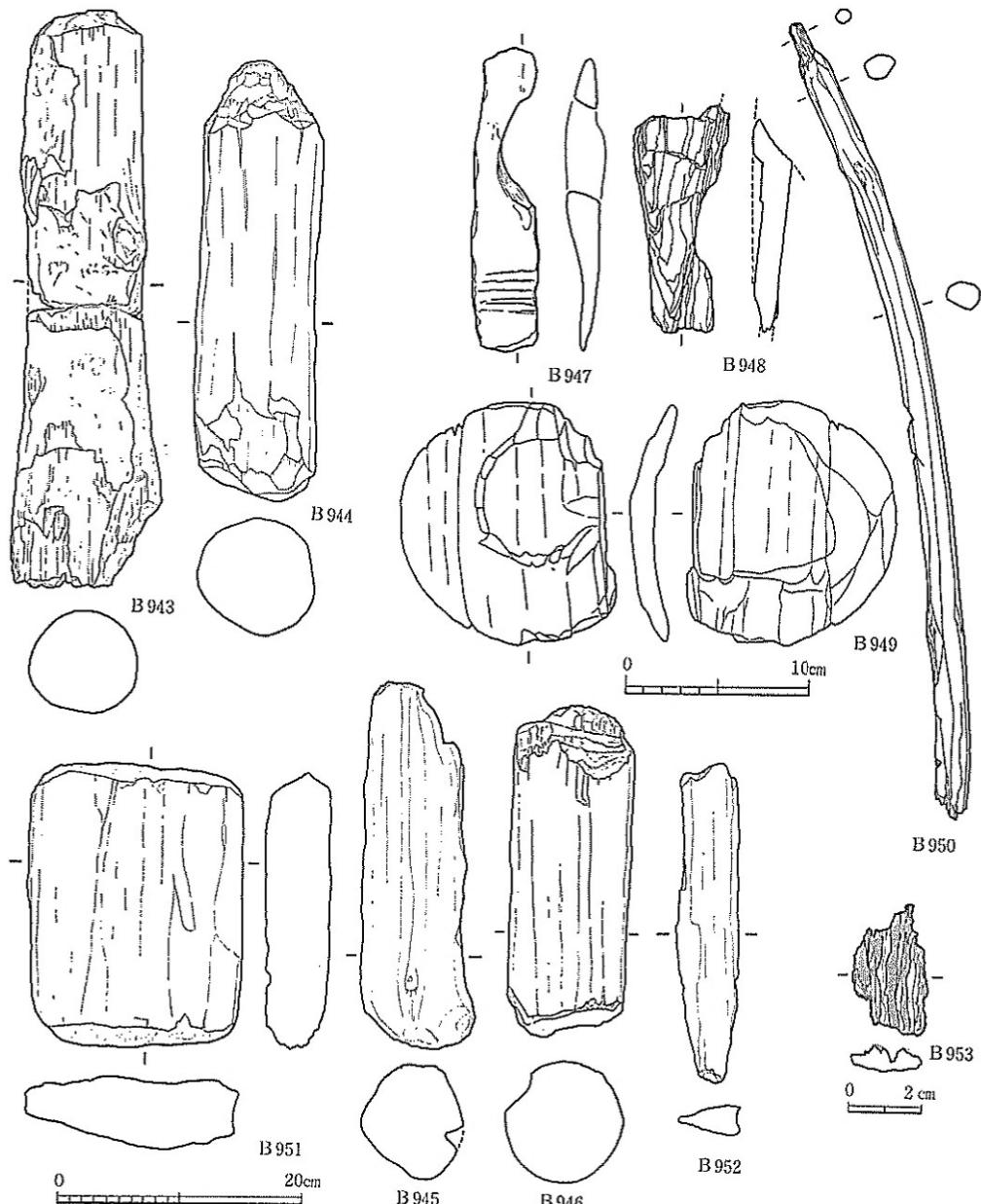


第57図 B S D 220出土石器

明らかに金属器の使用と考えられる切込みが認められる。弓笛は長さ2.0cm、径0.8cm、断面円形で突起状に作り出している。材質はカヤ(茅)である。

**板状木製品 (B 951・952)** B 951は長さ23.2cm、幅17.2cm、厚さ5.4cmの平面長方形を呈したほぼ完形品である。表面は柾目に沿って丁寧に削られている。礎板の可能性も考えられる。B 952は破片であり、現長26.0cm、幅5.0cm、厚さ2.2cmを測る。

**柱根状木製品 (B 943～B 946)** B 943は溝の西侧肩部に遺存していた杭根である。長さ47.0cm、直径9.0cmを測り、断面円形を呈する。表面の腐蝕は著しいが、全体にあまり加工は施され



第58図 B S D 220出土木器

ていない。B944は現長36.0cm、直径9.0cmを測り、断面円形を呈する。表皮を削り落し、上端は意識的にローソク状に切断されている。B945はB S D220西肩部に打ち込まれていた杭根である。底部は未加工のまま使用されている。現長30.0cm、直径9.0cmを測る。B946は現長26.4cm、直径10.0cmを測る。上端は意識的に切断されている。

その他（B953） 椅の残片かと思われる赤漆塗りの製品がある。

**B S D221**（第53図） Bトレンチ中央部や北側で検出した南北方向の溝である。北側はB S D220と合流し、南側は調査区外に続く。幅は0.8m前後で、深さは0.1mと浅く、暗灰色砂が堆積する。遺物は前期及び中期初頭の土器片があり、これらはこの溝が埋没する最終段階に廃棄されたものと考えられる。（岡本）

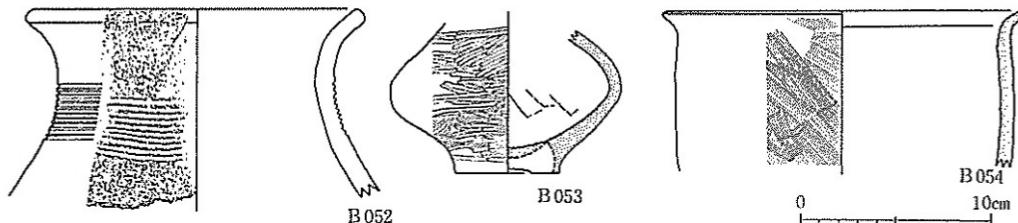
**B S D222**（付図9） B S D220より枝別れした溝で、Bトレンチ中央部北側で検出した。南北方向の溝でB S D215と一連の溝である。上幅1.0m前後、下幅0.4m前後、深さ0.3mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土と暗灰色微砂質土の上下2層に分かれる。遺物は前期の土器片と木製容器等の若干の木製品が出土している。（岡本）

#### 出土遺物

##### 〔土器〕（第59図）

総点数300点強の土器片が出土した。第I様式土器のみ出土し、これらのうち、壺1点（B052）、壺体部1点（B053）、甕1点（B054）を抽出する。

壺は口頸部が比較的短く、頸部の太いものである。B053については、底部円板の側部に粘土を繰りたし成形する状況が観察できる。（井藤）



第59図 B S D222出土土器

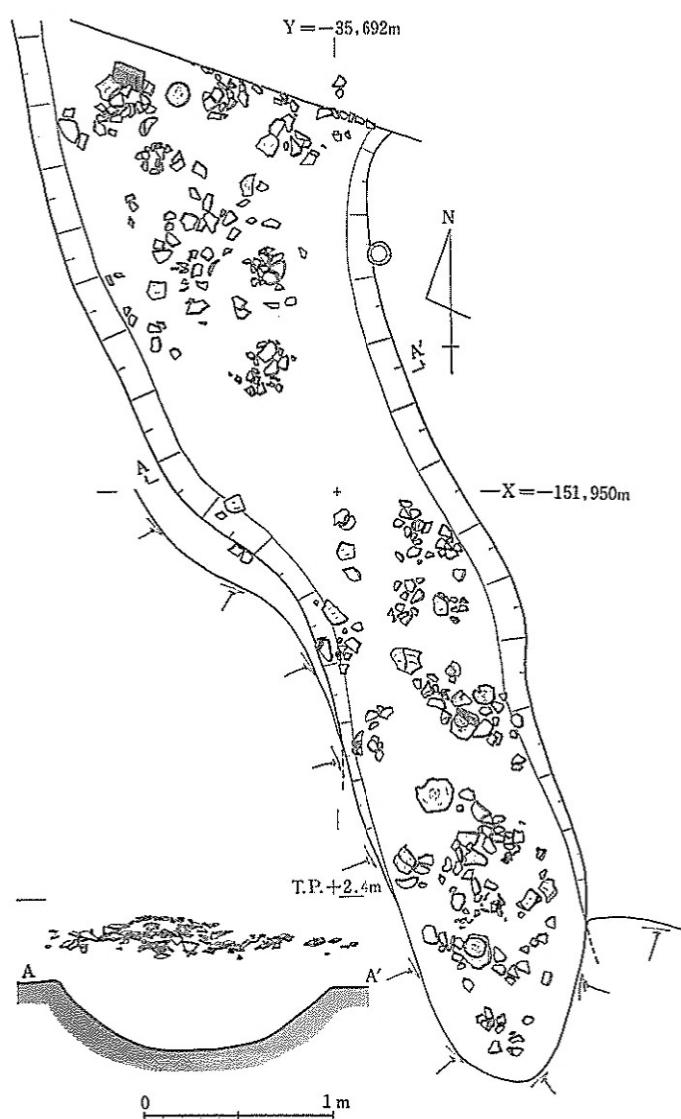
**B S D223・224**（付図9） Bトレンチ中央部や北側で検出した溝であるが、東側肩部のみを検出したにすぎない。B S D223とB S D224はB S K218によって切られているが、一連の溝である。深さは0.2～0.3m前後と考えられ、埋土は黒褐色粘土と暗青灰色砂質土の上下2層に大別できる。この溝は大きく弧状を呈し、その一部が4 Bトレンチ南西角で検出されている。遺物は前期の土器と若干の石製品が出土している。

#### 出土遺物

##### 〔石器〕（第76図・B912）

石庵丁の端部である。現長5.0m、幅3.5m、厚さ0.6mを測り、その形態から直線刃半月形態と思われる。刃部は両刃と考えられるが欠損している。材質は粘板岩である。

**B S D225・226** (第53図) Bトレンチ中央部北より、B S D220とB S D223の間で検出した小溝である。共に南北方向の溝で、両端は袋状に終る。B S D225は長さ5.7m、幅0.3m、深さ0.1m、B S D226は長さ4.0m、幅0.3m、深さ0.1mを測り、共に黒色粘質土が堆積する。遺物は前期の土器片が出土した。



第60図 B S D228遺物出土状態図

袋状に終る。北側はB S K223によって切られている。深さは0.25mを測り、埋土は黒色粘質土である。出土遺物は前期及び中期初頭の土器が出土した。(岡本)

#### 出土遺物

##### 〔土器〕(第62図)

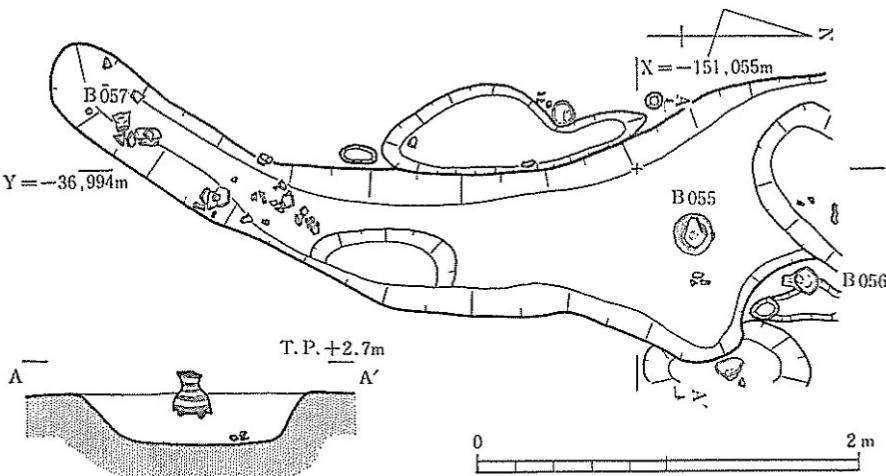
総点数150点強の土器片が出土した。大半が第Ⅰ様式土器であるが、1点の第Ⅱ様式壺がみら

#### B S D227・228 (第60図)

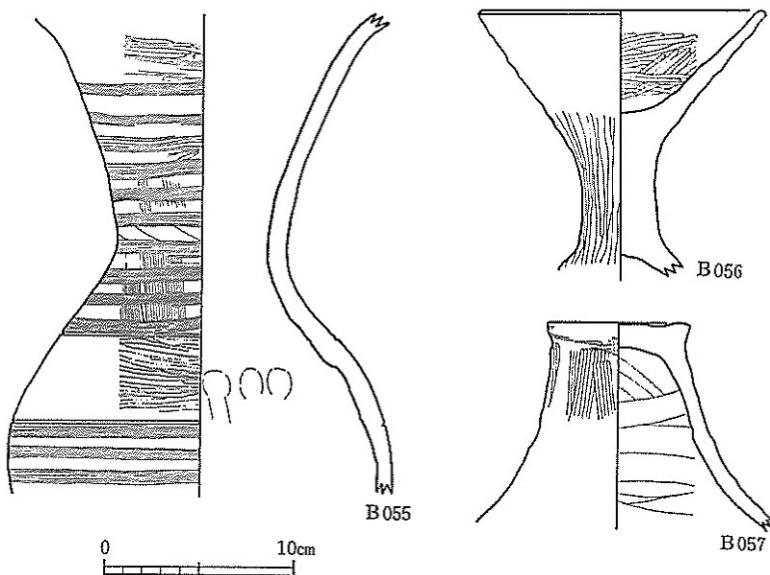
Bトレンチの中央部及び5Bトレンチにかけて検出した南北方向の溝である。B S D227とB S D228は一連の溝である。北側はB S D220と合流し、南側は上層遺構のB N R202によって切られている。上幅1.0~1.5m、下幅0.6~1.0m、深さ0.4mを測り、断面U字形を呈する。埋土はB S D220と同じで上下2層に分かれ、上層には黒褐色粘質土、下層には暗灰色微砂質土が堆積する。出土遺物は大量の前期土器とそれに混在して少量の中期初頭の土器がある。これらはすべて破片であり、出土した場所も溝の肩部よりレベルが高いところであるため、おそらく、溝が埋没した段階に廃棄されたものであろう。

**B S D229** (第61図) Bトレンチ中央部で検出した。弧状を呈した南北方向の溝で、幅は南側へ行くほど狭くなり、最後は

れる（B 055）。その他に第Ⅰ様式高杯1点（B 056）、甕蓋1点（B 057）を抽出した。高杯の出土は非常に珍しく、B地区中央トレンチ部でも数点にしかすぎない。（井藤）



第61図 BS D 229実測図



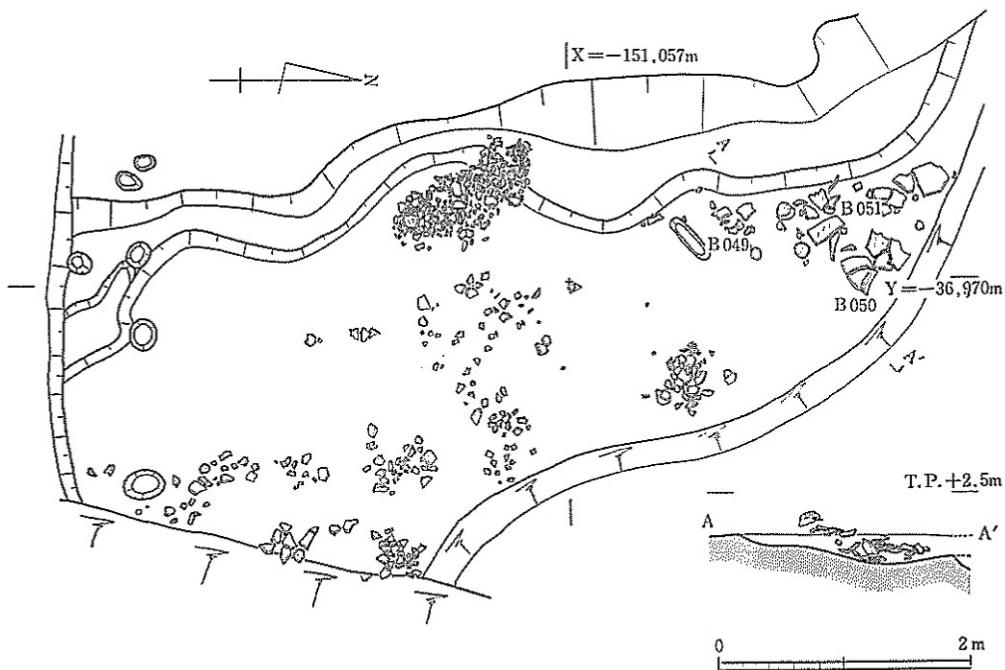
第62図 BS D 229出土土器

**BS D 230**（第63図） Bトレンチ中央部で検出した南北方向の溝であるが、東側の肩部は検出していない。南側は調査区外に続き、北側は上層のBNR 202によって切られているが、BS D 220と一連の溝と考えられる。出土遺物は前期及び中期初頭の土器と石器が出土した。（岡本）

#### 出土遺物

##### 〔土器〕（第64図）

第Ⅰ様式壺1点（B 048）、甕1点（B 050）、第Ⅱ様式壺1点（B 049）、第Ⅰまたは第Ⅱ様式壺体部1点（B 051）を抽出する。



第63図 B S D230遺物出土状態図

第Ⅰ様式壺は口縁端部に竈描直線文1条と縦線文を描き加えた文様、頸部には竈描沈線文8(+)条を施したものである。口縁部の広がりが大きく、頸部も長い形態は、第Ⅰ様式でも後半に属する大型品の典型と思われる。甕は如意形口縁をもつ倒鐘形体部のものである。口縁端部に刻目、頸部に7条の沈線文をめぐらす。体部が脹らむ大型品である。第Ⅱ様式壺は口縁端部に刻目、頸部には2条1組を3帯以上加えた複帶構成の竈描直線文がみられる。(井藤)

#### 〔石器〕(第65図)

B913は大型蛤刃石斧であるが、刃部を欠く。現長9.6cm、幅6.8cm、厚さ4.8cmを測る。表面全体に2次的敲打痕が多数認められる。材質は硬質砂岩である。

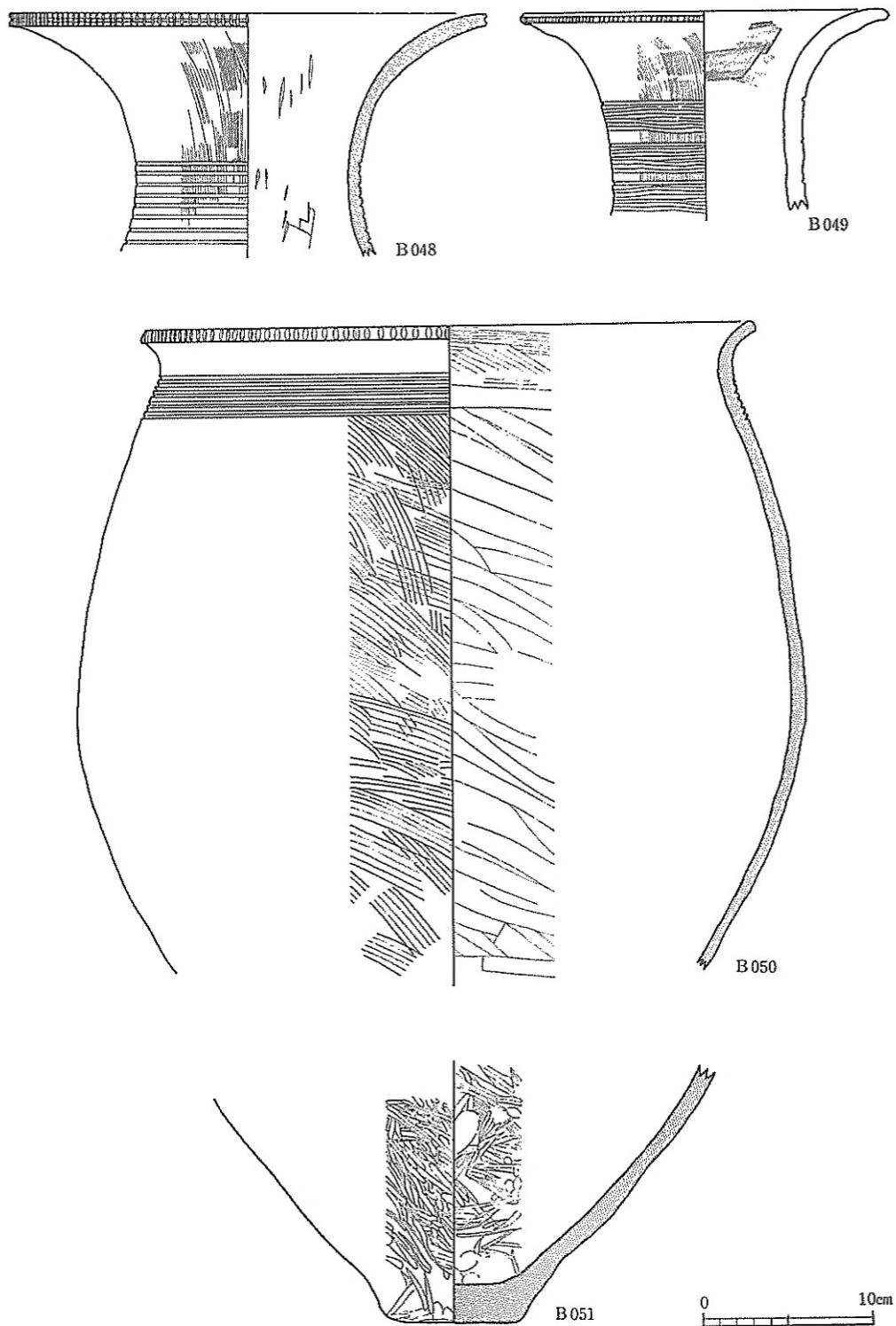
B914は石庖丁であるが全体の劣弱を欠く。現長9.5cm、幅4.3cm、厚さ0.8cmを測り、直線刃半月形態を呈する。両面に2次的敲打痕が残る。刃部は片刃ぎみの両刃であり、刃潰れが認められる。材質は結晶片岩である。

B915は大型石庖丁の未製品である。刃強を欠くが、直線刃半月形態を呈する。現長9.0cm、幅6.8cm、厚さ0.5cmを測る。材質は結晶片岩である。

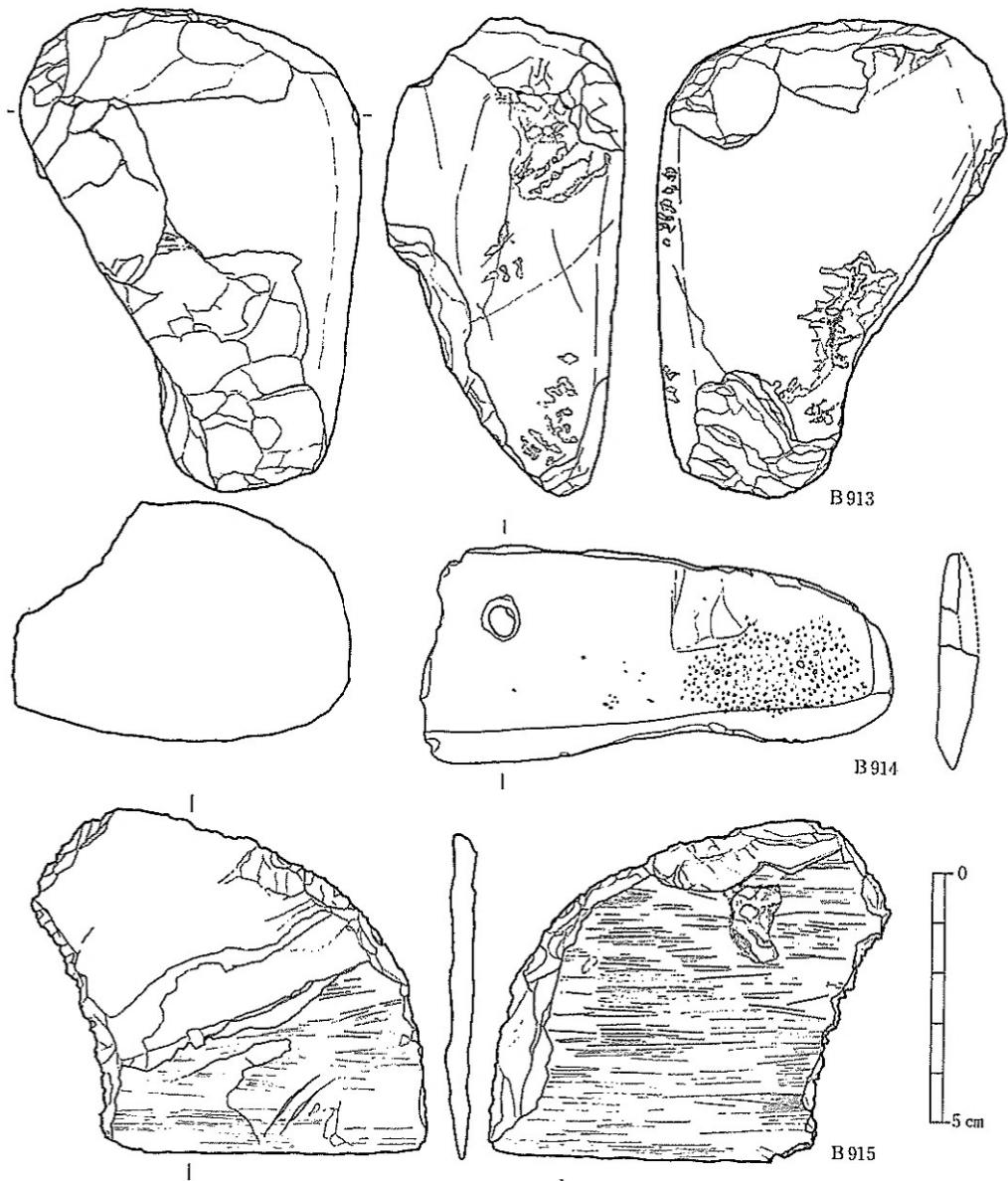
**B S D231**(付図9) Bトレンチ中央部で検出した南北方向の溝であるが、西側肩部のみを検出したにすぎない。大半はB S D230によって切られている。埋土は黒灰色粘質土で遺物は出土しない。

**B S D232**(付図9) Bトレンチ中央部で検出した東西方向の溝である。西側はB S K221に接続し、東側は調査区外に延びる。幅0.3m、深さ0.2mを測り、断面V字形を呈する。埋土は暗

灰色粘質土で、遺物は出土しない。B S D 230・231と重複しており、これらよりも新しい。なお、この溝にそってB S A 205がある。



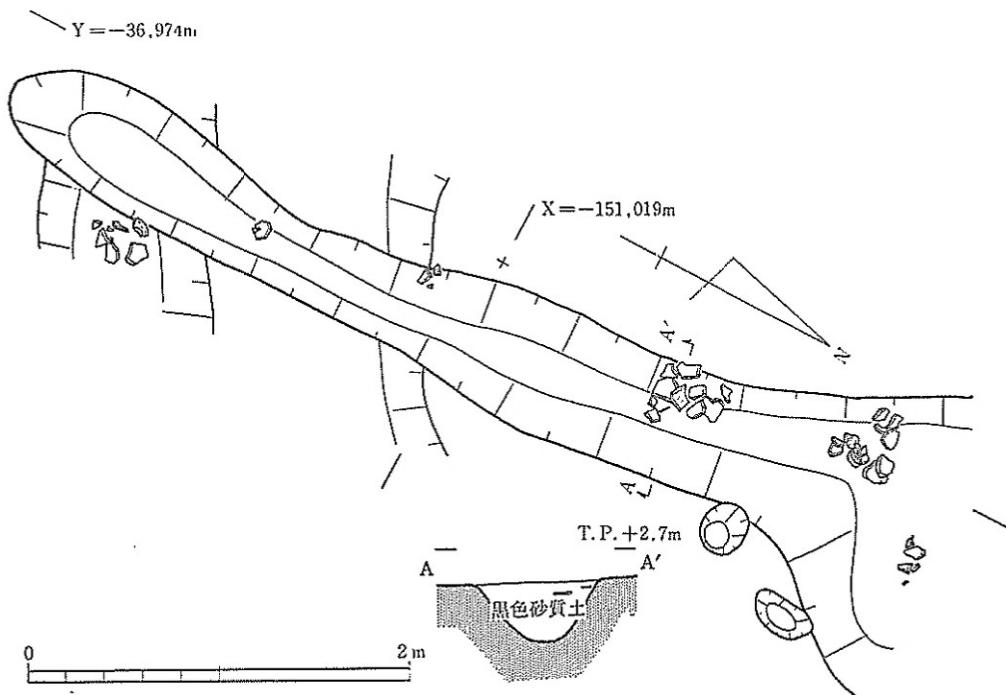
第64図 B S D 230出土土器



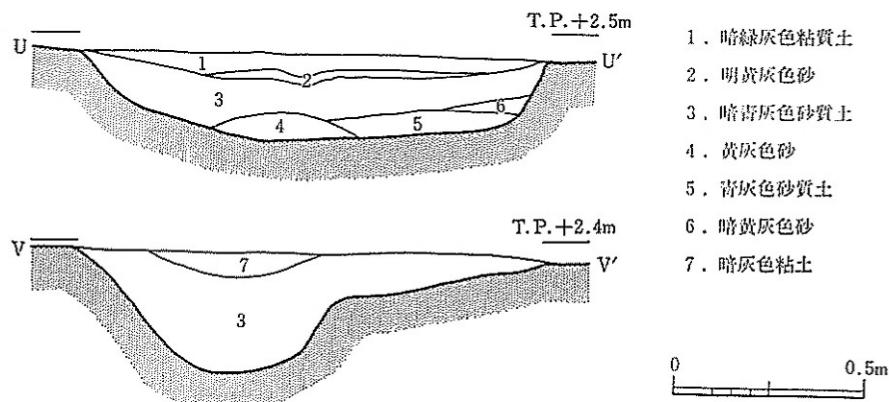
第65図 B S D230出土石器

**B S D234** (第66図) Bトレンチ中央部やや南側で検出した南北方向の溝である。北側はB S K226に接続し、南側は袋状に終る。上幅0.6m前後、下幅0.2m前後、深さ0.3mを測り断面V字形を呈する。埋土は黒色砂質土で、前期の土器が出土する。B S D235と重複し、それより新しい。

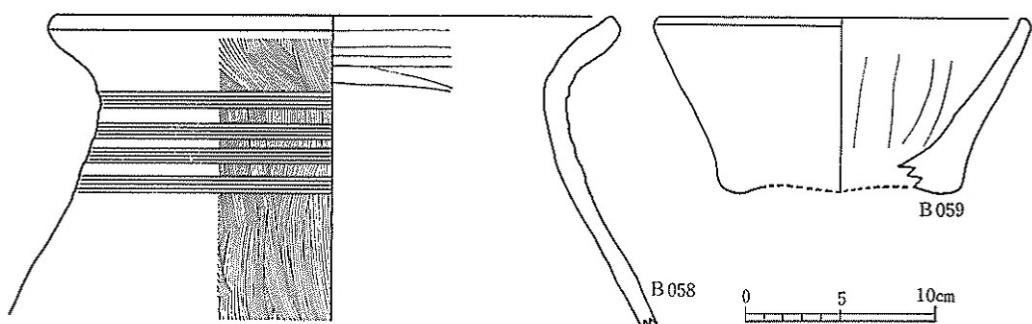
**B S D235** (第67図) Bトレンチ中央部やや南側で検出した東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。幅は1.0~1.2m前後、深さ0.25m前後を測る。埋土の状況は東側と西側では異なる。B S D234及びB S D237と重複しており、B S D234より古く、B S D237より新しい。出土遺物は前期及び中期初頭の土器片が出土する。(岡本)



第66図 B S D 234実測図



第67図 B S D 235土層断面図（実測地点は付図9参照）



第68図 B S D 235出土土器

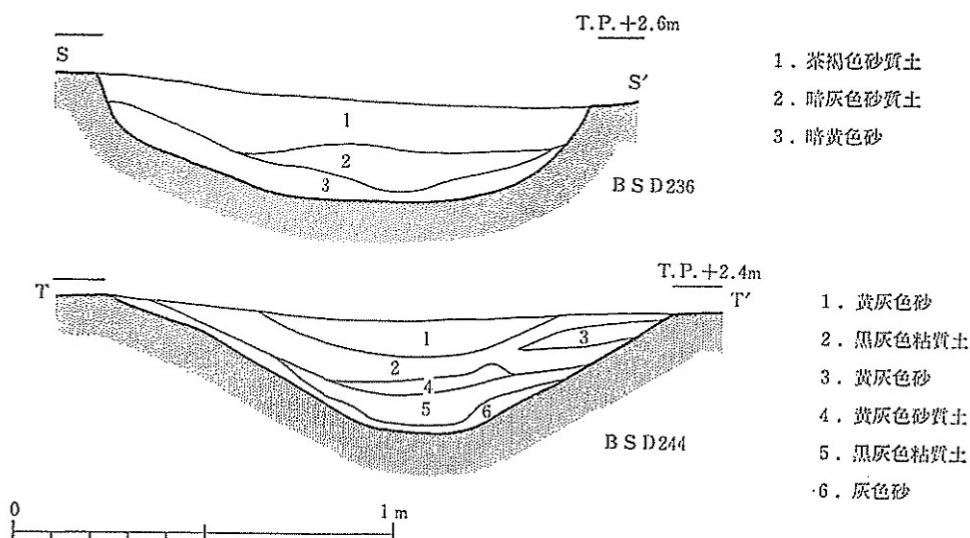
## 出土遺物

### 〔土器〕(第68図)

総点数300点強の土器片が出土した。第Ⅰ様式と第Ⅱ様式土器が混在する。うち3点に櫛描文様がみられる。第Ⅰ様式鉢1点(B059)と第Ⅱ様式壺1点(B058)を抽出した。

第Ⅰ様式鉢としたものは、実は、口縁端部分に二次的な再調整がみられ、壺底部の再利用品であろうと考えている。第Ⅱ様式壺は頸部に櫛描直線文4条を巡らした大型品である。第Ⅱ様式としては他に甕がある。これは口縁部に刻目ではなく、頸部に櫛描直線文をもつものである。(井藤)

**B S D236**(第69図) Bトレンチ中央部やや南側で検出した東西方向の溝である。東側はB S K235によって切られており、西側は8Bトレンチの方に続くものと思われる。またB S D237が分岐しており北側へ延びていく。幅は一定でないが、1.2m前後、深さは0.3m前後を測る。埋土状況は3層に分層でき、上層には茶褐色砂質土、中層には暗灰色砂質土、下層に暗黄色砂が堆積する。出土遺物は前期の土器片が少量出土した。



第69図 B S D236・244土層断面図(実測地点は付図9参照)

**B S D240**(第70図) Bトレンチ南側北よりで検出した東西方向の溝である。西側は袋状に終り、東側は7Bトレンチに延びると思われたが明確には検出できなかった。上幅1.6~1.7m、下幅0.5m、深さ0.2~0.3mを測り、埋土は4層に分層されるが、概して上層は粘質土、下層は砂質土である。出土遺物は、前期と中期初頭の土器及び木製品が出土した。

## 出土遺物

### 〔木器〕(第71図・B955)

B955は平面方形の木製容器であるが、側面のたちあがりは認められない。長さ15.3cm、幅14.0cm、高さ2.6cmを測り、底部には柾目に沿って2本の薄い脚部が作り出されている。両面とも柾目の方向に削り、加工されているが、雑であまり丁寧でない。材質はヤマグワである。